

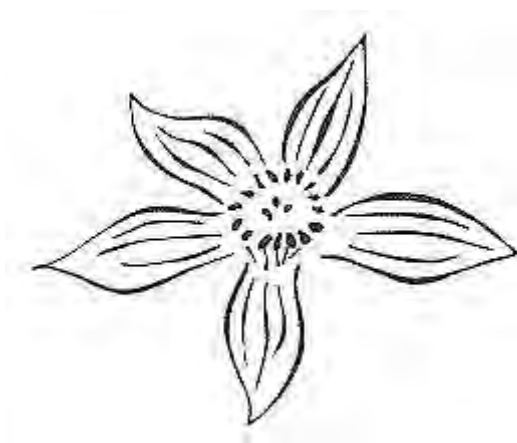
「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」

令和3年度研究開発実施報告書

研究構想名

みさこう・せんたんプロジェクト

～佐田岬半島・地域デザイン人材の育成～



愛媛県立三崎高等学校

巻頭言

愛媛県立三崎高等学校
校長 和田 俊之

文部科学省からの「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」の指定を受け、平成31年度（令和元年度）より3年間、研究に取り組んでまいりました。本校では、平成27年度より、学校全体として取り組むような体系的なシステムが確立されていなかったものの、地域住民の学校行事への参加や生徒の地方祭等の地域諸行事への参加など、地域との交流活動を積極的に行ってきました。また、週に1時間の総合的な学習の時間を活用し、地域連携活動に取り組むなど、地域活性化事業を「三崎おこし」と名付け、年次進行で取り組んできました。平成28年度には「地域に生き地域とともに歩む高校生育成事業」、平成29年度には「コミュニティースクール推進校」、平成30年度には「地域を担う心豊かな高校生育成事業地域活性化プロジェクト」の指定を愛媛県教育委員会より受け、地域協働活動の研究に取り組んできました。また、平成28年度より、地元伊方町「伊方町まち・ひと・しごと創生総合戦略」の中核事業として設立された「伊方町移住・定住促進協議会」の構成メンバーとして連携活動にも参加するなど、地域とともに積み上げてきた地域協働活動を質・量ともに高め、広げることができました。本事業が開始された令和元年度には「総合的な探究の時間」に「PR班」、「カフェ班」、「商品開発班」、「ツアー班」、「アート班」、「情報・防災班」の6班に分かれて、全学年が同時間にテーマごとに分かれて実施しています。さらに、三崎高校でしかできない学びの幅を広げるため、令和2年度には「未咲輝（みさき）学」という学校設定科目を創設し、学年ごとにテーマを設定して探究活動に取り組んでいます。1年生は地域理解学習、2年生は地域課題の発見と解決、3年生は将来ブーメラン人材（起業方法やビジネスプラン）について学習し、従来の教育課程や教科の枠にとらわれない、「地域の良さを仕事につなげる起業の仕方」や「地域の伝統文化の継承」などについて探究的な活動を行う地域連携型の授業を展開しています。これらの活動によって、今まで以上に地域の方々和三崎高校生のつながりが深まりました。地域の方々からは、「三崎高校の生徒に手伝ってもらってありがたかった。またお願いしたい。」といった声が多く聞こえてくるようになりました。また、生徒の感想では、「地域行事やイベントを通して、地域の方々に笑顔になっていただくことができ、この活動に強くやりがいを感じる事ができた。人前に立って何かをするとき、不安やプレッシャーが勇気や自信に変わり、一歩大人に近づくことができたと感じた。」このように、生徒たちが活動を通して、地域の活性化につながっていることを実感できるとともに、自己肯定感の高まりや自主性・積極性が育まれてきました。現在、従来の「三崎おこし」は「みさこう・せんたんプロジェクト」に名称を変更し、生徒主導、地域ありきの地域協働カリキュラムを今まで以上に充実したものに構築しています。

旧三崎町には、古くから「裂織り」と言われる佐田岬半島の伝統的な織物があります。「裂織り」とは、古木綿を集め、その古木綿を裂いた糸を使って機織り機で織る技法のことです。三崎高校は、地域と生徒、地域と学校、生徒と学校といったそれぞれの結び付きの中で「裂織り」のように、美しい織物になるよう、しっかりと織り合わせていきたいと思えます。三崎高校（みさこう）最高 さあ行こう！生徒と地域を育てる町の拠点として、いつまでも愛される学校を、そして、「み」んなが「さ」いこうに「き」らきら輝ける学校にしていきます。

本報告書は、3年間の研究成果をとりまとめたものです。本報告書を御高覧いただき、御教示いただきたいと存じます。最後になりましたが、3年間の本校の研究に御支援、御指導を賜りました関係者の皆様方に感謝申し上げます。

目 次

- 巻頭言
- 目次

I	概要	1
1	研究開発の概要	2
2	実施体制の概要	4
3	管理・運営方法	7
4	管理機関の取組・支援実績	10
5	研究開発概念図	14
6	ロジックモデル	15
II	組織の取組	16
1	過年度の取組	17
2	コンソーシアム	17
3	管理機関及びコンソーシアムにおける主体的な取組について	24
4	伊方町（伊方町移住・定住促進協議会）との連携について	25
5	集落等コミュニティに特化した課題解決カリキュラムの開発	25
6	校内体制	26
III	研究開発	28
1	地域を担う人材育成のためのプログラム	29
(1)	地域資源活用プログラム	29
(2)	課題研究	33
(3)	県外フィールドワーク	42
(4)	地域おこし講演会	49
(5)	地域理解	51
2	集落等コミュニティ課題解決・実践プログラム	53
3	各教科・科目における取組	55
4	視察研修	57
5	成果発表会（未咲輝-SENTAN-発表会）	59
IV	評価・分析	67
1	ループリック	68
2	未咲輝-SENTAN-発表会（オンライン）での感想	69
3	目標と実施状況	72
4	次年度以降の課題及び改善点	73
V	関係資料	75
1	新聞記事	76
2	事業案内ポスター	84
3	カリキュラム開発等専門家報告書	85
4	令和3年度教育課程表	114
5	令和3年度「総合的な探究の時間」年間指導計画	117
6	令和3年度学校設定科目「未咲輝学」年間指導計画	120

I 概要

1 研究開発の概要

2021年度 地域との協働による高等学校教育改革推進事業 研究開発の概要

指定期間	ふりがな	えひめけんりつみさきこうとうがっこう				②所在都道府県	愛媛県
2019～2021	① 学校名	愛媛県立三崎高等学校					
③対象学科名	④対象とする生徒数					⑤学校全体の規模	
	1年	2年	3年	4年	計	設置学科	普通科
普通科	55	52	28		135	生徒数	135名（1年生55名、2年生52名、3年生28名）
⑥研究開発構想名	みさこう・せんたんプロジェクト～佐田岬半島・地域デザイン人材の育成～						
⑦研究開発の概要	<p>本校のこれまでの取組を基に、「地域デザイン」の観点から高度化及び再編成を行う。具体的には、地域を担う人材育成のためのプログラムの実施、「地域デザイン・プログラム」に基づいた集落等コミュニティ課題解決・実践プログラムの実施、集落等コミュニティに特化したバックキャスティングの視点・手法から学ぶ課題解決カリキュラム（地域デザイン・プログラム）の開発等を行う。</p>						
⑧研究開発の内容等	⑧-1全体	<p>(1) 目的・目標</p> <p>伊方町で唯一の高校である本校においては、進学や就職を機に都市部へ転出する生徒が多く、地域の担い手不足が深刻化している。このような状況の中、再び地域に戻り、進学先や就職先で身に付けた広い視野、高い専門性、豊かな人脈を活用して、生業・事業・産業を創出する、「ブーメラン人材」を育成することにより、地元への人材の定着率を向上させるとともに、自らがブーメラン人材としてパイプとなることで移住者を増加させ、持続可能な地域を作ることのできる地域人材の育成を本研究開発の目的とする。</p> <p>ブーメラン人材に求められる資質、能力として、郷土愛や地域活性化への使命感、課題解決力、ネットワーク構築力とコーディネート力等が挙げられる。総合的な学習及び探究の時間（課題解決学習）「三崎おこし」等で培ってきた地域協働活動を通して地域理解、地域おこしの方策立案、実施の力（生きる力）を更に高度化するとともに、ICT等テクノロジーの進化など時代の変化にも対応した、これからの地域に影響力を持つ人材育成を目標とする。</p>					
		<p>(2) 現状の分析と研究開発の仮説</p> <p>本校は伊方町唯一の高校として、これまでも地域活力基盤としての中核を担うべく、地域学習「三崎おこし」を総合的な学習の時間等を活用して進めてきた。過去5年間に積み重ねてきた三崎おこしでは、主に三崎地区の住民や団体などの地域ニーズに応える形で多くの活動を実践してきたが、個別の地域ニーズに応えることを第一義としてプログラム運営を進める中で、体系立った効果に導きづらい側面も見られた。</p> <p>一昨年度より、そうした運営課題を踏まえ、生徒の自主的な取組を活動の中心に据えながら、より高度化した取組へのシフトを目指し、先進的な活動を企画・運営した。</p> <p>これまでに3回開催した「せんたんミーティング」（愛媛県内・外の高校生や大学生を招聘し、各地の地域活性化活動事例を発表・共有し、より高度な活動に向けたネットワーク形成の場として交流を持つ高校生シンポジウム）では、三崎高校生がこれまでに参加したシンポジウムを参考にし、参加校それぞれの地域活性化プランを他校の生徒も交えてブラッシュアップする活動を実施するなど、毎回新しい取組を取り入れてきた。</p> <p>また、廃校となった地域の中学校で行っているイベントも、「みさこうマルシェ」として、多くの外部団体や他校生にも参加してもらおうなど、より地域と連携した活動として実施した。</p> <p>さらに、地区全体を劇場と見立てて、地域住民との交流に重点を置いて行った総合的アートイベントである「せんたん劇場」の開催などの新たな取組も始まった。</p> <p>以上のように、本事業の指定を受け、より体系的かつ高度化された取組を行うことで、</p>					

		<p>「高校生自身のキャリアアップ」並びに「地域活力の創出」を効果的に導くことのできる新たな枠組みが形作られ始めている。</p> <p>このように、本事業の実施を通じ、体系的な学び効果の設定、改善が可能となり、カリキュラムへの対象者拡充や、地域関係者の増大により、地域への波及効果も増大すると考えられる。</p> <p>また、本事業においては、集落課題解決プログラム、地域資源活用プログラム、特産品の開発、県外フィールドワーク、地域おこし講演会、情報発信を活動の柱としている。これらの活動を通して、地域の魅力を再発見し愛着を深めるとともに、本校が生徒に身に付けさせたい「計画力、判断力、実践力、調整力、コミュニケーション力」が身に付き、将来地域に帰り、地域のリーダーとなる「ブーメラン人材」の育成につながると考えている。</p>
<p>⑧ -2 具 体 的 内 容</p>		<p>(1) 地域との協働による探究的な学びを実現する学習の実施計画</p> <p>これまで、本校における地域連携活動の中心となっているのが、週に一度の「総合的な探究の時間」である。しかし、本校の地域協働学習活動は、年々その質・量ともに高まりを見せており、この時間だけで全てをまかなうことが困難であった。また、学年ごとに継続的に積み上げ、3年間を通して体系的に学習する機会も必要であると考え、昨年度より学校設定科目「未咲輝学」を設置した。また、各教科・科目において地域との協働による探究的な学びの内容を取り入れる研究を進めていく予定であり、全ての教育活動において地域と協働した取組を取り入れることを目標としている。</p> <p>週1時間の「総合的な探究の時間」を全校縦割りの探究活動、週1時間の学校設定科目「未咲輝学」を学年ごとのテーマに分かれた理論学習及び実践の場とすることで、活動の全体的な充実も図る。</p> <p>「総合的な探究の時間」は、六つの研究班に分かれて外部人材と協働しながら探究活動に取り組み、社会で必要とされる力を育成するとともに、地域への愛着心を育む。「未咲輝学」の時間は、SDGsの観点から地域をとらえる活動、RESASを活用したビッグデータの分析と活用、起業家育成プログラムの実施などを段階的に行うことで、「ブーメラン人材」の育成を目指す。</p> <p>(2) カリキュラム・マネジメントの推進体制</p> <p>教育課程委員会において、各教科等における取組内容や、実施時間の原案を年度当初に作成する。その原案を基に、カリキュラム再編のための校内検討会議を開き、実際の運用や実施状況についての情報共有を図る。また、定期的に行われるコンソーシアム活動においても、実施状況等を報告し、適宜、指導・助言を受けることとする。</p> <p>(3) 必要となる教育課程の特例等 特になし</p>
<p>⑨その他 特記事項</p>		<p>これまでに、地域の廃校を利用したイベントの企画・実施、地域の菓子舗との協働で地域の新たな特産品として研究開発した「みっちゃん大福」、海岸清掃のボランティアで拾った漂着物であるブイを再利用した「ブイアート」プロジェクト、愛媛大学、伊方町との連携で作成した健康体操「みさこうたいそう 115」等、地域集落の中に生徒が入り、地域住民との対話の中から発せられた「地域課題」を把握し、その課題改善に向けた実践活動等に取り組んでいる。今後も、その地域や対象とする地域住民等と柔軟な連携を取りながら、これらの活動がより良いものとなるように改善しながら継続していきたい。</p> <p>平成27年度「土曜授業推進事業」（文部科学省） 平成28年度「地域に生き地域とともに歩む高校生育成事業」（愛媛県教育委員会） 平成29年度「コミュニティスクール推進校」（愛媛県教育委員会） 平成30年度「地域を担う心豊かな高校生育成事業地域活性化プロジェクト」（愛媛県教育委員会）</p>

2 実施体制の概要

ふりがな	えひめけんきょういくいいんかい	ふりがな	えひめけんりつみさきこうとうがっこう
管理機関名	愛媛県教育委員会	学校名	愛媛県立三崎高等学校

2021年度 地域との協働による高等学校教育改革推進事業 実施体制の概要

1 管理機関・学校の概要

(1) 管理機関名、代表者名

管理機関名：愛媛県教育委員会

代表者名：田所 竜二

(2) 学校名、校長名、研究を実施する学科

学校名：愛媛県立三崎高等学校

学科：普通科 専門学科 総合学科

校長名：和田 俊之

2 取組内容

本校では、地域おこし活動として6年間にわたり、地域との協働による学習活動を行ってきた。主な取組として、地域の菓子舗と協働して地域の新たな特産品として開発した「みっちゃん大福」、漂着物であるブイ（直径30センチメートルほどのプラスチック製の浮き）を再利用した「ブイアート」プロジェクト、県内外の地域協働活動に取り組む高校生、大学生を伊方町に招いての高校生シンポジウム「せんたんミーティング」の開催、本校オリジナルの健康体操「みさこうたいそう115」の作成、地域PRのための映画「せんたんビギンズ」の撮影などが挙げられる。

これらの活動に加え、一昨年度は、廃校となった中学校を舞台として行った「みさこうマルシェ」や、地域を一つの劇場と見立てた総合的アートイベント「せんたん劇場」の開催や、本校の地域協働活動を生徒自らがまとめた「せんたん新聞」の発行など、新たなことに取り組んできた。

本事業では、上記のような先進的な地域課題研究等の実績を踏まえた、地域人材育成に関する発展的な実践を実施する。

(1) 地域を担う人材育成のためのプログラムの実施

今年度までに、「総合的な探究（学習）の時間」を中心に進めてきたプログラム「三崎おこし」を「地域デザイン」の観点から見直し、取捨選択、統合、再編等により効果的な活動へと組み直す。また、これまでは本校の立地上、学校周辺を中心に行ってきた活動を町内全体の活動へと発展させていく。

ア 地域資源活用プログラム

本プログラムは、これまで地域において活用されていなかったものを新たな資産として捉え直し、活用していくことで新たな価値を創造し、地域の活性化につなげていくというものである。すでに、地域に存在しているものを活用するため、本校・地域ともに負担が小さく、地域住民の愛着も得られやすいと考えている。具体的には、地域のPRポスターやコマーシャルの作成、東日本大震災以降建設された海岸防潮堤への壁画制作、地元小・中学校と連携したブイアート制作授業、廃校などの休眠施設や手入れの及んでいない地域の公園の再生や活用などの取組を計画している。

イ 特産品の開発

新たな特産品の開発に取り組み、将来的には、そこから新たな仕事を生み出すことに挑戦していく。また、地域文化の担い手として、伝統文化を継承していくための特産品開発にも取り組む。三崎地区には、古くから「裂織り」と言われる織物がある。しかし、現在は保存会の会員のみが文化を守るために製作しているのみとなっている。

そこで、高校生が裂織り文化を学ぶとともに、新しい視点を持った商品開発を進めていくことで地域文化の継承・発展に寄与していくものとする。また、本校中庭で栽培している「だいたい」や、伊方町の新たな特産品となりつつある、はちみつを活用した商品開発も行っていく予定である。

本校の位置する佐田岬半島は、両側を瀬戸内海と宇和海に挟まれた特徴的な景観を有しており、近年サイクリングコースとしての人気が高まっている。そこで、高校生の目線からの新たなサイクリングコースの開発やサイクリングイベントの実施についても研究を進めていく。

ウ 県外フィールドワーク・地域おこし講演会・全国サミット

本校の生徒にとって、自分たちの知らない先進的な事例に触れることは大きな衝撃であり、その後の変容は非常に大きい。これまでも、講演会や外部人材との交流をきっかけに地域協働活動のリーダーになったり、進路決定を行ったりした生徒も少なくない。

そこで、本事業において、先進的な取組をされている方を講師に招いた講演会や、実際のフィールドワークを通して生徒の変容を図ることとする。また、それらの活動を通して築かれるネットワークが、将来「ブーメラン人材」として地域に戻ってきた際に必ず役に立つものになると確信している。

また、本事業における全国サミットへの参加を通して、全国の高校の先進的な取組やカリキュラムについて学び、次年度の取組に生かすとともに、全国の高校生と新たなネットワークを構築することで、生徒の大きな成長のきっかけとしたい。

エ 情報発信（アプリ開発、フリーペーパー制作等）

本校では、これまで学校ホームページや町の広報誌などに情報を掲載し、情報発信に努めてきた。特に、学校ホームページにおいては、開校日には毎日更新したり、見やすいレイアウトに変更したりするなど工夫を重ねてきたが、本校と接点の少ない人に情報を届けるには至っていない。

そこで、3年前から公式フェイスブックページを開設し、学校ホームページと連携しながら情報発信を行っている。本事業においては、情報発信を更に強化する目的でアプリの開発やフリーペーパーやガイドブックの制作を行う。本校の情報だけではなく、伊方町の名所やイベント等も併せて紹介ができる情報誌を制作することで、より多くの人へ情報を届けることができると考えている。また、それら刊行物を多数の人が集まる場所に設置させてもらうことで、各刊行物をきっかけに本校に興味を持ってもらい、学校ホームページや公式フェイスブック等で詳しい情報を見てもらうことで、本校の関係人口を増やすということに取り組む。

また、集落等コミュニティ課題解決・実践プログラムで実施した、環境、文化、防災等の課題研究の成果を公式フェイスブックやフリーペーパー等を活用して情報発信することで、地域に還元していきたい。

(2) 集落等コミュニティ課題解決・実践プログラムの実施

「地域デザイン・プログラム」に基づき、伊方町を旧伊方町・旧瀬戸町・旧三崎町の三つのエリアに区分した「地区」や、その他コミュニティに入って活動を行う実践プログラムを実施する。

伊方町は日本一細長い佐田岬半島に位置しているため、小さな集落が点在している。その中には、限界集落と呼ばれるような集落も少なくない。それらの集落と向き合い、自分たちの手で集落の課題を解決するための知識や技術を身に付けることを目指し、生徒が実際に集落の中に入り、フィールドワークを中心とした、より実践的な課題発見・解決学習を行う。昨年度は、先行研究として個別の「集落」に生徒が入り、地区住民との対話の中から発せられた「地区課題」を把握し、その課題改善に向けた実践活動を行った。

本事業においては先行事例を基に活動を進め、積極的に地区課題に取り組んでいきたい。

具体的には、海岸の清掃活動を行い、その際に拾った漂着物等を再利用したイベント（ブイアート、ブイリンピック等）の実施や、地区ごとの伝統行事や文化の継承、各地区での避難所の開設・運営訓練等の自然災害に対する防災対策活動等を行う。

一つの成功事例が生まれることにより、同様の課題を抱える他地区での課題解決や、他の課題事例解決の礎となるのではないかと期待している。

(3) 集落等コミュニティに特化した課題解決カリキュラム（地域デザイン・プログラム）の開発

既存の枠組みでは捉えづらい「地域課題の設定(現状)」や「目指すべき具体的な地域の将来像(未来)」を見立てる構想力・企画力を身に付けるとともに、目標とする形を具体的に描き、実現していくプロデュース力（実行力・コーディネート力・修正力等）を、バックキャストの視点・手法から学ぶ課題解決カリキュラムを開発する。

このような活動を通して地域への愛着心を育み、将来地域に戻り、答えのない地域課題に対して自ら積極的に取り組む中で、自らの答えを出し、周囲の人を巻き込むことのできる人物「ブーメラン人材」を育成することを目的として、本事業に取り組んでいく。

カリキュラムにおいては、1年次を「地域理解」、2年次を「地域課題の発見・解決」、3年次を「ブーメラン人材として」と位置付けて活動させる。

1年次の「地域理解」では、地域見学や地域拠点における交流等を通して、伊方町や自分の住んでいる町への愛着や誇りを醸成する。

2年次の「地域課題の発見・解決」では、RESASを活用して伊方町の情報を客観的に整理したり、他地域との比較を行ったりすることで地域課題を発見し、その解決策の企画・実施を行うことで、ブーメラン人材の育成に必要な力を育む。

3年次の「ブーメラン人材として」では、2年間の活動を基に、活動報告書の作成や成果発表会の実施等を通して、研究成果の地域への還元を図るとともに、起業について学習し、自ら仕事を作り出すという考え方やその手法を学ぶことで、将来ブーメラン人材として地元に戻ってくる生徒を増やすことができるような働きかけを行う。

3 管理・運営方法

(1) 高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者名
愛媛大学	学 長 仁科 弘重
専修大学	学 長 佐々木 重人
NPO法人佐田岬ツーリズム協会	理事長 宇都宮 圭
NPO法人さだみさき夢希会	代 表 加藤 智明
NPO法人二名津わが家亭	代 表 増田 克仁
佐田岬みつけ隊	隊 長 道元 平
伊方町	町 長 高門 清彦
一般社団法人E. Cオーシャンズ	代 表 岩田 功次
MIGACT	代 表 濱田 規史
愛媛県教育委員会高校教育課	課 長 島瀬 省吾
公営塾未咲輝塾	塾 長 辻 良隆
愛媛県立三崎高等学校	校 長 和田 俊之

本事業におけるコンソーシアムについては、管理機関、地元自治体職員、NPO団体、教育関係者等に参加していただき、様々な視点からの意見を取り入れつつ運営を行っていく。オブザーバーとして、地元小・中学校の教職員等に参加していただく予定である。

(2) 将来の地域ビジョン・求める人材像等の共有方法

少子高齢化が急速に進む伊方町において、人口減少、高齢化率の上昇は大きな課題となっている。総務省の統計によると、現在 10,000 人弱の人口は今後 20 年間で 20%減少し、老年人口は約 10%上昇し、50%を超えると予想されている。現在、すでに多くの「限界集落」を抱える伊方町は、このままでは町の存続自体が危ぶまれる状態となっている。また、町の基幹産業である第一次産業も販売金額が減少し続けており、町の衰退が進行している。そこで、伊方町では平成 28 年度より、「伊方町まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定し、「伊方町・移住定住促進協議会」を発足させるなど、町ぐるみで人口流出対策に取り組み始めた。本校も、伊方町唯一の高校として構成メンバーに加わり、伊方町と連携し魅力化創出活動に取り組んできた。高等学校の消滅が町の衰退に拍車をかけることは、全国的な先例が示すとおりである。しかし、その一方で、魅力化の推進による高校の活性化が地域全体に好影響をもたらすことも、島根県の隠岐島前高校等の事例により広く知られている。本校でも、「高校の活性化なくして地域の活性化なし、地域の活性化なくして高校の活性化なし」という信念の下、様々な取組を行ってきた。

このような地域の現状において、高校生が地域行事の担い手、文化の継承者として活動に参加していくことはもちろん、高校卒業後、一度町外に出た生徒が再び地域に戻り、進学先や就職先で身に付けた広い視野、高い専門性、豊かな人脈を活用して、生業・事業・産業を創出する、「ブーメラン人材」となることが求められている。その結果、地元への人材の定着率を向上させるとともに、自らがブーメラン人材としてパイプとなることで移住者を増加させ、持続可能な地域を作っていくことが「ブーメラン人材」としての大きな役割である。

これまでは、共に活動に取り組む過程や成果発表会、学校ホームページ等を通してこれらのビジョンを共有してきた。しかし、それはあくまでも本校と関係を持っている人に対しての情報発信であったことは否めない。そこで、3年前から学校ホームページに加え、公式フェイスブックページを開設し、より多くの方に本校のビジョンを届けることができるよう、取り組んでいる。また、昨年度より成果発表会をオンラインで配信するなどの工夫をし、コンソーシアムのメンバーを含め、多くの方が参加しやすい体制を整えている。また、本年度はコンソーシアムでの情報共有会を年間 2 回実施するなど、綿密な連携を行っていく予定である。

(3) コンソーシアムにおける研究開発体制

コンソーシアムには、愛媛県教育委員会、伊方町、県内外の大学、地元NPO法人、地域活動団体、公営塾塾長等に参加していただいている。

コンソーシアム代表者会は年2回の開催しており、それまでに立てられた計画や、実施状況に基づく助言、それらを踏まえた上で今後の提案等を行っていただいている。また、コンソーシアム参加者同士の積極的な情報交換や情報共有を行い、できるだけ多くの立場、視点からの提言をしていただくことで、高校単独では企画、実施が難しいプログラム等の開発を行っている。また、カリキュラム再編の検討のための校内会議や生徒代表会議の内容等も共有することで、より現場に即した話し合いを行うことができるようにしたい。

年度当初と年度末には、ループブックを用いて生徒の変容を確認する予定であるので、コンソーシアムにおいてもその結果を分析していただくことで、目的の達成に向けた次年度への改善につなげ、持続的かつ発展的な研究開発体制を構築したい。

(4) カリキュラム開発等専門家の配置

伊方町文化財保護審議会会長である黒川信義氏とMIGACT代表である濱田規史氏を「カリキュラム開発等専門家」として位置付け、会計年度任用職員としてカリキュラムの開発及びカリキュラムにおける実践活動のコーディネートを担っていただく。黒川氏は伊方町内の歴史や文化、地質等に対する造詣が深いため、主に1年生の「未咲輝学Ⅰ」の授業において、1年生に対する地域理解活動を、濱田氏は起業家育成の専門家として「未咲輝学Ⅱ」「未咲輝学Ⅲ」の授業を担当していただいている。

(5) 地域協働学習実施支援員の配置

校内に設置されている、伊方町が運営している公営塾塾長辻良隆氏に地域協働学習実施支援員として活動していただいている。本校生徒の約5割以上が塾生となっており、本校生の実態を把握されているため、生徒の個性に応じた支援が可能である。また、地域の方や、他地域の地域おこし協力隊員など外部の方との関わりも深いため、ファシリテーターとしてスムーズかつ、的確な支援をしていただけると考えている。

(6) 運営指導委員会の体制

運営指導委員会は、年に2回開催し、愛媛大学社会連携推進機構 秋丸國廣准教授、文部科学省CSマイスター 西村久二夫氏、いよぎん地域経済研究センター取締役統括部長 森洋一氏、三崎小学校校長 野井純氏、三崎中学校校長 山本将弘氏、伊方町総合政策課課長 菊池嘉起氏、伊方町教育委員会事務局長 阿部茂之氏、伊方町町見郷土館館長 高嶋賢二氏等に依頼し、事業の運営や実施状況等について専門的見地からの指導・助言、成果に関する評価をいただいている。

(7) 研究成果報告・事業成果の検証

本校では、近年、「総合的な探究の時間」の研究発表会を年に2回程度実施している。この発表会は校内向けの取組であり、学校全体として外部に発信する機会が少ない。そこで、研究発表の機会を増やしたり、SNSを活用したオンライン配信を行ったりすることで地域内での研究成果の普及を計画している。また、近隣の高等学校でコンソーシアムを作り、その成果を発表し合うなど地域内での横の連携の強化を図りたい。地域外への発信については、フェイスブックページでの公開を活用している。また、事業計画にも含まれているフリーペーパーの作成・配布等を通して成果をより広く普及していく。

事業成果の検証については、ループブックを用いて自己の振り返りを行わせ、それを基に研究グループごとに振り返りを行う。さらに、その結果を発表会などを通して生徒間で共有することで、校内の横の連携を深めるとともに次年度への深化を図らせる機会としたい。また、カリキュラム再編の検討のための校内会議やコンソーシアム等においても、生徒のループブック分析や学校全体や各研究グループでの振り返りの中で話し合われた内容、フリーペーパー等の成果物から事業成果を総合的に検証していくこととする。

(8) 管理機関又はコンソーシアムによる主体的な取組・支援

コンソーシアムを形成し、地域協働活動を組織的に行うとともに、多様な視点からのアイデアを出し合うことで、より良い活動体制を構築することとする。

具体的には、年2回の活動を行った。コンソーシアムは立案された計画や、実施状況に基づく助言等を踏まえて、プロジェクト全体に対する提案・支援等を行っている。実際の活動において求められる支援として、実施中のプロジェクトに対する新たな視点からの提言や、その実現を可能にする外部人材の紹介・調整等が挙げられる。コンソーシアムが現場と乖離した存在となることがないように、カリキュラム再編の検討のための校内会議や生徒代表会議の内容等も共有することで、より現場に即した支援を行うことができるようにする。また、実際の活動にも参画していただくことで、机上の論を出すにとどまらない、生きた組織として活動していくことを目指す。また、コンソーシアムと連携して、町内企業の合同説明会や大学時のインターンシップ受け入れ等、卒業生へのUターン支援プログラムの研究開発を行う。

(9) 事業終了後の継続的な取組の実施に向けた計画

本校では、これまでも伊方町や地域のNPO団体、外部人材等と連携し、独自の取組を行ってきた。本事業においては、コンソーシアムの構築やカリキュラム開発等専門家、地域協働学習実施支援員の配置などにより、これまでの取組が体系的なものへと整理され、地域との連携がより強固なものになると考えている。これまで本校が培ってきた地域協働活動のノウハウや、これまでに築いてきた外部人脈とのつながりを基盤にしながら、本事業で新たに構築される支援体制を維持し、今後も地域協働活動に積極的に取り組んでいきたい。本事業に全教職員が主体的に関わることで研修を積み、事業終了後もより魅力的なカリキュラムの作成、地域協働活動の実施ができるよう、学校全体で取り組んでいきたい。また、地域協働学習実施支援員については、本事業終了後も継続して設置し、地域協働活動の推進を図ることとする。コンソーシアムについても可能な限り組織を継続して、教育活動をサポートしていただく。

4 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
運営指導委員会				1回								1回
コンソーシアム				1回								1回
カリキュラム開発等専門家			5回	3回		2回	1回	4回	4回	5回	6回	9回
地域協働学習実施支援員	2回	1回		1回	1回	1回	1回		1回	1回	2回	1回

(2) コンソーシアムについて

活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
平成31年4月15日	コンソーシアムを組織
令和3年7月13日（第1回）	第1回会合 ・本年度事業計画説明 ・「未咲輝学」授業計画説明 ・ブーメラン人材育成のための総合的な取組の在り方について協議 ・地域資源・地域人材のさらなる活用・連携方法について協議
令和4年3月11日（第2回）	第2回会合 ・本年度事業報告 ・卒業生による現状報告 ・ブーメラン人材の育成の取組についての意見交換 ・伊方町の資源を活用した取組の推進についての意見交換 ・来年度以降の活動内容について協議

(3) カリキュラム開発等専門家について

ア 指定した人材・雇用形態・高等学校における位置付けについて

伊方町文化財保護審議会会長 黒川信義氏（会計年度任用職員として雇用）月2日程度勤務
 MIGACT 代表 濱田規史氏（会計年度任用職員として雇用）月2日程度勤務（令和3年1月から雇用）

イ 活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和3年6月3日	「未咲輝学Ⅰ」カリキュラム打ち合わせ（黒川）

令和3年6月10日	「未咲輝学Ⅰ」への授業参加（黒川）
令和3年6月11日	授業振り返り（黒川）
令和3年6月14日	「未咲輝学Ⅰ」授業準備（黒川）
令和3年6月24日	「未咲輝学Ⅰ」への授業参加（黒川）
令和3年7月13日	「未咲輝学Ⅰ」授業振り返り（黒川）
令和3年7月14日	「未咲輝学Ⅰ」授業準備（黒川） 報告書作成（黒川）
令和3年7月19日	各教科における地域理解活動のカリキュラム化について検討（黒川） 報告書作成（黒川）
令和3年9月27日	「未咲輝学Ⅰ」授業準備（黒川） 資料作成（黒川）
令和3年9月30日	「未咲輝学Ⅰ」への授業参加（黒川）
令和3年10月28日	「未咲輝学Ⅰ」授業準備（黒川）
令和3年11月4日	「未咲輝学Ⅰ」への授業参加（黒川）
令和3年11月12日	「未咲輝学Ⅰ」授業振り返り（黒川）
令和3年11月19日	授業担当者との打ち合わせ（濱田） 「未咲輝学Ⅲ」カリキュラムの編成（濱田）
令和3年11月26日	報告書作成（黒川）
令和3年12月8日	資料作成（濱田）
令和3年12月10日	「未咲輝学Ⅱ」における起業家育成プログラムの実施について検討（濱田）
令和3年12月15日	報告書作成（濱田）
令和3年12月17日	「EGF キャンパスアワード 2021-2022」2次審査に向けた協議（濱田） 報告書作成（濱田）
令和4年1月7日	「未咲輝学Ⅱ」授業打ち合わせ（濱田）
令和4年1月14日	「未咲輝学Ⅱ」授業振り返り（濱田）
令和4年1月19日	資料作成（濱田）
令和4年1月21日	「未咲輝学Ⅱ」授業打ち合わせ（濱田）
令和4年1月27日	「未咲輝学Ⅰ」への授業参加（黒川）
令和4年2月2日	「未咲輝学Ⅱ」授業振り返り（濱田）
令和4年2月4日	令和4年度起業家育成プログラムについて研究（濱田）
令和4年2月9日	「未咲輝-SENTAN-発表会」参加（濱田）
令和4年2月10日	「未咲輝学Ⅰ」授業準備（黒川）
令和4年2月17日	「未咲輝学Ⅰ」への授業参加（黒川）
令和4年2月28日	「未咲輝学Ⅰ」授業振り返り（黒川） 令和4年度カリキュラムについて研究（黒川）
令和4年3月2日	令和4年度起業家育成プログラムについて研究（濱田）
令和4年3月4日	「未咲輝学Ⅱ」授業準備（濱田）
令和4年3月9日	「未咲輝学Ⅰ」への授業参加（黒川）

令和4年3月9日	「未咲輝学Ⅱ」への授業参加（濱田）
令和4年3月10日	「未咲輝学Ⅰ」授業振り返り（黒川）
令和4年3月11日	コンソーシアム参加（黒川） 令和4年度カリキュラムについて研究（黒川）
令和4年3月13日	地域活動団体交流報告会「八のカン詰」における運営及び活動補助（濱田）
令和4年3月14日	「佐田岬みつけ隊」との協働活動について研究（黒川） 報告書作成（黒川）
令和4年3月16日	報告書作成（濱田）

(4) 地域協働学習実施支援員について

ア 指定した人材・雇用形態・高等学校における位置付けについて
地域おこし協力隊 辻良隆氏 公営塾塾長と兼任で週5日勤務

イ 実施日程・実施内容

日程	内容
令和3年4月7日	令和3年度事業における活動計画について協議 探究活動への公営塾スタッフの関わり方について協議 「未咲輝学」の内容について協議
令和3年4月15日	探究活動の在り方について協議
令和3年5月12日	地域おこし協力隊員の紹介
令和3年7月13日	コンソーシアム参加
令和3年8月6日	研修会参加
令和3年9月21日	「未咲輝学Ⅰ」授業見学
令和3年10月25日	地域連携避難訓練見学
令和3年12月17日	1月以降の探究活動における公営塾との連携について協議
令和4年1月28日	令和4年度以降のカリキュラム編成について意見交換
令和4年2月8日	「未咲輝-SENTAN-発表会」参加
令和4年2月9日	「未咲輝-SENTAN-発表会」参加
令和4年3月11日	コンソーシアム参加

(5) 運営指導委員会について

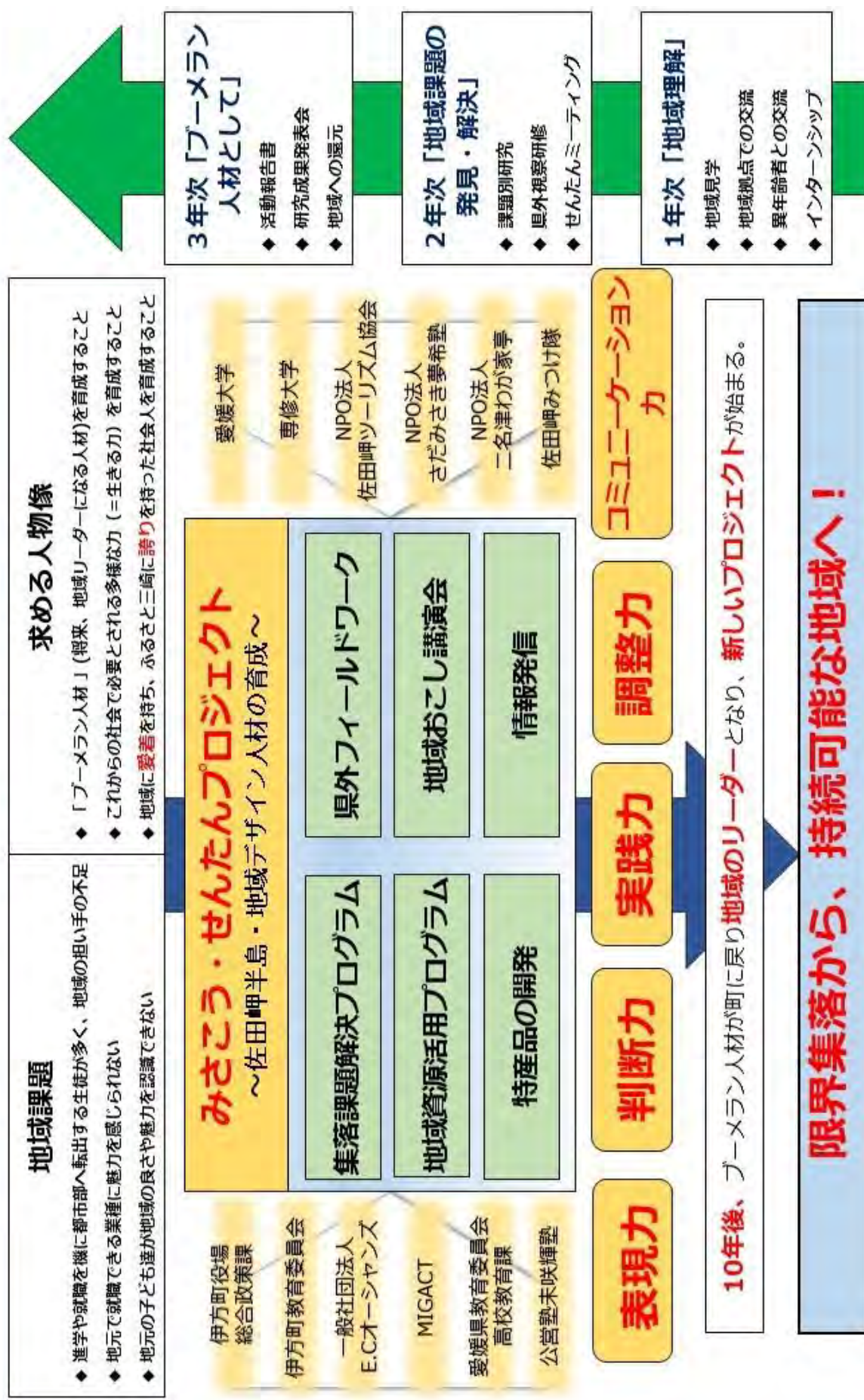
ア 運営指導委員会の構成員

愛媛大学社会連携推進機構准教授 秋丸國廣氏、いよぎん地域経済研究センター取締役統括部長 森洋一氏、文部科学省CSマイスター 西村久仁夫氏、伊方町町見郷土館館長 高嶋賢二氏、伊方町立三崎小学校校長 野井純氏、伊方町立三崎中学校校長 山本将弘氏、伊方町総合政策課課長 菊池嘉起氏、伊方町教育委員会事務局長 阿部茂之氏

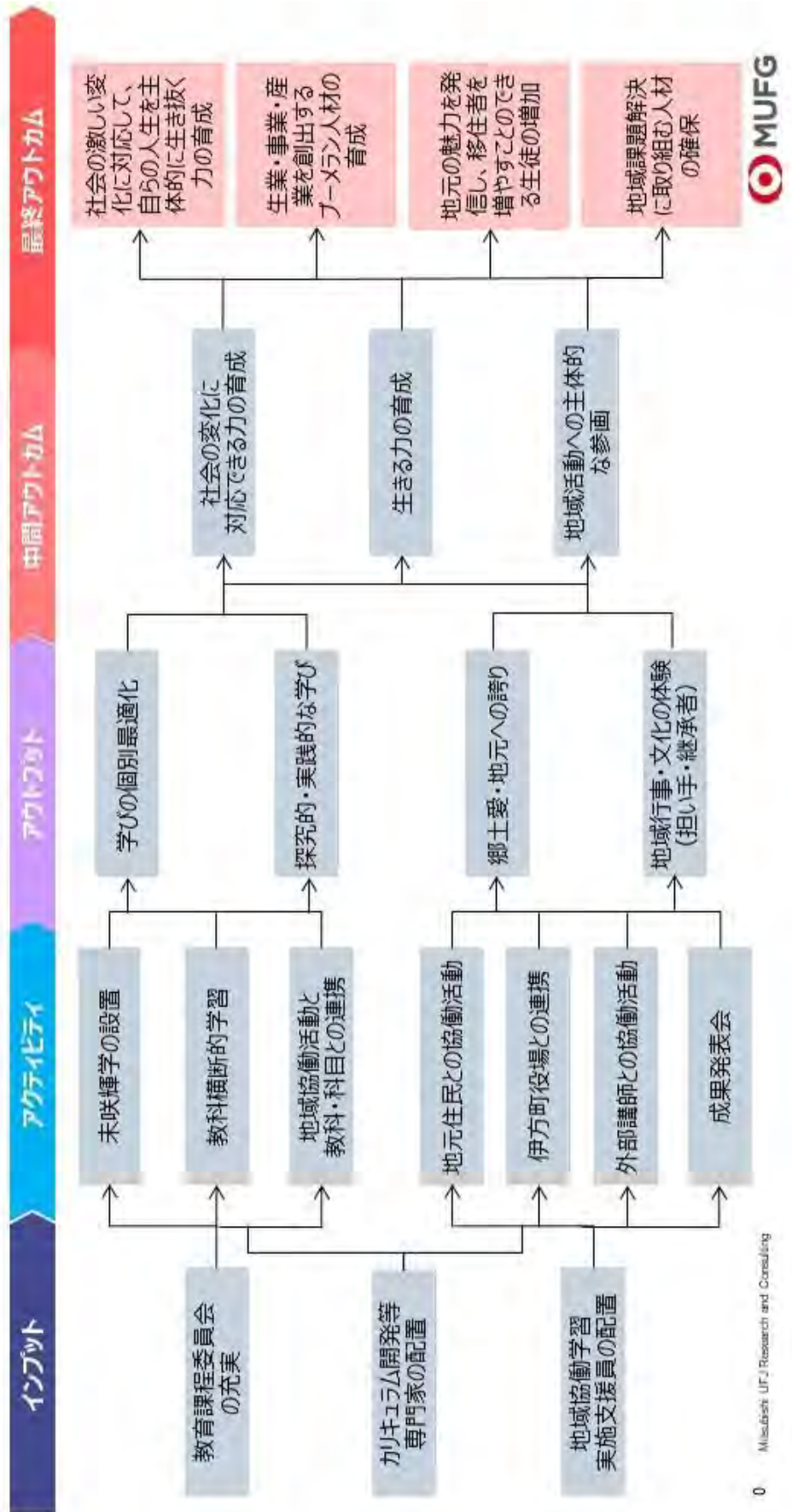
イ 活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和3年7月13日（第1回）	第1回会合 ・本年度事業計画説明 ・「未咲輝学」授業計画説明 ・評価の普及方法について協議 ・ブーメラン人材育成のための総合的な取組の在り方について協議 ・地域連携活動の成果の普及方法について協議 ・高大連携の在り方についての情報共有
令和4年3月11日（第2回）	第2回会合 ・本年度事業報告 ・卒業生による現状報告 ・学校設定科目「未咲輝学」の今後のカリキュラム編成についての意見交換 ・卒業生との連携強化の在り方について協議 ・地域の小学校、中学校との協働活動の在り方について協議

愛媛県立三崎高等学校 地域との協働による高等学校教育改革推進事業



愛媛県立三崎高等学校ロジックモデル



0 Misubishi UFJ Research and Consulting

II 組織の取組

1 過年度の取組

本校では、平成 27 年度土曜授業推進事業の指定を受け、土曜日を年間 10 日開校日とし、教育活動を実施した。本校の伝統として、体育祭や文化祭をはじめとした学校行事への地域住民の参加率が高い。また、地方祭等の地域諸行事においても、本校の生徒がその担い手として参加するなど、地域との関わりが非常に強い。そこで、その計画段階において、教科指導だけでなく、地域活動を取り入れることにした。それまで、本校においては担当課や部活動単位において、それぞれ地域活動に取り組んでおり、学校全体として取り組むような体系的なシステムが確立されていなかった。そのため、週に 1 時間の「総合的な学習の時間」に、学校全体として地域連携活動に取り組むよう、「総合的な学習の時間」に取り組む地域活性化事業を「三崎おこし」と名付け、カリキュラムの見直しを行った。1 年生「地域理解学習」、2 年生「地域活性化プランの作成」、3 年生「地域活性化プランの実践」とし、「総合的な学習の時間」に加え、開校土曜日の 2 時間を使って年次進行で三崎おこしに取り組むこととした。また、研究グループごとに教員を配置することで、生徒・教職員ともに「学校全体で地域協働活動に取り組む」という意識が醸成された。

平成 28 年度には「地域に生き地域とともに歩む高校生育成事業」、平成 29 年度には「コミュニティースクール推進校」、平成 30 年度には「地域を担う心豊かな高校生育成事業地域活性化プロジェクト」の指定を愛媛県教育委員会より受け、地域協働活動の研究に取り組んできた。4 年間の取組を通して、本校卒業生や地域住民、各種団体と連携して活動する機会が増加し、多くの人に本校の取組を知ってもらうとともに、地域との協働による活動への協力体制を確立することができている。

さらに、平成 28 年度より本校は、「伊方町まち・ひと・しごと創生総合戦略」の中核事業として設立された「伊方町移住・定住促進協議会」の構成メンバーとして連携活動を行っている。具体的には、同協議会の会議への参加に加え、同事業の「次世代人材育成事業」として外部講師を招き、「伊方町移住・定住促進協議会」に共催、伊方町、伊方町教育委員会に後援していただいて、学校という枠を越えた町全体でのシンポジウムを開催したり、東京で行われた「特産品フェア」に本校生が帯同し、町の PR を行ったりするなど、地域を担う学校として伊方町と連携して多くの活動に参加してきた。

上記のように、本校が本事業採択前より取り組んできた地域との協働活動において積み上げてきた経験や、そこから得られた学びは、生徒、教職員と校内全体のそれぞれの立場の間で共有されたと同時に、地域や外部人材との連携を生み出してきた。

2 コンソーシアム

(1) 概要

本事業の実施においては、これまで、それぞれの場面での地域協働活動で育まれた学校と地域の結び付きを軸に、より組織的、継続的な取組を行っていくための組織である「コンソーシアム」を編成することにした。コンソーシアムは地域の人を中心に組織し、様々な立場、視点からの指導・助言を行ってもらうことで、本事業の効果的な実施を行っていくとともに、コンソーシアムメンバー同士の連携を深めることも目的とした。初年度は、8 団体に参加してもらっていたが、本年度は 12 団体に参加してもらっており、より多くの人に本校の活動に関わってもらうことができている。

本年度の活動内容としては、実施事業への指導・助言、ブームラン人材育成のための総合的な取組の在り方、地域資源・地域人材のさらなる活用・連携方法についての助言等である。大学や地元 N P O 法人、行政等それぞれの視点から多角的な意見を出してもらうことで、校内の委員会だけでは気が付かない意見や、新

たな発想からの助言等をもらうことができた。

本年度は、7月に第1回コンソーシアムを、3月に第2回コンソーシアムを開催した。本年度で本事業は終了するが、来年度以降も継続してコンソーシアム活動を行っていく予定である、

コンソーシアム参加団体一覧（順不同、敬称略）

機関名	機関の代表者名
愛媛大学	学 長 仁科 弘重
専修大学	学 長 佐々木 重人
NPO法人佐田岬ツーリズム協会	理事長 宇都宮 圭
NPO法人さだみさき夢希会	代 表 加藤 智明
NPO法人二名津わが家亭	代 表 増田 克仁
佐田岬みつけ隊	隊 長 道元 平
伊方町	町 長 高門 清彦
一般社団法人E．Cオーシャンズ	代 表 岩田 功次
MIGACT	代 表 濱田 規史
愛媛県教育委員会高校教育課	課 長 島瀬 省吾
公営塾未咲輝塾	塾 長 辻 良隆
愛媛県立三崎高等学校	校 長 和田 俊之

(2) 第1回コンソーシアム

ア 期日 令和3年7月13日（火）

イ 参加者

笠松 浩樹氏（愛媛大学）、大崎 恒次氏（専修大学）、
宇都宮 圭氏（佐田岬ツーリズム協会）、田村 義孝氏（さだみさき夢希会）、
増田 克仁氏（二名津わが家亭）、黒川 信義氏（佐田岬みつけ隊）、
岩田 功次氏（E．Cオーシャンズ）、宮本 廉氏（伊方町）、
三好 要氏（伊方町）、川本 昌宏主幹（高校教育課）、
近藤 啓司指導主事（高校教育課）、辻 良隆地域協働学習実施支援員、
和田 俊之校長、川野 光正教頭、津田 一幸地域協働課長、
河野 雄太地域協働課員、成本 亜衣地域協働課員

ウ 開会行事

（校長挨拶）

お忙しい中、お越しいただきありがとうございます。文部科学省の指定、最終年となりました。2年間、「総合的な探究の時間」と未咲輝学を通して行ってきた成果をまとめていきたい。生徒の自主性、協働性、創造性が養われたか、地域からどのように評価されているかを本日確認させていただきたい。卒業生がブーメラン人材として育てているかも含め、今後の本校の取組について、御指導・御助言いただきたい。

エ 本事業の概要説明と生徒活動報告

【概要説明】

（津田教諭）

昨年度からの変更点として、大崎先生、黒川さん、岩田さん、濱田さんの4名に新たに加わっていただいた。これからもぜひ御協力願いたい。

今年度事業計画は資料のとおり。新型コロナウイルス感染症予防のため

対面での活動が難しく、オンラインでの活動も取り入れていくことになることが予想される。昨年度、岩田さんと海ゴミのシンポジウムに参加した。それを受けて大分県からも参加依頼があった。昨年度の活動内容は、せんたん新聞参照のこと。

【せんたん部の卒業生2名へのオンラインインタビュー】

(卒業生)

高校時代に印象的だった活動は、校外の人と触れ合ったこと、オンラインワークショップの先生役をしたことである。地域活動の後には、地域の人から「頑張ってるね。」と話しかけられた。何気ない会話ができることがうれしかった。

大学生になり、友だちと高校時代の話になった時、自分の高校生活が特殊だったことを痛感した。今は地域での活動をあまりしていない。高校生活で、イベント等の参加意欲が高まり、自主性が身に付いたと感じる。

(卒業生)

高校時代は、何事も挑戦してみてよかった。高校生活輝いていたなと思う。周りにある資源でやっていた。せんたん劇場は自分にとって、とても大切なイベントだった。

大学では、フリーペーパーを作るサークルに入って、地域の中に溶け込む活動をしている。地域で「裂織り」も行った。いろいろな活動を地域でさせていただいて感謝している。夢を見付けられたのも、地域活動のおかげだと思っている。

オ 研究協議

- ・地域との協働活動をさらに進めていくための情報発信の方法について
- ・生徒の主体的な活動と教職員の関わり方について

カ 質疑応答

(津田教諭)

地域活動を通して、生徒たちにコミュニケーション能力、問題解決能力が身に付いたと感じる。南予地区への就職率は、50%以上である。今後、大学進学者がどれだけ地元に戻ってくるか。町外出身者であっても、将来伊方町とのつながりを持ってくれるかに期待したい。

机上にあるマーマレード、ヤマモモジャムは生徒が作ったものである。伊方町の特産品として商品開発を進めている。

(田村氏)

文部科学省の指定校として最後の1年、素晴らしい活動を期待している。先生たちのマンパワーが素晴らしいと思う。今いる先生たちが異動となった場合、システムとしてどのように残していくか。

(和田校長)

未咲輝学、総合をメインに教員全体で取り組んでいる。次のリーダーシップをとる教員もいる。

(川野教頭)

先生方は熱心に指導してくれている。その一方、放課後、休日の負担が少ないわけではない。生徒が自走することができるように、休日にもっと地域の方に協力していただきたい。つながりを大切にしていきたい。御協力願いたい。

(津田教諭)

地域協働課として動いている。教員が個別に対応している休日の活動については、実施方法など今後の検討が必要であると考えている。今までのノウハウはデータで残しているので引継ぎはできる。大学との連携も今まで以上に行っていきたい。

(笠松氏)

ブーメラン人材ということだが、地域も含めて、卒業後の受け入れ態勢はどうなっているか聞きたい。

(宮本氏)

町として、三崎高校を残したいという思いを持って動いている。事業としては、新しく町営寮を作った。受け入れ態勢としての働き口といった面を今後整えていきたい。そのことも踏まえて、昨年度三崎高校1・2年生を対象に就職説明会を行った。

(田村氏)

魅力的な仕事が少ないというのもある。仕事を選ばなかったら、伊方町にも仕事はある。そんな状況で、新規事業者に対しての補助を町が行ってくれるとよい。

(笠松氏)

大学卒業後、地元就職するだけでなく、他地域で経験を積んで帰るという形もある。起業をサポートしたい。生徒と地域が互いに愛情を持って取り組んでいる。相乗効果でよい形だと思う。3年間ですぐできるものではないと思う。どうやって築いてきたのか聞きたい。

(津田教諭)

6年前、地域に関わる機会が少ないという意見があり、地域の方を特別講師として料理を作ったり、演奏したりするという活動を行ったことが、本校の地域との協働活動の始まりである。このことをきっかけに、「三崎高校生がいてくれたら町が元気になっていいよね」という感想を持ってもらえることを目指した。企画から一緒に参加し地域行事を盛り上げてきた。生徒と地域の方との6年の積み重ねがあったと思う。3年では確かに難しかったと思う。

(田村氏)

もともと前の木造校舎は三崎小・中学校の隣にあった。お祭りやイベントに顔を出してくれると、親近感もわいていた。

(川野教頭)

3年間では厳しい。分校化の危機もあり、補習や勉強ばかりだったのを変えてみた。面白いと感じることを行い、生徒の自己肯定感が高まった。周りからも評価してもらえ、その活動が進路にもつながった。人間としての成長も見られ、地域からも見直されている。

(笠松氏)

自分で学ぶ力が身に付いてきていると感じる。

(黒川氏)

「ブーメラン人材」を育てるとのことだが、実際に帰ってきているのか。他に何が必要で、何が課題なのか明確にしていきたい。都市部への一極集中が崩れつつあり、地方の住環境は少しずつ整ってきていると思う。魚やみか

んがおいしいというのは周知のことだが、他に半島で独特のものは何か。説明をきちんとできるようになってほしい。課題を探すなど、アイデアをみんなを出し合いたい。

(岩田氏)

以前から漂着ごみを拾う活動を行っていて、現在会社化についても検討している。しかし、この活動を実は子どもたちと一緒にしたくない。汚すぎて海を嫌いになってしまいそうだから。次の世代につなげていくために、地球をきれいにする活動をまた夏からやっていきたい。お願いできることがあれば、一緒にやっていきたい。

(宇都宮氏)

これまでの活動では、地域の人困っていることや三崎高校生がやりたいことをやってきた。町自体は衰退している。マンパワーが足りない。お祭りなど、地域の文化、そういった面から入るのもよいのではないか。青年団の考え方もあるが、9～10月に部活後高校生に協力してもらい、郷土芸能の唐獅子、五つ鹿の踊り手になってもらいたい。青年団側、地域全体の考えも聞いてからになるが、廃れかけの三崎秋祭りを盛り上げていけるのではないかと思う。

(宮本氏)

受け入れ側の意見も聞いていく。みんなが納得して、協働関係になるとよい。

(増田氏)

正直、もっと踏み込んでほしい。高校生がどのような活動をしているか知らない人もいる。生徒たちに困ったことがあったら、駆け込めるような場所でありたい。その橋渡しを学校が行っていけばよい。

(大崎氏)

昨年度から本学生と三崎高校で交流をしている。「教育実習で三崎高校に行きたい」というように、ゼミの学生も刺激を受けている。関係人口を広めていくところに意義があると思う。昨年度の取組の中で、商品開発班の話があり、開発したものを首都圏にどう広めていくか検討した。こちらにできることはプロモーションだと思った。細く長く続けていけるよう、今の課題を共有していきたい。

(川本主幹)

説明できるようにしていくことが大事。三崎高校生は大学の先生と話しても、しっかり話せる。協力体制を研究していけたらいい。御指導のほど継続してお願いしたい。

(和田校長)

これからの1年どう活動していくかを考えた時、もう一步踏み込んだ地域協働活動をしていきたいと感じた。地域の方からの言葉がうれしいというのもあったが、生徒の更なる成長のため、また御協力を願いたい。

キ 閉会行事

(校長挨拶)

熱心に御協議いただきありがたい。本日いただいた貴重なご意見は、本校で練り上げ、今後の活動に生かしていきたい。

(3) 第2回コンソーシアム

ア 期日 令和4年3月11日（金）

イ 参加者

大崎 恒次氏（専修大学）、宇都宮 圭氏（佐田岬ツーリズム協会）、
黒川 信義氏（佐田岬みつけ隊）、宮本 廉氏（伊方町）、
川本 昌宏主幹（高校教育課）、近藤 啓司指導主事（高校教育課）、
辻 良隆地域協働学習実施支援員、和田 俊之校長、川野 光正教頭、
津田 一幸地域協働課長、河野 雄太地域協働課員、
浅野 真也地域協働課員

ウ 開会行事

（校長挨拶）

年度末のお忙しい時期に多数の参加に感謝する。先日、本校の探究活動の発表会である「未咲輝-SENTAN-発表会」を初の完全オンラインで実施し、多くの方に見ていただくことができた。また、本年度も様々な賞を受賞することができ、本校の活動を評価していただくことができた。本事業は本年度で終わりになるが、来年度以降の取組について協議していただきたい。

エ 本事業の概要説明と卒業生現状報告

【概要説明】

（津田教諭）

本年度は、本事業指定最終年度となる。ブーメラン人材の育成をテーマの一つとして活動してきた。「総合的な探究の時間」の六つの班の探究活動に加え、個人やグループでの探究活動など様々な活動が活発に行われた。これらの活動を通じて「ディスカバー農村漁村の宝」特別賞など様々な賞を受賞することができた。また、本事業における地域協働活動を通して、南予地域や生徒の出身地での就職者の増加などの成果が表れてきている。地元への思いを育む教育の成果であると考えている。カリキュラム開発により負担が増えるなどの課題もあるが、バランスを考慮した実施方法を考えていきたい。そのためにも、計画段階でコンソーシアムとの連携をとるなどの工夫を行っていきたい。また、ブーメラン人材育成の成果確認が今後の課題となると考えている。

【卒業生活動報告】

（活動報告）

（卒業生 楠氏）

- ・小学校教員を目指している。
- ・自分を変えたくて高校に入学。せんたん部の先輩にあこがれた。
- ・コミュニケーション能力やプレゼンの力、臨機応変さなどを身に付けることができた。
- ・現在の大学がある都市の魅力発信などを行っている。
- ・学校と地域をつなぐ人材になりたい。

（卒業生 尾澤氏）

- ・「裂織り」文化の継承に特に力を入れていた。
- ・地域創生について学習中である。
- ・高校で学んだ経験を活用し、市内の市場の中にある、学生が運営している店舗で「裂織り」の活動を行っている。
- ・高校での活動を発展させたような活動を大学でも行っている。

・「裂織り」を文化として残し、地域創生につなげるビジネスをしたい。
(質疑応答・感想)

(宇都宮氏)

大学に行き感じた三崎高校との違いは何なのか。

(楠氏)

友人と地域の話をする際に、私は地域の魅力を分かっているのでこちらからは発信できるが、逆は難しい。三崎高校で深く地域と関わっていたことを実感した。

(尾澤氏)

大学でも地域創生の活動はあるが、高校時代の方が自分のしたいことをやれていた。大学では専門性や成功が求められている。高校生の活動ならではのフットワークの軽さ、とりあえずやってみるという思い切りの良さが魅力である。

(川本主幹)

自分を持ちつつ大学でさらに成長する姿勢が素晴らしい。教育においても自分で考えられる力の育成が求められる。

オ 研究協議

- ・「ブーメラン人材」育成のための総合的な取組の在り方について
- ・地域資源・地域人材のさらなる活用・連携方法について

カ 質疑応答

(黒川氏)

「ブーメラン人材」の育成について、高校自体の魅力を高めることは前提として重要だが、郷土をブランディングするという視点で未咲輝学を行っている。その成果は見られているか。

(津田教諭)

未咲輝学の中で地域との交流を通し、三崎のことをよく知っていくことで、県外生などは自分の出身地の魅力を知りたいという思いにつながっている。1年生は佐田岬の地形などに興味を持つような取組ができている。2年生、3年生は起業について興味を持ち、地域資源を生かしたプランを考えビジネスコンテストで入賞する生徒が毎年いる。未咲輝学の成果は、確実に表れていると感じる。

(宮本氏)

高校卒業後すぐに役場などで働くような即戦力人材の育成をお願いしたい。役場でのインターンシップなども行ってほしい。

(和田校長)

人材育成をしてもその受け皿がなければならぬ。役場との連携などはぜひ行いたい。

(川野教頭)

町外出身の生徒が出身地域で就職したとしても、本校で学んだことを生かし、そこで活躍できる人材育成を行いたい。また、リモートを活用した取組も積極的に行っていきたい。

(辻氏)

文化祭での地域の人と教員での校歌合唱や郷土芸能などは、三崎高校らしい本当に素晴らしい取組である。ぜひ、今後も継続して行ってほしい。

(宇都宮氏)

三崎での「普通」が他での「特別」だということに気付いてほしい。

キ 閉会行事

(校長挨拶)

私は3度目の赴任だが、そのたびに三崎高校は変化していつている。これからどうなるのか。都会では時間という要素が重要視されている。リモート化が進む現在では、うまくオンラインでの活動を利用した「ブーメラン人材」活躍の場を考えていきたい。そのためにも、三崎が好きだという思いを育む教育を柱としたい。今年度は、コロナの影響による行事中止の中でも、視察やオンライン活動を行うことができた。これらを来年度にも生かしたい。学校の試行錯誤が地域の魅力づくりにつながる。本事業は本年度で終了となるが、本コンソーシアムを来年度以降も継続して活動していただけるようお願いして、閉会の挨拶としたい。

3 管理機関及びコンソーシアムにおける主体的な取組について

(1) 職員体制に関する支援

ア 小規模校で地域活性化活動に取り組むことを希望する優秀な教員の配置

イ 本校出身の優秀な教職員の配置や、本校勤務年数が長い経験豊富な教員の配置

(2) 取組内容に関する支援

ア 生徒のグローバルな視点の習得支援（未咲輝塾によるトビタテ！留学 JAPAN 応募にいたる指導）

イ 生徒のコミュニケーション能力の向上支援（県教育委員会によるえひめスーパーハイスクールコンソーシアム in 南予の参加支援）

ウ 伊方町による本校地域活性化に関する特別授業における講師謝礼、旅費の予算措置

エ 伊方町による本校地域連携事業（せんたん新聞、せんたん book 制作）印刷物制作費用全額補助

オ NPO法人佐田岬ツーリズム協会によるブイアートプロジェクト（地域資源活用プログラム）における活動支援

カ NPO法人さだみさき夢希会による「みっちゃん大福」の普及及び販売活動（特産品の開発）における活動支援

キ 愛媛大学による「アサギマダラ」の研究（地域資源活用プログラム）及び合同ダンス制作（情報発信）、エネルギー教育事業（課題解決カリキュラムの開発）における活動支援

ク 専修大学による「総合的な探究の時間」における活動支援

ケ 佐田岬みつけ隊による歴史や文化を中心とした地域研究活動（地域資源活用プログラム）における活動支援

(3) 成果普及のための支援

えひめスーパーハイスクールコンソーシアム in 南予の開催（1月27日、発表と意見交換）

(4) 運営に関する支援

ア 運営指導委員会の開催

年2回実施（7月13日、3月11日）

イ コンソーシアムの開催

年2回実施（7月13日、3月11日）

ウ えひめスーパーハイスクールコンソーシアム in 南予の開催（発表と意見交換）1月27日実施

4 伊方町（伊方町移住・定住促進協議会）との連携について

本年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大の影響により、年度当初に予定していた「第4回せんたんミーティング」、「第2回せんたん劇場」の開催及び、外部の専門家を講師とする特別授業の実施等の連携事業が中止となってしまった。その中で、新たな取組として、本校の地域連携活動の歩みや成果、学校生活の様子などをまとめた冊子である「せんたん book」の制作に1年生が取り組んでいる。「せんたん book」は本事業の3年間も含めた、本校が地域との連携活動に取り組んできた7年間の成果をまとめた内容になる予定である。外部講師にオンラインを活用したワークショップを行ってもらいながら、3月の完成を目指して制作を進めている。また、1年間の活動の様子や三崎高校の紹介を行っている「せんたん新聞」第3号も3月の発行に向けて、せんたん部の生徒が中心となって制作に取り組んでいる。

完成したこれらの刊行物は、町内の施設や関係機関等に設置させてもらうことで、本校及び伊方町の魅力発信の一助としたい。

本校では、学校ホームページや学校 facebook を活用して学校や伊方町の情報発信を行っている。インターネットでの情報発信には、一度に多くの人に情報を届けられるという利点があるが、三崎高校のことを全く知らない人に対しては、効果的に情報を届けることができないというデメリットもある。そこで、刊行物という形として残るものを制作することで、より多くの人に情報を発信したいという生徒の思いから本企画がスタートした。オンラインとオフラインを融合させることで、三崎高校と伊方町の情報をこれまで以上に多くの人に発信していきたい。

5 集落等コミュニティに特化した課題解決カリキュラムの開発

(1) 類型毎の趣旨に応じた取組について

地域魅力化型の趣旨を踏まえ、学校と地域が協働することで互いの強みを生かしつつ、更なる相乗効果を生むことをねらいに活動に取り組んだ。学校の強みとしては、高校生らしい柔軟な発想力を生かした活動を行っていくことや、地域の行事や伝統文化の後継者として、これらの活動に活力を与えられることである。一方、地域の強みとしては、学校内だけでは実践することのできない探究的な学習活動の場を提供できることや、多様な人との関わりを通して、コミュニケーション能力などの「生きる力」を育むことができるということである。本校は、愛媛県内で高齢化率が2番目に高い伊方町に立地しており、地域課題が生徒一人一人にとって身近なところにある「地域課題先端地域」である。しかし、それを否定的にとらえるのではなく、「最先端の学びができる地域である」と肯定的に捉えることで、生徒一人一人が明るい展望を持ちながら課題解決学習に取り

組むことができている。また、地域住民との距離が近く、本校への関心が高く期待も大きいいため、協働的で開かれた活動を行うことができている。

(2) 学校設定科目「未咲輝学」について

系統的かつ、持続的な地域協働活動の取組を行っていくために、昨年度、学校設定科目「未咲輝学」を開講した。週に1時間、学年ごとにテーマを決めて学習活動を行い、3年間の系統的な授業を通して「ブーメラン人材」として必要な力を育成することを目標として学校設定科目を設置した。また、学校設定科目を新設することでカリキュラムを再編し、効果的な学習活動を行うとともに生徒・教職員の負担を軽減することも目的としている。

1年生は、「地域理解」をテーマに、地域の史跡・施設見学の調査・研究等や、裂織り体験、愛媛大学・四国電力と協働したエネルギー関連事業などを行った。また、本校カリキュラム開発等専門家に伊方町の歴史や文化、地理上の特色などについて理解を深めるためのカリキュラムを開発してもらい、実施した。地域の郷土館の学芸員や地元企業の人等に協力してもらい、専門的な助言をしてもらうことで、より深く地域理解を行うことができた。

2年生は、「地域課題の発見・解決」をテーマに活動を行った。地域課題を経済的側面から考察するために、経済産業省と内閣官房（まち・ひと・しごと創生本部事務局）が提供しているRESAS（地域経済分析システム）を用いてグループごとにテーマを設定して、研究を進めた。その研究結果を「地方創生☆政策アイデアコンテスト」に応募することで、第三者による客観的評価を得て、自分たちの活動の見直しや改善を図る機会とした。その中で、2チームが地方一次審査を通過した。この結果に、生徒たちは活動のやりがいや達成感を味わうことができた。また、その後の他の場面での活動においても、RESASを活用して情報の収集や分析を行う生徒が多く見られ、RESASを使用したICT活用能力の高まりや、データサイエンス分野への関心の高まりを感じることができた。

3年生は、昨年度に「未咲輝学Ⅱ」の中でRESASを用いて立案した政策を元にビジネスプランを作成した。また、株式会社伊予銀行と協働して起業セミナーを開催して、起業や金融分野への理解を深めた。今後も、地域の特色を生かしたビジネスプランづくりや起業セミナー等を通して、地域の魅力を発見し、地域の新たな雇用の場として「ブーメラン人材」の地域へのUターンを促すとともに、地域経済を支えることのできる起業家の育成を目指して学校設定科目の研究に取り組んでいきたい。

6 校内体制

(1) 地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制

校内の教育課程委員会において、各教科等における取組内容や、実施時間の原案を年度当初に作成した。その原案を基に、カリキュラム再編のための校内検討会を開き、実際の運用や実施状況についての情報共有を図った。また、コンソーシアムや運営指導委員会においても、実施状況等を報告し、適宜、指導・助言を受けた。

(2) 学校全体の研究開発体制について（教師の役割、それを支援する体制について）

本校がこれまでに築き上げてきた実施体制の下、地域協働課を中心として研究を行った。具体的には、「総合的な探究の時間」において、研究テーマごとに生徒を縦割りにした班を作り、複数名の担当教員を配置した。教員の役割としては、生徒の活動における助言や、外部人材との連絡、調整等が挙げられる。未咲輝学では、各学年団の教職員が年度当初に提示されたカリキュラムを基に、具体的活動内容を決定した。

地域協働課員は、各研究班に必要な外部人材の紹介、調整を行ったり、班ごとの連携を図ったりするなどして担当教員のサポートを行った。また、各探究活動における担当教員や代表生徒が定期的に進捗状況等を話し合う場を設定することで、各班がスムーズな情報交換を行い、それぞれ連携したり、サポートし合ったりしやすい環境作りを行った。さらに、カリキュラム開発等専門家から助言や提案、外部人材の紹介をしてもらうことにより、より深まりのある取組を行うことができた。

(3) 学校長の下で、研究開発の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画・方法を改善していく仕組みについて

「総合的な探究の時間」においては、各研究班担当教職員が、未咲輝学においては、各学年団の教職員と地域協働課員が定期的に意見交換をし、進捗状況が分かるようにしている。成果の検証については、年度当初と年度末に生徒対象に実施したループリックの分析や、生徒のレポート、成果発表会などから総合的に判断した。年度末には、地域協働活動成果検証会を行い、本年度の成果の検証と次年度の改善点を話し合う機会とする。

Ⅲ 研究開発

1 地域を担う人材育成のためのプログラム

一昨年度、これまでに「総合的な探究の時間」を中心に進めてきたプログラム「三崎おこし」を「地域デザイン」の観点から見直し、統合、再編、学校設定科目の新設等により効果的な活動へと組み直した。また、これまでは本校の立地上、学校周辺を中心に行ってきた活動を町内全体の活動へと発展させられるよう、研究を進めた。

地域を担う人材育成のためのプログラムでは、「地域資源活用プログラム」、特産品の開発や情報発信などの「課題研究」、外部人材との交流、先進校視察などを行う「県外フィールドワーク・講演会」、「地域理解」という4領域での探究活動を行った。

(1) 地域資源活用プログラム

ブイアートプロジェクト

海岸の漂着ごみであるブイ（養殖業で使用する直径30センチメートルほどのプラスチック製の球体の浮き）をごみではなく資源として捉え、アート作品として再利用するとともに、海洋ごみ問題について考えるきっかけにするというのが、ブイアートプロジェクトである。三崎高校の所在地である伊方町は豊かな自然のある町である。瀬戸内海と宇和海の二つの海を同時に見ることができるのは、日本中で伊方町だけであり、生徒たちは美しい海に強い愛着を持っている。しかし、平成27年度に地域の人たちと海岸清掃ボランティアを行った際に、多くのごみが漂着しているという実態を目の当たりにした生徒たちは、大きなショックを受けた。全国各地で捨てられたゴミが伊方町の海に漂着してきている、ふるさとの美しい海が、今、危機的状況に陥っている、このままでは、海洋汚染などの自然破壊や、魚介類が獲れなくなるなどの地域資源の衰退などにつながってしまうと考えた生徒たちは、その後も、伝統として海洋ごみ拾いのボランティアを続け、本年度までに5回のごみ拾いボランティアを実施した。生徒たちは海洋ゴミの中でもブイに着目し、ブイアートプロジェクトが始まった。同プロジェクトでは、主にアート作品を制作するとともに海洋ごみに対する啓発活動等を行う「ブイアート活動」と、ブイを使ったアクティビティイベントである「ブイリンピック活動」の二つの活動を行っている。

伊方町観光交流拠点施設「佐田岬はなはな」で行われている「はなはな祭り」において、平成30年度より「ブイリンピック」を実施しており、子どもから年配の人まで多くの人に親んでもらい、「はなはな祭り」恒例のイベントとして地元の人を中心に少しずつ定着してきている。しかし、昨年度と本年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大により緊急事態宣言が発令され、「はなはな祭り」自体が中止となってしまったため、ブイリンピックの開催も中止となった。その他にも1年間を通して、地域の各種イベントが中止となってしまったため、これまで地域でのイベントや本校学校行事の中で開催してきたブイリンピックを、本年度は一度も実施することができなかった。来年度も新型コロナウイルス感染症の影響により不透明な部分はあるが、感染症対策を徹底した運営方法を計画するなど、開催に向けた準備をしていきたい。

昨年度、八幡浜市で開催された愛媛県主催の「愛媛県プラスチック資源循環シンポジウム in 南予」において本校のブイアートプロジェクトの取組発表を行った。同シンポジウムは、行政職員や大学教授、漁協関係者、ボランティア団体代表など様々な立場の人が基調講演やパネルディスカッションを行うという、海洋プラスチック問題において非常に先進的なシンポジウムであり、本校は、その中で唯一の高校生による事例発表を行った。これまでのブイアートプロジェクトの紹介や、本年度新たに取り組んだオンラインでの取組に加え、10分間のプレゼンテーションの間に実際にブイアートを制作することで、ブイアートと本校の海の豊かさを守る取組についてより分かりやすく周知することがで

きた。後日、同シンポジウムに参加していた大分県生活環境部の方に声をかけてもらい、本年度、大分市で行われた「おおいたうつくし感謝祭」にブース出展した。この事業は、一人一人が環境問題への意識を持ち、健全で恵み豊かな環境の実現を目指し、それぞれが考えを深めていくことを目的として開催されている。本年度は、特にフードロスや海ごみ問題を大きなテーマとして実施された。本校は、愛媛県のイメージアップキャラクターである「みきゃん」と大分県のマスコットキャラクターである「めじろん」のブイアート体験及び裂織りストラップづくり体験を行い、環境保全について考えるきっかけとしてもらった。

今回のブイアート体験では、密を避けるためと誰もが気軽に参加しやすくするために、実施方法を工夫した。1点目の工夫として、作業時間を短縮するために制作してもらうブイのデザインを「みきゃん」と「めじろん」に指定し、下地の着色を行った状態のブイを用意した。2点目の工夫として、待ち時間の短縮と低年齢の子どもでも楽しめるように完成したブイアートにシールを貼り付けていくデコレーション活動を実施した。その結果、子どもを中心に、家族連れなど多くの人にスムーズにブイアートを体験してもらうことができた。みきゃん用にオレンジ色に着色したブイと、めじろん用に緑色に着色したブイを5個ずつ用意していたが、10時30分の開始から2時間ほどですべてのブイアートが完成するほどの盛況であった。その後、ブースに訪れた方には、シールデコレーション体験を楽しんでもらうことができた。ブイアートを作成する前に、ブイをはじめとした海洋ごみの問題や、ブイアートプロジェクトを始めたきっかけなどを説明することで、海洋ごみ問題や本校の取組について多くの人に聞いてもらうきっかけとなった。完成しためじろんブイアートのうちの1つは、記念に大分県庁内に展示していただいている。

本校では、地域との連携事業として地域の伝統工芸品である裂織りの研究と商品化に2年前から取り組んでいる。裂織りを身近に感じてもらうことと密を避けることも目的に、今回は手軽に作成することのできる裂織りストラップの作成体験を実施した。本校のこれまでの裂織り研究では、シュシュやハンドバッグなど主に商品開発に力を入れて取り組んできた。しかし、今回は普及活動ということでワークショップを行うこととなり、生徒たちはどのような物を作るか試行錯誤した。想定されるワークショップに参加者として、子どもや家族連れが多いのではないかと考えた。そこで、短時間で作成できる、かわいい、作ったものを使えるといった要素を取り入れたらよいのではないかとということになり、ストラップを制作することになった。実際のワークショップでは、子どもや家族連れを中心に多くの人にストラップづくりに参加してもらった。中には、大分市で裂織りの保存に取り組んでいる家族が伊方町出身という人もおり、喜んでもらったり、懐かしんでもらったりした。また、参加した小学生から「楽しそうだから、大きくなったら三崎高校に行きたい」と声をかけてもらい、生徒たちは非常に喜んでいて、これまでの活動とは異なり、県外での活動であったり、ストラップ作りであったりと初めてのことが多く、企画や準備の段階から苦労することも多かったが、この取組を通して企画力やコミュニケーション力など多くの力を養うとともに、自己有用感を育むことができた。

これまでの活動で、伊方町やその周辺地域ではブイアートの認知度も少しずつ高まってきているが、初めての愛媛県外での活動ということで、当初は生徒たちにも不安な面も見られたが、ブイアートの説明をこれまで以上に丁寧に行う練習をするなど、生徒たちは自分たちで工夫しながら準備を行っていた。また、1年次から継続してブイアート活動を行ってきたことで、ブイアートを「自分ごと」として捉えることができていると、ブイアートの説明や実践においても落ち着いて説得力を持った活動を行うことができた。今後もオンライン、オフライン問わずに多くのイベントに参加するなどして、海洋プラスチック

問題解決の一助となれるよう取り組んでいくことで地域貢献を行っていききたい。そのためにも、今後も、コンソーシアム構成員でもある一般社団法人E. C. オーシャンズ代表岩田功次氏などの外部の専門家と協働しながら、生徒たちの専門性を高められるような活動を継続的に行っていききたい。



昨年度より開設した学校設定科目「未咲輝学Ⅰ」において、1年生全員がブイアート制作を行った。一昨年度までも、「総合的な学習の時間」にブイアート制作を行ってきたが、グループ単位での制作であったり、イベントに使用するための下準備であったりして、学年全員がブイアートを制作したことはなかった。そこで、昨年度より地域資源活用プログラムの一環として「未咲輝学Ⅰ」の授業において1年生全体の活動としてブイアートの制作を行うこととした。これまで地域のブイアート制作の第一人者として活動している、NPO法人佐田岬ツーリズム協会理事長の宇都宮圭氏を講師として招き、昨年度同様、愛媛県のイメージアップキャラクター「みきゃん」のブイアートを一人一つ制作した。制作したブイアートは校庭に飾り付け、文化祭などのイベントで来校者に見てもらうことができた。昨年度制作したブイアートは生徒用駐輪場に、本年度制作したブイアートは校庭に飾り付けることで、学校全体が華やかになっている。2年生同様に、1年生の約半数は学区外から入学した生徒であり、その内11名は県外生である。昨年度のブイアート制作をきっかけに、現在もブイアートの普及活動に積極的に活動に取り組み「おおいとうつくし感謝祭」に参加した2年生も県外生である。本校に入学し、ブイアートプロジェクトでの

活動をきっかけに海洋ごみ問題や環境問題に関心を持つ生徒が増加しており、本プログラムが一定の成果を上げているといえる。今年度は「おおいたうつくし感謝祭」や地域活動団体交流発表会「八のカン詰め」などのイベントに参加し、ブイアート活動を通して参加者に海洋プラスチック問題について考えるきっかけとしてもらうことができた。来年度は、新型コロナウイルス感染症の流行が落ち着いていれば、地域の小学生や中学生にブイアートを中心としたSDGsについての特別授業を行うことで、高校生が中心となった持続可能な地域づくりに取り組んでいきたい。

一昨年度までの活動は、漂着ごみであり地域の課題となっているブイを地域資源ととらえてアートやアクティビティイベントを実施してきた。昨年度は、高校生自身の学びをオンラインも含めた多くのイベントで発信し、場所や年齢を問わずに多くの参加者に海洋ごみ問題に対する問題提起を行うことができた。本年度は、これまでの活動の経験を活かして積極的にイベントに参加し、県外まで活動の幅を広げることができた。来年度は、イベントの実施にとどまることなく、ブイアートプロジェクトをきっかけに、マイクロプラスチックなどの海洋ごみの問題や、海の豊かさを守る取組についても外部人材と協働して専門的な研究を行うとともに、そのことを外部に発信していくという取組も行っていきたい。今年度新型コロナウイルスの流行により実施できなかった地域の小・中学生に対して行う出前ブイアート授業や、実際に漂着ごみが流れ着いている海岸での協働活動を実施することで、海洋ごみ問題に興味・関心を持ってもらい、地域環境教育の一環とするとともに、郷土愛をより高められる活動にしていきたい。新型コロナウイルスの流行により対面での活動に苦労したことは否めないが、その一方でオンライン環境が急速に進展したことにより、生徒のオンライン技術の向上、社会でのオンラインイベントの需要の高まりなど、オンラインでの活動に取り組みやすい状況となっており、四国の最西端に位置している本校にとっては、地理的条件を超えて活動することのできる好機となっている。来年度は、昨年度実施したオンラインイベントにも積極的に取り組むことで多くの人にブイアート活動を発信していきたい。そのために、より効果的なオンラインイベントの在り方についても研究し、多くの人に研究成果を伝えるとともに、SDGs活動の推進を図っていきたい。生徒たちは、ブイアートプロジェクトでの活動を通して地域の現状を知り環境問題への関心を高めることはもちろん、多くの人と関わることで、実践力やコミュニケーション能力など様々な力を養うことができている。また、ブイアートを通して社会と関わり自分たちの活動を多くの人に聞いてもらい、認められることが生徒にとっては、それ以上に大きな財産となっている。ブイアートは地域の海岸清掃ボランティアをきっかけに始まった活動であり、活動開始当初はあくまでも環境教育としての意味合いが強かった。本事業におけるブイアート活動においてオンラインイベントや県外での活動を行い、これまで以上に多くの人と関わるできるようになった。そのことを通して、社会と関わり人と関わるということが、生徒にとってどれだけ大きな学びの場であり、成長の場であるかということを知ることができた。来年度以降も、学びの機会としてのブイアート活動の在り方について研究及び実践を重ね、より良い活動を行っていきたい。



(2) 課題研究

課題研究としては、「情報発信」、「イベント」、「特産品開発」という三つの部門を設定した上で、より具体的な七つの研究班を編成した。生徒は、自らが興味のある研究班に所属し、探究活動を行った。昨年度までの探究活動は各研究班において一つの活動テーマを設定し、研究班全員で活動に取り組んでいた。本年度は2年生の人数が多いこともあり、各研究班の所属人数が増え、同じ研究班の中でも取り組みたい内容について多くの意見があることが年度当初のアンケートから読み取れた。そこで、本年度は多様な興味・関心を持つ生徒に対して個別最適化された学びを提供していくために、各研究班において生徒から出た意見を基に話し合いを行い、班の中でさらに複数のテーマに分かれた活動を行っていくことにしたことが、本年度の探究活動の大きな変更点である。このような取組の仕組みについては、全教員が探究活動に参加するというシステムを構築してきたことで可能になったと考えている。

ア 情報発信

情報発信部門は、「アート」、「防災」の二つの班に分かれて活動した。

三崎港周辺の地区は、どの場所からも海が見える非常に景色の美しい場所であったが、東日本大震災以降、津波への対策として、高さ2.5メートル、長さ190メートルほどの防潮堤が設置され、海を見ることができなくなってしまった。地域住民からも「味気なく、寂しい感じがする」という声が上がっていた。そこで、昨年度アート活動で地域を盛り上げるために防潮堤に絵を描くことを計画し、「MAP（みさきアートプロジェクト）」を行い、みかんと灯台の二つの絵を完成させた。本年度は、新たに伊方町で多く水揚げされている「太刀魚」の絵を完成させた。新型コロナウイルス感染症の感染対策として高校生のみでの活動となったが、完成した絵は地域の人に喜んでもらっている。今回制作した絵は、太刀魚が防潮堤を突き破ってこちらに向かって飛び出しているようなトリックアートのデザインとなっており、新たな趣向を加えた作品となっている。これまでに制作した3枚の絵の前で観光客や帰省客などが写真を撮ることも多く、地域の新たな名所となりつつある。来年度も伊方町と連携して新たな絵の制作を進めるとともに、今後は完成した絵の保守点検についても計画し、いつまでも色あせることなく多くの人に愛されるものにしていくための取組にお力を入れていきたい。

今年度は「MAP（みさきアートプロジェクト）」に加え、「Re:bornプロジェクト」や地域のジオラマ作り、三崎高校のゆるキャラ制作などの新たな活動にも取り組んだ。

「Re:bornプロジェクト」は手入れがされずに荒れ果ててしまった地域の公園を再生するためのプロジェクトである。本校の位置する三崎地域には、「ロケット公園」の愛称で親しまれている公園がある。公園の中心には、名前の由来となっているロケット型の遊具が設置されているが、老朽化が進みモニュメントのイラストも損傷が激しく、地域の子供たちの利用も減少している。そこで、アートの力で公園を再生し、地域の人々の憩いの場とすることを目指して「Re:bornプロジェクト」に取り組むことになった。公園を調査した結果、主な活動内容として、公園の清掃、モニュメントイラストの再生、遊具の点検及び修繕、トイレ等施設の改修が挙げられた。その中で、まず自分たちで取り組むことのできる活動として公園の清掃とモニュメントイラストの原案作成を行った。雑草や落ち葉の除去、トイレ及び側溝の清掃などに複数回取り組むことで公園の美化に努めながら遊具の点検も行い、修繕箇所を拾い出した。また、それらの活動と並行してイラスト原案の作成にも取り組んだ。

次に、ピックアップした遊具の修繕箇所及び、公園施設等については高校生の力で修繕が不可能なため、提案書を作成し伊方町に相談することとした。実際に、町の担当者に対

して生徒が「Re:born プロジェクト」の趣旨及び要望等を伝える機会を作ってもらい、提案を行った。その結果、伊方町の事業としても予算化してもらえることとなった。

「Re:born プロジェクト」のプロジェクトリーダーとなっている生徒たちは、県外からの入学者である。この生徒たちは、地域住民として町に住み、地域で暮らす中で手つかずになっている公園の存在に気付き、何とかしたいと考えるようになり本プロジェクトを計画・実行した。当たり前すぎて地域住民が気付かない課題に気付き、地域のためにと活動することとができたのは、本生徒たちが地域外から入学してきたという「外の視点」と地域住民としての「内の視点」という二つの視点を持っているからであると考えている。在校生の半数以上が寮生であるという本校の生徒の実情及び、本校がこれまでに取り組んできた地域との協働活動が実を結びつつある結果であり、本事業終了後も継続して地域との協働活動を行っていくことで、主体的に地域と関わっていくことのできる人材の育成に努めたい。



本校は災害時の緊急避難場所となっており、地域の防災拠点としての役割を担っているため、「防災班」は、防災意識啓発ゲームの開発と地域連携避難訓練の実施に取り組んだ。

防災意識啓発ゲームとして、昨年度から継続して防災意識啓発RPGの制作に取り組んでいる。三崎地区の地形を題材に、災害発生時に適切な行動を取り、命を守るための知識を身に付けることができるようになるゲームの作成を目指して開発中である。本校では、プログラミングの授業等を開講していないため、生徒たちは試行錯誤しながら活動に取り組んでいる。そのため、作業に時間がかかっているが少しずつ進捗しており、来年度以降も完成を目指して制作を続けていきたい。

防災意識啓発RPGは、小学生を対象としており、より多くの人を対象として本年度は防災意識啓発カードゲームの開発にも取り組んだ。カードゲームも伊方町を題材としており、起こりうる災害の種類やプレイヤーが担当するキャラクターの職業や条件なども、伊方町を想定したものとなっている。カードゲームは、発生する災害や割り当てられたキャラクターによって様々なパターンでの災害発生時における対処法などを学ぶことのできる内容となっている。現在、ゲームデザインはほぼ完成しており、実際の制作及びテストプレイを行って改良を加えて完成させる段階となっている。今後は、完成したゲームを使用したワークショップ等を開催し、万が一災害が発生したときに自分たちも含めて一人でも多くの人が正しい行動をとることができるよう、地域住民の防災知識及び意識の向上を図っていくことが活動の大きな目標である。

地域連携避難訓練では、昨年度に続き地域の保育所、小学校、中学校と連携して合同の避難訓練を行った。それぞれの施設から、地域の緊急避難場所に指定されている本校に避難してもらい、そのサポートや避難誘導を本校生が行った。また、避難所開設訓練も行

い、実際に「防災班」を中心として避難所開設に必要な簡易ベッドや簡易トイレの設置、パーソナルスペースの分けなどの練習を行い、より現実に即した訓練を行った。本年度で2回目ということもあり、生徒たちもスムーズに活動し、保育所の子どもや小学生たちに対して落ち着いて接することができていた。

また、本校ではスクールバスを利用して通学している生徒も多いため、本年度は新たな取組として地域の消防署と協働したスクールバスの事故を想定した避難・救助訓練も行った。消防署員から事故発生時の正しい避難行動や負傷者への対応について学ぶことで、命を守る行動について学ぶことができた。一般的に防災避難訓練といえば地震や家事を想定したものが多く、現実に即した訓練を行うことで、生徒は自分ごととして真剣に活動することができていた。これらの地域連携避難訓練を通して、生徒は自分たちが暮らしている地域でどのような災害が起こりうるのか、その時に自分たちはどのような行動をとるべきなのかということ、一人一人が考えながら考えることができ、より実践的な訓練を行うことができた。今後も、地域社会と関わりながら、自分の命も地域の人の命も守ることのできる防災活動を行っていきたい。



イ イベント

イベント部門は、「PR」、「カフェ」の二つの班に分かれて活動した。

昨年度まで、「PR班」は「イベント班」の名で、本校独自のイベントの開催と地域イベントへの積極的な参加を目指して活動していた。しかし、昨年度より続く新型コロナウイルス感染症の感染拡大による相次ぐイベントの中止を受け、本年度は本校の魅力を様々な方法で発信する「PR班」して活動することとなった。

「イベント班」の活動から継続して行った活動としては、「みさこうたいそう 115」の普及と、一昨年度から実施している文化祭での愛媛大学ダンス部との合同創作ダンスの実施が挙げられる。一昨年度までは、地域の大きな行事である「はなはな祭り」や地域の保育所、高齢者介護施設等において「みさこうたいそう 115」を実施させてもらっていたが、昨年度以は、新型コロナウイルス感染症の流行により、それらの行事が中止になり、「みさこうたいそう 115」の普及活動に苦労してきた。その中で、本年度対面でのイベントとして実施することができた、吹奏楽部のコンサートである「みさこうフェスティバル」や夏休みに行われた中学生一日体験入学、11月に行われた本校文化祭の中で一部振り付けを変え、接触しない形で体操を実施した。来年度以降も各種地域行事や、小・中学校の行事等と連携して「みさこうたいそう 115」を通して「みんなで さいこうのこの町を 生み出そう」「伊方町民の健康寿命を 115歳まで伸ばしたい」という、「みさこうたいそう 115」作成メンバーの思いを受け継ぎ、健康普及活動等を行っていきたい。

愛媛大学ダンス部との合同ダンスにおいては、これまで同様「PR班」の生徒が中心となって一般の生徒にも参加を募って実施した。愛媛大学ダンス部との合同練習だけでは

なく、イベント班の生徒がリーダーシップを発揮して本校生だけでの練習も行い、ダンスを完成させた。文化祭当日には大勢の人に見てもらい、本年度も大好評を博した。3年連続の取組となり、本校文化祭の定番プログラムとして地域の人にも認知してもらっており、今後も継続して活動を行っていききたい。また、本年度の活動は、愛媛大学ダンス部のリーダーの卒業研究のテーマともなっており、これまでの協働活動を通して愛媛大学との連携が深まったことが感じられた。

本年度の新たな取組としては、生徒の活動の様子を紹介する動画の作成及び発信による三崎高校のPR活動が挙げられる。本校では、学校ホームページとフェイスブックページを活用して情報発信を行っている。その際に使用する写真や動画は教職員が撮影及び編集を行っていたが、本年度は新たな取組として生徒が編集した動画も使用して情報発信を行った。また、その他にも中学生一日体験入学や文化祭などの学校行事においても生徒が編集した動画を使用したり、「YouTube 甲子園 2021 夏」と「YouTube 甲子園 2022 春」に応募したりするなど、動画による積極的なPR活動を行った。

来年度もイベントへの積極的な参加に加え、オンラインを活用したイベントの主催や情報発信なども積極的に取り入れ、ICT機器等を活用した新しい形での情報発信に取り組んでいきたい。



「カフェ班」は、本校卒業生でもある地元レストランのオーナーと協働して、高校生カフェである「みさこう Café」の運営に取り組んだ。昨年度同様、月に一回のオープンと新メニューの開発に向けて準備や研究を進めた。特に、本年度は以前から交流の深い立命館宇治高等学校との協働活動の中でアイデアが生まれた、抹茶を使った新商品の開発に力を入れて取り組んだ。しかし、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響により、月に一回の定期的な営業をすることができなかった。しかし、その中で生徒たちは、地域の海水から精製する塩の品質を高めるための研究を重ねたり、看板メニューの「生どら焼き」と「フレンチトースト」製造の技術や接客マナーを高めるための練習を行ったりして活動を続けた。また、新たな取組として商品のテイクアウトによる提供にも取り組んだ。町営寮である未咲輝寮の完成お披露目会の際には、お土産として来場者に生どら焼きを提供して喜んでもらうことができた。

12月には、NPO法人「二名津わが家亭」の協力を受け、その活動拠点である「二名津わが家亭」で出張みさこうカフェをオープンすることができた。少子高齢化が急速に進む伊方町においては、公共交通機関が整備されていないため他地域への移動が困難な高齢者も少なくない。これまでオープンしたみさこうカフェにおいても、「参加したいが、移動手段がない」「三崎地区だけではなく自分たちの地域でもオープンしてほしい」という意見を多くもらった。そのような意見を参考にし、今回の出張みさこうカフェを実施することになった。初めての試みである上、新体制となって初めてのオープンということも

あり、失敗したり苦勞したりすることもあったが、地域の人の協力を得て、無事に開催することができた。また、来場してもらった地域の人にも喜んでいただくことができ、今後のカフェ展開の新たなきっかけとなった。

今後も感染防止に留意しながら毎月のオープンを行い、地域の人を始めとした来場者に喜んでもらい、参加者同士の交流の場となることができる「コミュニティカフェ」としての運営ができるよう、活動に取り組んでいきたい。



ウ 特産品開発

特産品開発部門は、「商品開発」、「ツアー」の二つの班に分かれて活動した。本年度の「商品開発班」は、「海鮮鍋」「保存食」「瓶詰め」「うどん」「アロマオイル」「裂織り」の六つの小グループに分かれて活動した。

海鮮鍋グループは、地元の特産品である魚介類の魅力を発信することを目的に開発に取り組んだ。試行錯誤を重ねながら、一人暮らし世代の人をターゲットにし、好きなタイミングで食べることができるように、冷凍保存できる商品の開発を目指して研究を行った。地域の食材の中から伊勢エビやハマチなど具材となるものを選び、具材に合う味付けを研究した。今後は専門業者などと連携して冷凍保存の技術の研究を行う予定である。

保存食グループは、「防災班」と連携して災害発生時等の備蓄となる保存食の開発に取り組んだ。本年度は燻製にターゲットを絞り開発を行った。自分たちで施策を行った後で、伊方町の地域おこし協力隊員で水産担当である竹内義博氏を外部講師として招き、専門的アドバイスもらった。竹内氏は伊方町で水揚げされた魚を素材とした燻製の商品開発を行っている。竹内氏の指導を受けながら魚だけではなく、肉や卵、チーズなど様々な食材で燻製作りを行った。完成した燻製は真空パックで保存することで、さらに長期保存できるように工夫した。今後は、定期的に製造を行うことでローリングストックとして活用できるようにしていきたい。

瓶詰めグループは、地域で作られている果物や野菜の瓶詰め商品の開発に取り組んだ。特に、規格外や商品価値の低い野菜などを使った瓶詰めの開発に力を入れて取り組んだ。本校では、令和元年度より校庭のだいだいを使ったマーマレード作りに取り組んでいる。また、昨年度から校庭のヤマモモを使ったジャム作りも行ってきた。そこで、それらの経験を生かし、地域資源をさらに活用するための瓶詰め商品の開発を行うことになった。これまで商品として市場に出回ることのなかった野菜を原材料とした瓶詰めを作ることで、フードロス対策、保存食としての活用、農家支援、地域経済の域内循環など様々な利点が考えられる。今年度は商品をピクルスに絞り、レシピの研究を重ねた。条例等の改正により、高校生が瓶詰めに製造、販売を行うことが困難になったため、今後は今回開発したレシピを基に製造を請け負ってくれる団体、事業所等を探すことで、商品としての市場流通を実現できるようにしていきたい。

うどんグループは、昨年から、しらすを練り込んだうどんである「ちりめん」の開発を行っているメンバーが研究を行った。麺にしらすを練り込むことで、栄養価が上がるだけでなく、風味が付き塩分使用料を減らすことのできる健康的な麺が完成する。本年度は使用する塩の割合を変えた麺を製造するとともに、麺に合うスープの開発にも取り組んだ。その研究成果を「EGFビジネスアワード2021-2022」に応募し、第3位となる三浦工業賞を獲得した。麺のレシピは完成しているので、来年度は地域イベントでの試験販売等を行い微調整して、実際の販売へとつなげていきたい。

アロマオイルグループは、校庭の「だいたい」からアルマオイル抽出するという研究を行った。様々な抽出方法を試した結果、リービッヒ冷却管を利用した水蒸気蒸留法による抽出方法が効果的であった。それでも、時間がかかる上に抽出量が限られており、安定的な抽出は困難であることが分かった。そこで、抽出したオイルを使いせっけんやバスボムなどの商品開発を行うことでオイルの付加価値を高めることにした。来年度は、商品化に向けて安定したオイルの抽出及びアロマオイルを使用した商品の品質向上に努め、実際の販売を目標に研究を続けていく予定である。

裂織りグループは、裂織りを使用した商品の開発に取り組んだ。裂織りの技術向上のために、地域の保存会の人を講師に裂織りの講習を行った。これまで裂織りのシュシュやヘアゴムなどを製造してイベント等で販売してきた。本年度はそれらの商品も参考にしてパンカースの制作と裂織りストラップ作りのワークショップの実施方法を開発した。特にストラップ作りは参加したイベントごとに好評で、裂織りに興味を持ってもらうためのきっかけ作りに最適である。今後も、各商品の質を上げて定期的な販売を目指すとともに、地域のイベント等で積極的にワークショップを行い、裂織りの普及活動にも力を入れて取り組んでいきたい。

今後も、身近なものを素材として活用することで地域の資源を生かしながら地域の魅力を発信するとともに、研究を行う生徒たち自身が地域の魅力を再発見できるような活動を行っていきたい。

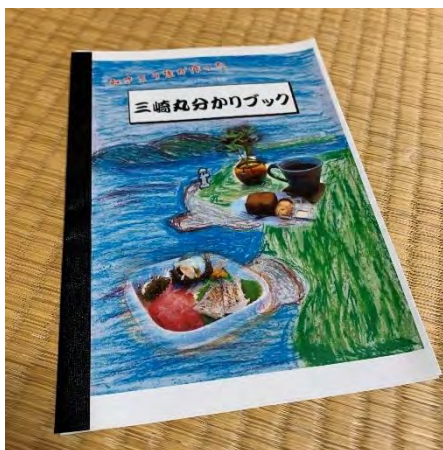




「ツアー班」は、伊方町の魅力を多くの人に伝えるためのツアーイベントの企画・実行を目標に活動している。本年度は、魅力発信ガイドブック、動画の作成に取り組んだ。

昨年度、高校生目線のガイドブックを作成するため、取材先の選定や、取材交渉、原稿作成などの作成過程をすべて生徒自身が担当し、三崎地区の商店やグルメについてのまとめを行った。今年度は、編集、印刷及び製本を行い、冊子を完成させた。完成した冊子は、本年度の中学生一日体験入学に参加した中学生に対して配布し、掲載箇所を一部ツアーにするなどして活用した。現在はガイドブック第二弾として「歴史・文化編」を作成しており、今後も継続して様々なジャンルの冊子を発行していく予定である。

動画については、昨年度に引き続きサイクリング動画を作成した。昨年度は隣の八幡浜市の道の駅「みなと」から、伊方町観光拠点施設「はなはな」までのサイクリング動画を作成したが、本年度は「はなはな」から四国最西端「佐田岬灯台」までの動画を作成した。また、サイクリングに使用した自転車も「はなはな」でレンタルできるe-バイクを使用することで、利用者目線の動画となるよう工夫した。完成した動画は、本校フェイスブックページで公開している。来年度は、これまでに作成してきたサイクリング動画を基に、実際にサイクリングイベントを開催することが目的の一つである。新たな取組として音声ガイドの作成に取り組んだ。この活動は、伊方町の魅力を外国人に対しても発信したいという思いから始まった。本年度は、伊方町最高峰である伽藍山の英語での音声ガイドの収録を行った。また、現在、伊方町と協働して佐田岬灯台砲台跡の音声ガイドを作成するための調査等を行っている。今後は伊方町や地元NPO団体等と協働して、町内各所の音声ガイドを作成していきたい。



エ センたん部

せんたん部とは、地域活性化に取り組む有志のグループであり、これまでに地域活性化シンポジウム「せんたんミーティング」の開催や、地域PR映画「せんたんビギンズ」の作成などを行ってきた。せんたん部という名前には、「四国最西端の高校から最先端の取組を行う」という思いが込められている。本年度は、マーマレード作り、「#allwecando」プロジェクト、オンラインフェスティバルへの参加、各種イベントに参加してのプレゼンテーションなどを行った。

三崎高校の中庭には、かつて三崎地区の重要な特産品であった「だいだい」の木が4本植えられている。現在、伊方町の柑橘の主力品種は、清見タンゴールや、デコポン、紅まどんななどであり、だいだいを生産している農家はほとんどない。本校のだいだいも、地元農家の人に寄贈してもらった貴重なものである。しかし、だいだいは酸味の強い柑橘であるため、これまではその実は食べられることも、活用されることもほとんどなく廃棄してきた。これまでも、このだいだいの実を活用できないかという意見も出たが、決定的な案がなく、活用できずにいた。

一昨年度、隣の市である八幡浜市でマーマレードの世界大会、「ダルメイン世界マーマレードアワード&フェスティバル」が開催されることを知り、これをきっかけに地域の新しい特産品を生みだしたいと考えたせんたん部の生徒たちを中心に、マーマレード作りに挑戦した。試行錯誤を繰り返しながら、三崎産のはちみつを加えることで、酸味と甘みのバランスの取れたマーマレードを作成することができた。保護者に分けてもらった清見タンゴールをブレンドしたものを加え、計4種類のマーマレードを作り、銀賞一つ、銅賞二つという結果だった。昨年度は、アワードでの金賞を目指して、過去のアワードで金賞を受賞した講師による講習会に参加したり、清見タンゴールに加え、「甘平」や「せとか」など、地域で栽培されている様々な柑橘類との組み合わせを試したりするなどして研究を重ねた、校庭のだいだいをベースに新たに7種類のマーマレードを作り、ダルメイン世界マーマレードアワード&フェスティバルに出品したが、新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、残念ながら中止となってしまった。出品したマーマレードは、出品感謝状とともに返送されてきた。金賞を目指していた生徒たちにとっては残念な結果となってしまったが、昨年度から、JAの営農指導員や地元農家の人と協働して、これまで手付かずだった、だいだいの木の手入れを行うなど地道な活動を続けており、金賞獲得に向けて研究を続けた。本年度は4種類のマーマレードを完成させ出品した。結果として、高校生部門において金賞及びベストカテゴリー賞一つ、銅賞二つという成果を収めた。金賞獲得を目指して3年間研究を重ねてきたが、ついに目標を達成するとともに部門最優秀であるベストカテゴリー賞を受賞することができ、大きな励みとなった。現在は、地域の二つの企業と協働して、金賞を受賞したマーマレードの商品化に向けて活動している。商品名やパッケージデザインなども金賞受賞生徒たちが考案し、工程や味の最終確認など完成目前まで進んでいる。販売後は町の新たな特産品とできるよう、「PR班」と協力して情報発信を行っていききたい。

また、来年度も八幡浜市でダルメイン世界マーマレードアワード&フェスティバルが開催されることが決定しているので、新たなレシピでの金賞受賞を目指して、来年度用に4種類のマーマレードを作成した。今後もマーマレードの作成を通して地域の新しい産業作り、地域の活性化につなげていきたい。



2月には、愛媛大学と協働して、令和3年8月に落雷による火事で焼失した伊方町内唯一の温泉施設である「亀ヶ池温泉」の再建に向けたオンラインイベント「よみがえれ亀ヶ池温泉プロジェクト」を開催し、せんたん部の生徒を中心に参加した。愛媛大学生を中心に伊方町出身の大学生と本校生が亀ヶ池温泉の再建に当たり、どのような施設であってほしいかということテーマにワークショップを行った。本校の参加生徒は伊方町出身の生徒はもちろん、県外出身の生徒も参加しており、様々な視点からのアイデアが活発に出された。このワークショップで出た案を愛媛大学でまとめ、伊方町亀ヶ池温泉再建検討委員会で提案書という形で提出された。町の政策に高校生が関わる機会はほとんどないため、生徒にとっては貴重な経験となった。また、今回参加した生徒たちは、今後亀ヶ池温泉の再建が進むにつれ自分たちの提案が形になっていく様子を見ることで、自分たちの行動がまちづくりにつながるという手ごたえや喜びを感じることができ、社会と関わることの大切さを実感することができると期待している。今回のプロジェクトでリーダーを務めた愛媛大学2回生は、本校の卒業生でありせんたん部のメンバーでもあった。また、高校生の時に愛媛大学主催の「踊る！亀ヶ池温泉」に参加し「みさこうたいそう115」を作成した生徒でもある。高校時代の活動が大学生となって生かされていることを知り、本事業及び本校の地域協働活動の成果を感じることができると期待している。今後も本校卒業生との協働活動を積極的に行っていくことで伊方町との関わりを増やし、将来ブームラン人材として帰ってくる生徒を一人でも多く増やすことができるよう、伊方町とも連携しながら様々な活動に取り組んでいきたい。



せんたん部は、様々な企画の立案や運営、事例発表を行うなど、本校の地域との協働活動におけるシンボルともいえる存在である。しかし、せんたん部として活動する生徒に

は、これまで大きな行事の企画・運営を行ったことがなかったり、人前での発表に苦手意識を持っていたりしている生徒も少なくない。せんたん部はその活動内容から、他の班の生徒よりも外部の人と関わることや、校外外を問わず話し合いをする機会が多い。そのため、企画力やコミュニケーション能力などの力が、日々の他者との協働活動を通して自然と伸長していると考えられる。今後は、せんたん部の事例をモデルケースにし、他の研究班における活動はもちろん、教科の授業や学校行事等においてもこのような「他者との協働活動による生徒の成長」を、より推進していくことができるよう、カリキュラム開発等の研究を進めていきたい。

以上のように、各研究班における研究活動が、本事業の探究的な学びの中心となる活動である。本校は、伊方町外から入学してきた生徒や、中学校時代につまずきを経験している生徒など、多様な生徒が在籍している。入学時には、伊方町への関心や愛着が低い生徒や、各班 15 人程度の少人数の班とはいえ、班活動や他者との協働を伴う探究活動を苦手としている生徒も少なくない。しかし、このような研究活動を通じて生徒は大きな成長を遂げ、伊方町への愛着を高め、探究活動に意欲的に取り組んだり、人前で堂々と発表したりすることができるようになってきている。多様な背景を持つ生徒たちに対する個別最適化された学びの提供という観点からも、生徒一人一人がさらに意欲的に研究に取り組むことができるプログラムの開発に来年度も取り組んでいきたい。

(3) 県外フィールドワーク

ア 宮崎県研修

(ア) 研修地

宮崎県五ヶ瀬町

(イ) 視察の目的

「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の成果発表会の見学を通して、将来、地域で活躍する資質や能力、協働意識を育成するとともに、新たな視点から自分たちの取組や地域を見直し、視野を広げる機会とする。

(ウ) 視察の日程

・12月9日(木)

19:00~20:00 五ヶ瀬中等教育学校 訪問
教養講座の見学及び参加
書道、ロボコン、GISで探究する宮崎の防災、ボクササイズ、バレーボール、寺子屋シェルビー(英語の自習)の講座を見学、手話講座に参加。

・12月10日(金)

9:30~11:00 五ヶ瀬町内見学(教職員1名、生徒3名)
10:20~12:15 「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」最終報告会
【第1部】参加(教職員2名)
11:25~12:15 五ヶ瀬中等教育学校3年生との交流
12:15~13:20 昼食・寮見学
13:50~14:25 「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」最終報告会
【第2部】生徒によるプレゼンテーション参加(全員)
14:35~15:40 「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」最終報告会

【第2部】生徒による探究ワークショップ参加（全員）

16:15～17:10 意見交換（教職員3名）

16:15～17:10 校内見学・寮見学（生徒3名）

・12月11日（土）

9:00～10:30 高千穂峡見学（地域の観光資源活用）

(エ) 視察の内容と学んだこと

a 1日目視察の内容

① 五ヶ瀬中等教育学校の概要

五ヶ瀬中等教育学校は、宮崎県の「学びの森」フォレストピア構想の元、五ヶ瀬中学校と五ヶ瀬高校が平成6年に開校し、平成11年の条例改正を受けて、中等教育学校に校種変更し、誕生した。各学年40名、6学年（前期3年後期3年）の全寮制の学校である。

全国に先駆けて総合的な学習の授業に取り組んだ学校であり、その基礎は「学びの森」としてのローカル性にある。例えば、「総合的な探究（学習）の時間」においては前期課程の1・2年生では「共学共創」の精神の下、地域の方、特に五ヶ瀬村の人々との単純な経験、田畑の耕作、生き物を育てる等の体験を通して、生徒一人一人に彼ら自身が不思議に思うことを発見させ、それを基に探究を深めていく。3年生ではその疑問を深め自分と社会との関係性をつなげていく。4年生では「哲学対話」や「知の理論」等を生かして、発見した課題を抽象化したり一般化したりし、普遍的なものへと深めていく。5、6年生では課題の成果をまとめ、学校外の場で発表していくことを目指していく。

1、2年生の地域との交流においては、生徒自身が直接地域の方とのやり取りを行い、活動をしていく。その際、やり取りの方法はメールやslackなどのチームコミュニケーションツール等によるもので、教員からは挨拶文の書き方などの礼儀作法のみ伝え、それ以外のことは生徒自身が直接地域の方と創り上げていく。教員と地域の方とのやり取りについては、初めに生徒との連絡の取り方に関して、地域の方にメールやslackの使い方などを地域の方に理解してもらうよう学校から働きかけていた。また地域の方の方針と学校の方針の行き違いなどが起こらないように、連絡内容やその考え方については充分風通しがよいものとなるよう配慮していた。

3、4年生の発見した課題を深める作業においては、メタ認知や批判的思考などのいわゆる「知の理論」や「哲学対話」を用いて、問いそのものを探究していく過程となっている。特にメタ認知や批判的思考については、全国の総合的な探究で結果を出し、その後目覚ましい活躍をする生徒を数多く輩出している学校では必ずと言っていいほど扱われているもので、その重要性を再確認できるものとなっていた。

5、6年生の探究した内容の発表については後述するが、県単位での発表やマイプロジェクトへの応募探究甲子園での英語による発表など、学校という狭い枠だけでなく外部に向けて発信することで3・4年生における問いの深め方の方向性や、自身の探究の社会的価値についてなどを確認するいわゆるメタ認知する場ともなっていた。

また、地域との交流を通して生徒が成長するというその過程の汎用性からSGHにも指定され、今回視察した際には地域協働（グローバル型）事業の成果発表会を

ちょうど参観することができたため、そのことについては後述する。どちらも共通している五ヶ瀬中等教育学校ならではの発想は、自然が多く残るこの地域で「野性味」溢れる生徒を様々な場面で活躍させていくというものであった。

② 教養講座（放課後活動）の見学

多くの学校の放課後の活動として、生徒会活動や部活動などが挙げられるが、五ヶ瀬中等教育学校では夜 20 時から 1 時間程度、教養講座という希望者を対象とした活動を行っている。講師は必ずしも教員ではなく、地域の方や中には生徒が講師となっている活動もあった。寺子屋のように何かを伝えたい人が講師となりその内容を学びたい生徒が参加するまさに学ぶ場というものを提供している場であった。前述した通り今年度の内容は書道、ロボコン、GIS（地理情報システム）で探究する宮崎の防災、ボクササイズ、バレーボール、寺子屋シェルビー（英語の自習）、手話講座が設けられていた。ロボコンについては前期生が県の大会で優勝したこともある。GISについては後述する生徒全員が持つ Chrome book を活用しての活動となっていた。基本的にどの活動も教員もしくは地域の方などの大人が講師を務めていたが、手話講座のみ生徒が講師を行っていた。この生徒は史上最年少で手話検定 1 級を取得した前期課程 1 年生で、実際に本校の生徒も参加させていただいたが、自身は手話ができるだけでなく、表現力も優れていた。どの講座も希望者の参加ということもあり、やらされていると感じている生徒は皆無で、授業とは環境は異なるが一つの学びの場となっていた。

b 2 日目視察の内容

① 「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」最終報告会【第 1 部】

本報告会は地域協働（グローバル型）事業の 3 か年活動報告会であった。本事業では共学共創の価値観の元、地域との協働を種として海外も含め社会に散在する様々な課題へと生徒の目を向けていけることを目的としていたものであった。五ヶ瀬中等教育学校にとって本事業の前身であった SGH では「野性味あふれるグローバルリーダー」が目指す生徒像であったことに対して、本事業では「野性味あふれる地球市民」としており、地域とのつながりを始点として、世界も含め様々な社会問題に対して自分事として捉えることができるような生徒の育成を目指していることがうかがえる。その内容は、授業としては前述した総合的な探究（世界農業遺産（GIAHS）を基にしたもの）を軸としての発表であった。

着目すべき点であったのは、学校の教育活動を生徒の視点から見える化する組織診断を行ったこと（三菱 UFJ リサーチ&コンサルティングに外部委託）と五ヶ瀬中等教育学校独自の生徒評価である。

五ヶ瀬中等教育学校の生徒たちが様々な場面で活躍しているのも、カリキュラムや授業だけでなく、その独自の評価方法までも含めた学習活動によって成功していることが感じられる報告会であった。

② 昼食及び寮見学

昼食は、全寮制の学校であるため、生徒は昼になると一度寄宿舎に戻り昼食をとることとなっていた。栄養士が 20 人弱ほどおり、毎日全校生徒の口の中に入るものについても十分に気を遣っていることが分かった。寮は基本的に男女の行き交いはできない構造となっており、ちょうどその間に食堂があるという作りになってい

た。また、寮母が常駐しており生徒が生活に困った点がある際などは、いつでも相談にいけるようなシステムとなっていた。寮則で驚いたことは、スマートフォン等、外部との通信ができるような機器は持ち込みが禁止となっていたことである。学校の校舎内はWi-Fiが完備されており、生徒一人ひとりが所持しているChrome Bookでインターネットに接続可能であるが、寮ではWi-Fiも携帯電話等もなく過ごすこととなっていた。保護者が、もしくは生徒が連絡を取りたい場合は、宿舎においてある電話台（公衆電話のようなもの）を利用することとなっており、毎日夕方に保護者から連絡に対応することのできる時間となっていた。五ヶ瀬中等教育学校の教育内容を見てみると、SGHであったり、外部にオンライン等で発信したりとインターネットとは切っても切り離せない関係となっていることが分かるが、学校外の時間に果たして常にインターネットが必要かというところというわけでもなく、ましてやネット環境が必ずしも子どもたちの生活に不可欠ではないということが十分に理解できる生活を送っていた。

③ 「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」最終報告会

【第2部】前半 生徒によるプレゼンテーション

四つのブースに分かれて現6年生（後期課程）が総合的な探究のまとめでもある発表をそれぞれ行った。四つの中の発表も外部に何かしらの形で発信したものであり、以下ではそのうち二つについて報告する。

一つ目は地域医療について英語で発表したものである。発表した生徒の原体験として五ヶ瀬村の急激な人口減少と医療に対する危機感があった。前述したとおり、「総合的な学習の時間」の1、2年生の時に地域との活動の中で疑問に思うことを見つけ、3、4年生の時にその課題を社会との繋がりの中で捉え、5、6年生の時には外部に対して発表（この内容は、探究甲子園にて発表された）と、「総合的な探究の時間」を通して生徒自身が学校の目標に沿って学習し成長したことがうかがえた。また英語で発表したことで、国内だけでなく、海外においても同様の課題があることを示唆しながらその共有を図ろうとする意図が見受けられた。生徒同士の質疑応答で、おそらく英語がネイティブである生徒から英語で直接質問があり、互いにその内容を英語でやり取りする場面が見受けられた。

二つ目は若年層の投票率低下をどう解消していくかについて発表したものである。これは第5回高校生国際シンポジウムで、英語で発表されたものである。日本では特に低投票率が目立つが、この発表で着目すべき点であったのは、早い段階から投票する経験をさせることが必要ではないか、という結論であったが、その対象が幼稚園児などの小学校入学前の子どもたちに焦点を当てている点である。民主主義や投票という発想は、未就学児にとっては少し難しいと思われるが、五ヶ瀬中等教育学校の生徒は説明の方法を工夫することで、スムーズに未就学児による模擬投票活動を行うことができおり、高校生ならではの視点による活動がすばらしかった。

④ 「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」最終報告会

【第2部】後半 生徒による探究ワークショップ参加

後半は4年生全体に対する「総合的な探究の時間」のワークショップであった。新たな体験を生徒にさせるわけではなく、今までの「総合的な探究の時間」を生徒に振り返らせるものであった。それまでに経験した各行事等をどの枠に当てはまるかをグループで話しながら分けていくものであったが、特筆すべきはその枠であっ

た。区別するその枠は、「総合的な探究の時間」で生徒に身に付けてほしい力であり、見る力、問う力、試みる力、関連付ける力、つながる力の五つであった。これらは本事業の目指すべき生徒像としても列挙されている項目であり、教員はもちろんのこと、生徒自身もこの授業でどんな力を身に付けていくべきなのかを理解していることが充分にうかがえた。グループそれぞれでほぼ似た分類となっていたが、明らかに異なる場合などは教員が、なぜ生徒がそのように考えたのかを尋ね、行事とその評価を確認していた。おそらく多くの学校で何かを振り返らせる際には、生徒が文章化して何かの媒体で表現させることがほとんどだと思うが、このようにグループワークとしてお互いに表現しあいながら振り返らせることでメタ認知等の促進にもつながっているのだろうと予想できた。

⑤ 意見交換

最後に地域協働（グローバル型）事業の担当者2名の教員と意見交換を行った。うち一人は前述した学校独自の生徒評価を導入した教員で、その導入の経緯もうかがうことができた。以前、五ヶ瀬中等教育学校にいらした先生が総合的な学習や学校を盛り上げていく上で、生徒を適切に評価していくにはどんな方法がよいかを考えた結果、学校独自の生徒評価が提案された。この評価方法は、従来の、ここまでできたから数値でいくつ、という評価ではなく、はじめに学校として目指すべき生徒像が示され、そこに到達するためにどんな段階が必要なのか、そのことをどのように評価していくべきなのか、という目的で行われるものであった。

また、もう一方の教員からはこの「総合的な探究の時間」を行っていく上で学校としてどのような環境が必要とされたか、をうかがうことができた。最も大事なことは風通しの良さで、学校内で教員がお互いどんな仕事をしているかはもちろんのこと、意見交換も活発であるとのことだった。また地域との強いつながりが必要とされる中で、様々な意見が挙がってくるが、腹を割って教員側も地域の方に納得してもらえるまで話をする必要があるとのことだった。前述したことは当たり前のことではあるが、五ヶ瀬中等教育学校の視察という短い時間でも、確かにその空気を感じることができた。さらに各教員のITリテラシーのレベルが非常に高いものとなっていた。生徒はChrome Bookを使っていることに対して教員の標準装備はwindows、また教員によってはmacを活用している方もおり、OSが異なる機器であってもお互いにやり取りできる、指導できる、活用できるというのは珍しい環境であると感じられた。

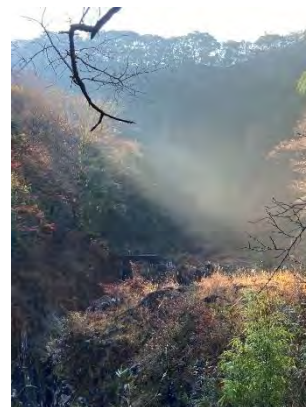
一方で生徒の学力レベルの高さによるところが大きいことも確認できた。各活動を参観する中で、そもそも言葉が分からないことや、論理が分からない、という場面に一度も出くわすことがなく、伝わらない際には分かるまで言葉を用いて説明することができていた。「総合的な探究の時間」や事業全体も、細部にわたり計画されており、生徒の基礎学力の高さもうかがえるものであった。

c 3日目視察の内容

① 高千穂峡見学（地域の観光資源活用）

三日目は地域の観光資源の見学として高千穂峡を見学した。日本の各種古典に出てくる高千穂であるが、その名に恥じない自然の雄大さを感じることができた。高千穂峡に行くまでも、多くの橋を通ったが、所々にある渓谷が非常に深い所にあり、初めに橋を作ったときの苦労を想像できた。三崎高校が海の近くにあることに対し

て五ヶ瀬も含め高千穂峡は大地に囲まれた地であり、まさに母なる大地と感じずにはいられない風景も多数あった。



イ 石川県研修

コンソーシアム参画団体でもある公営塾「未咲輝塾」講師神宮一樹氏による研修報告

(ア) 研修地

石川県能都町

(イ) 視察の目的

地域の文化や特産物、教育など地域資源を総合的に生かし、地域おこしに積極的に取り組んでいる能登高校への学校訪問を通して、地域の資源を複合的にとらえ最大限に生かす地域おこしの手法について学ぶとともに、新たな視点から自分たちの取組や地域を見直し、視野を広げる機会とする。

また、生徒会を中心に自発的に各種活動に取り組んでいる生徒の活動の様子を見て学ぶことで、自校での活動に生かす機会とする。

(ウ) 視察の日程

令和3年12月10日（金）～12日（日）

(エ) 概要

今年度の初めより、三崎高校と石川県立能登高校の生徒間で、協働探究プロジェクト〈みさのと〉が行われてきた。これまでオンラインのミーティングや、互いの地域の特産物を送りあって商品開発を行ってきたが、ついに三崎高校の生徒が能登町を訪問し、対面での協働活動が実現した。この研修に参加した生徒5名、引率教諭1名に同行する形で視察を行った。

10日夜は生徒、高校教諭とともに公営塾の視察を行った。「まちなか鳳雛塾」は旧公民館を利用しており、能登高校からはやや距離があるが十分なスペースがある。高校生だけでなく小・中学生対象のクラスもあるため、五つの部屋を学年や用途（個別指導、英語リスニング等）に応じて使い分け、一室は休憩室に充てている。生徒たちは特に女性講師とよく会話をしており、音のしないカーペットやキャスター付きの椅子、塾生専用の物置スペースなどに惹かれている様子だった。

11日、午前中は生徒、教員とともに能登高校へ行き、協働探究学習の様子を見学・記録した。これまでのオンラインミーティングの内容を基に、伊方のみかんを使ったマフィンを作った。比較的大人しい能登高校の生徒を、三崎高校の生徒がリードする姿が印象的だったが、お昼頃にはすっかり打ち解けている様子だった。

午後は神宮のみ別行動し、再び公営塾に赴き情報交換を行った。教科指導の方法（個別指導と授業形式の使い分け等）や塾生の集め方を中心に質問を受けた。一方、「まちなか鳳雛塾」の事例を受けて今後「未咲輝塾」に還元したい内容は次項にまとめる。

12日は地域観光と移動のため、生徒引率を補助した。

(オ) 今後の塾運営に向けて

a スタッフ人員と施設の充実

「まちなか鳳雛塾」には現在4名の講師の他に、魅力化コーディネーターと事務スタッフがおり、講師は教科指導に専念しやすい体制が整っている。加えて、大学生のアルバイトスタッフが中学生の指導を担当している。また、前述したように教室数が多く、各教室に1講師の配置が可能になっている。

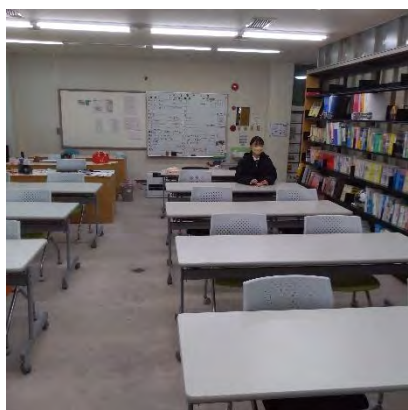
また、平日22時まで開塾し、土日も主に高3生への指導を目的として開塾しているが、これもスタッフ数を生かして勤務時間をうまく組み合わせているからこそ可能なことだと考えられる。

b 参加生徒の声

今回、他の公営塾の視察を生徒とともに行ったことで、前述したように様々な声を聞くことが出来た。より良い学習環境の整備には、当事者である生徒たちの意見を吸い上げる必要性を感じたので、今後は定期的なアンケートの実施等を検討していきたい。

c 交流の継続

まちなか鳳雛塾は理系講師が今年度で退任する一方、未咲輝塾にはいない文系・女性の講師がおり、双方の塾で部分的にでも役割を補完できる可能性がある。また、まちなか鳳雛塾の中心となってきた講師2名が今年度で退任するが、未咲輝塾でも来年度以降講師陣の入れ替わりが予想される。個人が入れ替わりの中で、組織としてどのようにノウハウを維持していくかという点では、先行事例として参考にしたい。オンラインを念頭に、生徒たちが積み上げてきたつながりを、公営塾ベースでも継続して持ちたい。



まちなか鳳雛塾の教室



約20台のiPad



まちなか鳳雛塾スタッフと、三崎高校生



〈みさのと〉協働探究活動



まちなか鳳雛塾スタッフとの情報交換



研修参加生徒、引率教諭、神宮

(4) 地域おこし講演会

9月には、濱田企画事務所代表であり、これまで本校の探究活動において協働してきた濱田竜也氏を講師として招き、1年生を対象に「探究活動の進め方」というテーマで地域おこし講演会を行った。当初は、対面での講演会を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の拡大により、オンラインでの実施となった。本年度は、1年生の「総合的な探究の時間」の探究活動として、本校の7年間の歴史をまとめた冊子として「せんたん book」を制作することとなった。そこで、その準備段階として、本校のプロジェクト学習を含め、全国各地の高等学校や行政等と連携して地域活性化プロジェクトに取り組んでいる濱田氏から、プロジェクトの進め方について概要を説明してもらうとともに、「せんたん book」作成に向けた具体的な手法を学ぶための講演会を実施した。また、その後もオンラインでのリーダー研修などを通して、1年生の活動に伴走してもらっている。1年生にとっては、高校入学後、自分たちが中心となって進めていく大きなプロジェクトになっているが、濱田氏に伴走してもらうことでスムーズに活動することができている。また、本後援会で身に付けた手法を用い、個人探究活動において自走する生徒も増えており、探究活動の積極的な推進につながっている。

「せんたん book」は関係者へのインタビューや文字起こし、構成などを1年生が実施しており、本年度中の発行に向けて最終段階に入っている。完成した「せんたん book」は、校内での探究活動に使うほか、地域に施設や大学等に置いたり、地域のイベントなどで配布したりするなどして、新たな形の情報発信の方法として活用していきたい。



5月には、3年生の「未咲輝学Ⅲ」の授業において、11月には2年生の「未咲輝学Ⅱ」の授業において、株式会社伊予銀行 高村尚吾氏を講師として起業と金融についての講演会を行った。

「未咲輝学Ⅲ」の授業において、ブーメラン人材育成のためのプログラムとして起業につ

いての学習を行っている。昨年度の「未咲輝学Ⅲ」の授業では、生徒一人一人がビジネスプランを作成し、優秀作品をビジネスコンテストに応募した。しかし、校内だけの指導では作成したプランを実社会でどのように実現していくのかを考えさせることにおいて不十分な面も見られた。そこで、専門的な見地を有する外部人材と協働することで、より実社会に根差したカリキュラムを編成したいと考え、株式会社伊予銀行三崎支店と協働した活動を行うことになり、その中で講演会を実施した。まず、金融についての基礎的な話をしてもらい、商業科目を履修していない生徒にも金融や商業の仕組みについての基礎知識を身に付けさせた。次に、資金についての考え方や貸借対照表の見方など、起業に関わる専門的な話をもらった。3年生は年度当初に行うことで、本年度の活動の参考として、2年生は年度末に行うことで、次年度の活動への準備段階として実施した。生徒からは、「これまであまりよく知らなかった経済の仕組みについて知ることができた」「専門的で難しい内容もあったけれど、興味深かった。今日聞けなかった話についても、ぜひまた聞く機会を作ってほしい」といった好意的な意見が多く聞かれた。新型コロナウイルス感染症の感染拡大による活動の制限など予定通りに進まないこともあったが、「未咲輝学」の授業も開設から2年が建ち、カリキュラムとしての方向性が定まってきている。来年度は開設3年目となり、「未咲輝学Ⅰ～Ⅲ」の学習サイクルが一回りするようになる。これまでの取組の成果を検証する機会とし、今後のより良い実践の推進に向けて成果と課題の検証を行っていききたい。



10月21日に専修大学商学部大崎恒次准教授及び大崎ゼミの大学生と本校でせんたん部に所属していた大学生のオンライン交流会を行った。

また、12月16日には本校教職員と本校卒業の大学生が、大崎ゼミの研究発表会にオンラインで参加した。

大崎ゼミとは、昨年度よりオンラインによる事例発表会を行ったり、「総合的な探究の時間」の研究班との交流活動を行ったりするなどの交流を行ってきた。今回は、高校生と大学生ではなく、大学生同士の交流という新たな取組となった。高校生という「探究者」と教職員という「伴走者」との中間の存在である「関係者」としての大学生同士が交流できたことは、本校の探究活動において非常に大きな意味があったと考えている。本校をハブとして、本校の卒業生も含めて伊方町や本校の活動に興味や関心のある大学生同士を結び付け、大学生コンソーシアムを形成していくことは、本校にとっては関係人口とメンターの増加、参加大学生にとっては研究の実践の場の獲得という双方にとって価値のある活動になっていくと考える。また、オンラインを効果的に活用することで、その成果をさらに高めることができる。その大学生が大学卒業後も本校と関わり続けていけるシステムを構築することで、さらに大きな本校支援の体制を整えられるとともに、ブーメラン人材の育成にもつながっていくと確信している。今後も、これらの活動を積極的に推進していきたい。

本校の生徒は、地理的に他校生や外部人材との交流が難しい状況にある。そのため、このような機会に多くの人と交流することは、非常に貴重な機会であり、交流から刺激を受け新たな気付きを得る生徒は多い。このような外部の人との交流の中で、新しい知識を得たり、意見交換をしたりすることによる学びの効果は大きい。また、そうすることで、自分たちの

地域や自分たちの活動を客観的視点から見つめ直すことにもつながっており、自己評価・改善のプロセスとなっている。本年度はコロナ禍の影響により、多くの学校、関係機関でオンラインの取組が加速している。また、このような状況だからこそ、高校生のオンライン活用スキルや探究活動の進捗具合にも大きな差が生まれている。これまでは学校の立地状況により教育資源に格差が生まれていた面もあった。しかし、オンラインを効果的に使うことで都市から離れた地域にある学校においても、格差を減少させることができる。地域にある高校の新たな教育資源として、オンラインによる講演会や交流会などのシステム作りやネットワーク作りにも取り組んでいきたい。

(5) 地域理解

1年生を対象に、「未咲輝学Ⅰ」の授業において、伊方町の文化財保護委員会委員長でもあるカリキュラム開発等専門家の黒川信義氏の協力を受け、地域理解活動を行った。

11月には、黒川氏と運営指導委員会の委員でもある町見郷土館館長の高嶋賢二氏の案内で、三崎地区に遺る赤坂坊山石塔群の現地研修を行った。同石塔群は中世ごろに建造されたと言われており、その原材料の石は、九州や中国地方など様々な地域から産出されたものであり、当時三崎地区が海上交通の要所となっていたことを示す貴重な手掛かりとなっている。今回の調査では、黒川氏、高嶋氏の指導の下、磁石を用いて「よくつく石材」「僅かにつく石材」「全くつかない石材」に分類し、石塔の岩相と石材サンプル写真とを比較して、「凝灰岩」「安山岩類」「花崗岩類」のいずれに当たるかという調査を行った。実習結果データを分析した結果、8割以上が正解であったことなどから、生徒たちがある程度の理解力・観察力を高められたと感じられた。また、赤坂坊山周辺の地形（海岸段丘と石塔群の関係）や、松森城址、三崎水軍などの説明にも興味を持つ生徒も一定数見られ、地域の歴史や文化への関心の高まりも感じられた。



1月には、文化財研究のための拓本技術を身に付けるための実習を行った。まず、拓本の文化的意義やその実施方法などについての講義を受けた。また、実際に黒川氏が実施した拓本の実物を紹介してもらったり、自分が使う道具を作ったりすることで拓本への興味・関心を高めた。次に校内のマンホールを使つての現地研修を行った。本来であれば、実際に地域

に出たの拓本実習を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染症の感染予防の観点から、校内での実施となった。生徒たちは、当然全員が拓本実習が初めてであり、風に吹かれて用紙があおられたり、絵の具を付けすぎて、紙が破れたりするなどの苦労もあったが、全員が拓本を制作することができた。昨年度に拓本実習を行った生徒たちの中には、本年度、伊方町の地域活動団体である「佐田岬みつけ隊」に参加している者もあり、黒川氏の指導の下、実際に地域の石碑の拓本を行い、保存活動を行った。来年度は、拓本を教材に国語科の授業において解釈を行ったり、地理・歴史科の授業において各年代における資料として活用できる教科等横断型の取組を行ったりしたいと考えている。



2月には、町見郷土館を訪問し、高嶋氏より展示物の説明や佐田岬半島の昔の生活についての解説をしてもらった。県外生はもちろん、地元の生徒にとっても見慣れない道具や聞きなれない話が多く、興味を持ったようであった。その後、黒川氏から佐田岬半島の岩石と地質についてパワーポイントによる講義を行ってもらった。実際に佐田岬半島で収集した岩石サンプルを用意してもらったことで、佐田岬半島の地質についての理解が深まった。この岩石サンプルに興味を持った生徒が多くいたため、現在は岩石サンプルを学校の図書室で展示してもらっている。

昨年度、本カリキュラムを受けて佐田岬半島の歴史や文化、昔の暮らしなどについて強い関心を持った生徒たちが「佐田岬みつけ隊」に参加し、町内散策や地形観察等の活動に取り組んでおり、本カリキュラムの成果が表れている。また、本年度の1年生にも「佐田岬みつけ隊」への参加希望者がおり、生徒の自発的な地域研究や地域団体との協働活動につながっている。今後も、生徒の地域理解を深め、自走性を高められるカリキュラムとすることができるよう検証を行っていきたい。





3月には、瀬戸地区にある愛媛県指定天然記念物の「須賀の森」の見学を行った。「須賀の森」は瀬戸地区三机湾入口から伸びた砂嘴の上にある。黒川氏から、「須賀の森」に入る前に砂嘴のでき方や、入口に置かれた石碑（注連柱：しめばしら）によってその奥が聖域であることを説明してもらった。須賀の森に入り、真珠湾攻撃で命を落とした「九軍神」や近年江戸時代から謎となっていた鬼面が発見されたことなどを説明してもらった後に三机湾などを見渡し見学を終了した。地元出身の生徒でも、須賀の森が県指定の天然記念物に指定されていることを知っている生徒はほとんどいなかったため、どの生徒にとっても新たな発見があったようであった。ただし、学校との距離が離れているため滞在時間を十分にとることができないという課題が見られた。これまで本校の地域活動の多くが、伊方町内の中でも学校所在地の三崎地区で行われてきた要因もそこにある。今後は課題の解決策として、授業時間の柔軟な編成や地域コーディネーターとの連携、地域拠点を構築した課外時間における活動の実施など、新たなシステムづくりに取り組んでいきたい。

長年勤務している教職員であっても、地域の歴史や地形に精通することはほとんどないため、これまでは地域の資源を活用しきれていない面もあった。しかし、黒川氏や高嶋氏のような専門の見地を有する地域人材と協働することで、地域資源を十分に活用できるということが分かった。今後も、分野に応じた地域人材の発掘及びデータ化を進め、三崎高校ならではの外部人材ネットワークを構築することで、さらなる地域資源の活用及び地域資源を生かしたカリキュラム改善に取り組んでいきたい。

他地域からの入学生が年々増加傾向にある本校にとって、1年生の段階でこのような地域理解活動を行うことは、その後の3年間の地域との協働活動における基礎となる。本年度は、昨年度から引き続き黒川氏や高嶋氏のような地域人材と協働した活動を行うことで、より専門的な見地からの地域理解活動を行うことができている。また、これらのカリキュラムがきっかけとなって地域団体や地域活動に参加する生徒が増加しており、「未咲輝学Ⅰ」が生徒と地域をつなぐハブとしての役割も果たしていることが分かった。その要因として、「未咲輝学Ⅰ」という学校設定科目を新たに設置し、体系的に学習活動を行ったことが大きいと考えられる。今年度の実施内容を基に、生徒が、より主体的に地域理解を進めることができるよう、親和性の高いカリキュラム開発に取り組むたい。

2 集落等コミュニティ課題解決・実践プログラム

伊方町は、日本一細長い佐田岬半島に位置しており、東西40キロメートルほどの中に、およそ40の集落が点在している。そのため、現在でも集落ごとに独自の文化が残っている反面、多くの集落で若者の流出による過疎化が進んでおり、伝統行事や文化の継承が難しくなっているという課題も抱えている。それらの集落の活性化なくして、町全体の活性化にはつながらないと考

え、「集落等コミュニティ課題解決・実践プログラム」に取り組むことにした。しかし、それぞれの集落の持つ魅力や抱える課題はそれぞれである。そのため、各集落に合わせたプログラムの作成が必要であると考え、一昨年度はその第1回目として2月15日、16日に、旧瀬戸町大久地区で、地区を一つの舞台と見立て、「アート班」を中心に地区内をアート作品で彩り、第1幕から第4幕までの四つのプログラムで編成した各研究班の合同イベントとなる「せんたん劇場」を開催した。2日間、4幕のプログラムで地域の人を中心に、延べ350名程度の参加があった。生徒たちからは、振り返りの中で、「想像よりも多くの人に参加してくれてうれしかった」、「地域の人と一緒に活動できて楽しかった」、「準備に時間がかかってしまったので、次は計画の段階からもっと練りこみたい」、「他の地区でもこのようなイベントを行いたい」という意見が見られた。本事業の目的として「ブーメラン人材の育成」を、目標としてこれからの時代をたくましく生き抜く力と郷土愛の醸成ということを設定している。地域の集落の中に入り、地域の人たちと共に活動することは、生徒にとって負担となる部分もあるが、それ以上に得られるものが多く、本事業における目的・目標を達成するためには不可欠であると感じた。また、地域との協働という観点からも課題研究の成果を広く地域に発信し、評価してもらう良い機会になると考え、本年度は、伊方地区での開催に向けてプログラムを計画していたが、新型コロナウイルス感染症の拡大により、中止となった。来年度は、感染症の状況を踏まえながらオンラインの活用も含めて、実施に向けた計画を立てていきたい。

昨年度は、三崎地区に伝わる伝統文化である「裂織り」の継承と商品開発、「裂織り」を活用したビジネスプランの研究による集落等コミュニティの課題解決（文化の継承と産業振興による地域活性化）に取り組んだ。裂織りは佐田岬半島の伝統的な織物であり、各家庭で作られていたが、現在では保存会の人たちが制作しているだけになってしまっている。その保存会のメンバーも高齢の人ばかりであり、存続が危ぶまれる状況になってしまっている。そこで、本校でも6年前から不定期ではあるが、「総合的な学習の時間」や家庭科の授業において、裂織りの体験活動に取り組んできた。担当生徒を中心に探究活動を続け、一昨年度はモデルのローラと協働して「裂織りのシュシュ」を開発し、「せんたん劇場」などで販売した。それらの研究を基に、本生徒が中心となって本年度ビジネスプランを作成して「EGFキャンパスアワード2020-2021」に応募し、第2位となる優秀賞を獲得した。また、「第1回八幡浜ソーシャルビジネスチャレンジコンペ」に応募し、入賞した。

本年度は、新たに裂織りのトートバック作りとペンケース作りに取り組んでいる。その際、裂き織り保存会の方に織り方などのアドバイスをしてもらうことで、裂織りの品質を高められるように努めている。また、本年度は新たな取組として地域イベント等において裂織りストラップ作りのワークショップを行うなど、新たな活動に取り組んでおり11月には大分県で開催された「おおいとうつくし感謝祭」に、3月には八幡浜市で開催された「八のカン詰」に参加し、多くの人に参加してもらうことができた。



本年度は、地域住民からの要望を受け、地域の伝統芸能の継承活動を行った。三崎地域では秋祭りの際に地区の子どもたちが「唐獅子」や「五つ鹿」といった演目を担当して実施している。

しかし、近年では少子高齢化の進行により子どもの数が激減しており、伝統芸能の継承が困難になっている。また、昨年度と今年度は新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受け、秋祭り自体が中止となってしまった。三崎地区の住民にとって、秋祭りは地域のアイデンティティとも言える重要な地域行事である。そこで、地域の伝統芸能の担い手として、本校生がそれらの演目を継承することになった。基本的な型の指導を三崎地区出身の3年生が行った。その後、地域の青年団の人に仕上げの指導をしてもらうことで完成度を高めた。本年度は、その疲労の場として本校文化祭で「唐獅子」「五つ鹿」「浦安の舞」の3演目を実演した。秋祭りが中止になり、寂しい思いをしていた地域の人にこちらの想像以上に喜んでもらい、感動や激励の言葉を多くいただいた。伝統芸能の継承活動に参加した生徒たちからは、県外を含めた町外出身者も多かったが、「お祭りの活動に参加してこれまで以上に地域の人とつながることができた」「私たちが踊っているのを見て、地域の人が喜んでくれたり、終わった後に声をかけたりしてくれたことがすごくうれしかった」という感想が聞かれた。来年度以降は、実際に秋祭りに参加する方向で話を進めている。高校生にとっては、実践的に地域理解を進めるとともに自分の出身地域の文化等についても関心が高めるよい機会となっている。また、地域にとっても文化を継承していくことができるといったメリットがあり、相互に好循環が生まれつつある。地域の伝統芸能の伝承活動を行うことは、ブーメラン人材の育成においても大きな意味を持っていると考えている。



3 各教科・科目における取組

基本的には、全学年同時間に学年縦割りで開講されている「総合的な探究の時間」（1単位）を中心に、地域との協働による探究的な学習を実施している。また、昨年度より学校設定科目「未咲輝学」を各学年に設置した（1単位）。「未咲輝学」では、地域との協働活動の中にSDGsの内容を盛り込んだカリキュラムを軸として編成し、グローバルな視点を生徒たちに身に付けさせられるよう取り組んでいる。

新たな学校設定科目として「未咲輝学」を設置した背景として、一昨年度、探究活動が活発になるにつれ、「総合的な探究の時間」の1時間では時間が不足してしまうことになり、放課後や休日に活動を行わざるを得なくなってしまう、生徒・教員ともに負担が増加してしまっているという課題が顕著に見られるようになったことが挙げられる。今年度は、これらの時間を軸としな

がら、それぞれの教科の授業の中で地域との協働による探究的な学習活動を行うことにより、そのような負担を減少させるとともに、より大きな教育的効果を得ることを目指し、教科ごとに、それぞれの教科の授業の中にどのように地域との協働による探究的な学習活動を行っていくのか、ということの研究した。

外国語科（英語）の「英語表現Ⅰ」の授業において、「都市部に住む高校生は、地域留学を体験すべきだ」というテーマで英語によるディベートを行った。本校には県内はもちろん、県外からも多くの生徒が入学している。生徒一人一人がそれぞれの立場から自分の体験に基づいて意見を述べており、地域との関わり方について考えを深めることや、お互いの立場を尊重しながら協働して活動していくことの価値を実感することができていた。

国語科の「国語総合」の授業において、『奥の細道』を学習後、愛媛県南予地域を代表する俳人である、芝不器男についての学習を行うとともに、実際に俳句を作り鑑賞するという授業を3時間かけて行った。愛媛県出身の生徒の多くは、小学校や中学校の時に俳句の授業を受けているが、県外出身の生徒にはほとんど俳句の授業を受けていない生徒もいた。また、表現活動に苦手意識を持っている生徒もいるため、俳句の創作に苦勞する場面も見られたが、全員が一句創作し、ミニ句会を楽しむことができた。誰がどの俳句を作ったのかが発表されるたびに歓声が上がり、上位に選ばれた生徒もうれしそうであった。芝不器男について学習したことをきっかけに、作成した俳句は実際に「第68回不器男忌俳句大会」に投句した。その結果、入選として6名の生徒が表彰された。今後も俳句を通じた地域の伝統文化、伝統文学の理解に努めるとともに、地域の俳人と連携した活動を取り入れるなど新たな取組も行っていきたい。



外国語科（英語）や国語科の授業における研究を通して、教科の内容を学ぶことにとどまらず、外部へと開かれた授業にしていくことは高校側、地域側の双方に利益があるということが分かった。また、各教科で学んだことから興味を広げ、自主的に探究活動に取り組む様子も見られた。生徒の学びの自走性を高めるという点においても、各教科における地域資源を活用した学習活動が効果的であると感じられた。これまでの取組において、高校生がハブになり、地域に住む人たちをつなげていくという新しい地域づくり、場の提供が行えるのではないかという仮説を立てたが、本年度様々な場面で地域の人と接するたびに、本校を中心とした地域の一体感というものが高まっていると感じた。本年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、調整等で苦勞することもあったが、来年度以降も、高校を核とした新たな地域連携の在り方も念頭に置いた授業作成を行うとともに、各教科における地域との協働による授業の研究を行っていきたい。

来年度は、新型コロナウイルス等の影響により本年度実施できなかった内容も含め、理科の授業で電力関係の人を招いてエネルギーに関する授業を行ったり、国語科や地歴・公民科の授業において、地元郷土館の学芸員の方を招いて地元の歴史に関する授業を行ったり、商業科の授業において地元起業家の人に実際の商業活動についての授業を行ってもらったりすることなどを検討しており、各教科・科目における地域との協働による探究的な学びをさらに推進していく予定

である。また、新教育課程の実施に合わせてカリキュラムを見直し、地域協働活動を推進することのできる学校設定科目を設置するなど、特色ある教育課程の編成に取り組むとともに、地域連携活動を軸とした教科等横断的な授業の実施などに取り組み、生徒一人一人にとって魅力あるカリキュラムを編成していきたい。

4 視察研修

(1) 視察地

北海道大空高等学校

(2) 視察の目的

総合学科であることを生かした、個に応じたカリキュラムの推進やICT教育の推進など、新しい学校づくりを行っている大空高校の見学を通して、将来、地域で活躍する資質や能力、協働意識を育成するとともに、新たな視点から自分たちの取組や地域を見直し、視野を広げる機会とする。

(3) 視察の日程

12月17日(金)

10:00～12:00 大空高校視察及び大空町教育委員会職員との意見交換

13:00～15:00 大空高校学校概要説明

15:00～16:00 生徒との座談会

12月18日(土)

10:00～12:00 大空高校学校長と意見交換及び現地視察

(4) 視察の内容

ア 大空高校視察及び大空町教育委員会職員との意見交換

北海道北東部にある大空町は、旧女満別(めまんべつ)町と旧東藻琴(ひがしもこと)村が合併して生まれた、自然豊かな町である。大空町の人口は約7200人。この町で、令和3年度、大空高校が開校した経緯を大空町教育委員会参事村山修氏、主査阿部亜美氏から聞いた。「この町には、道立で普通科の女満別高校と、町立で農業を中心に学ぶ東藻琴高校がありました。ただ、両校への入学者数は年々減少して。うち1校は統廃合の対象になったんです。中には『電車やバスを使って通える学校もあるし、1校残せば良いだろう』という方もいました。」しかし、町としては、そう簡単に割り切れない気持ちがあったという。もともと大空町に高校はなかった。なぜならば、農業が主な産業の一つであるこの町では、昔は子どもたちも家の農作業を手伝うのが当たり前で、進学できない子が多かったからだ。果たしてそれでいいのか、なんとか子どもたちに教育の場を届けたい、未来につなぎたいという思いから、両校舎を活用しつつ発展的に統合し、町立高校としてスタートさせる方向で住民に理解を求めていった。「新しい高校は、地域の人や学校の先生、行政もいろんな人が関わってゼロからつくっていく場所。それぞれ立場は違っても、教育を通じて何をしたいかをお互い真剣に考えれば、同じ目線で語ることはできるんだなと実感しつつあります。」これは、阿部さんの言葉である。どんな高校をつくっていったらよいか、そこでどのような生徒を育てていきたいかを、住民代表や高校の先生たちを中心に、議論を進めた。高校魅力化プロジェクト検討委員会が立ち上がり、離島や中山間地域において、その土地にある資源や課題に向き合う学びを通じて、魅力ある学校づくりを目指した。具体的には、地域特性に合わせた「カリキュラム改革」、学力向上に加えて将来の進路も考えていく「公営塾」の運営、そして地域外からの生徒を受け入れる「教育寮」の設置の3本柱でプロジェクトを動かしていくことであった。大空町でも、ゼロベースから高校魅力化を図っていく方向で、住民からの合意が得られた。東藻琴高校で専門にしてきた

農業を踏襲すべきではないかという意見も出されたが、農業だけに特化することで入口も出口も狭くなってしまわないか、という問いが投げかけられた。農業を通じて人をつくるという考えは取り入れつつ、「総合学科」として発展させていくのがよいのではないかと、結論を導き出した。

イ 大空高校学校概要説明

大空高校は、民間出身の大辻雄介氏を初代校長に迎え、様々な取組を実施していた。大辻校長先生は、大手進学塾や予備校で数学を指導したのち、ベネッセコーポレーションに就職。ICTを活用した教育ビジネスの新規事業開発を担当し、遠隔授業サービスにおいて同時接続1万5千人の授業を実践した。その後、島根県隠岐島前高校、高知県嶺北高校で学校魅力化プロジェクトに携わり、総務省地域情報化アドバイザーにも就任した。スタディサプリ数学講師の経歴を持つなど、非常に多彩なキャリアの持ち主である。大空高校では、風に乗るグライダー人間ではなく、自らの力で飛ぶ「飛行機人」を育むことを目標に掲げ、タブレット端末も1人1台貸与しており、映像講義・AIドリルを活用し学びの個別最適化を図っていた。特徴的な取組として、1年生「産業社会と人間」、2年生「探究（地域問題解決）」を通して興味関心を掘り下げ、進路・進学の方角性を自ら考えさせることが挙げられる。3年生になると、ファシリテーターとして後輩たちを指導する立場にまで成長することを目指していた。総合学科として、3年時には時間割の約8割を自分で作成し、主体的に学ぶ力を育むため、定期テストは実施していない。定期テストは実施しないが、単元テストを定期的に実施し、生徒の学習の定着を図っていた。生徒の座談会の中でも「単元テストがあることで、定期考査に比べ範囲も狭いので勉強しようという気持ちにもなるし、勉強時間も成績も上がりました。」という言葉が印象的であった。教員から一方的に与えられる受け身の姿勢ではなく、ICTを活用した授業を積極的に展開しており、授業ではあらゆる場面で生徒同士が教え合う場面が見られた。

令和5年度には町営の寄宿舎が完成する見通しで、今後ますます学校の魅力化を推進していくという。

ウ 生徒との座談会

大空町内、町外、道外の1年生6名と座談会の機会を与えていただき、ざっくばらんに話をさせていただいた。大空高校での生活に非常に満足しており、前向きに学校生活を送っていた。「どうして大空高校を選んだのか」という質問に対して、「大辻さんの存在」という回答が多いのが印象的であった。

エ 大空高校学校長と意見交換及び現地視察

大辻雄介校長先生に大空町を案内していただきながら、意見交換を行った。本校と同じく「地域みらい留学」制度を利用し、県外生が入学していた。寄宿舎生活での課題についての話し合いが中心であった。長期休業中の閉寮日の設け方や、体調不良者への対応、問題行動への対処方法などを話し合った。おおむね、本校の取組と大きな違いはなかった。大空高校でも試行錯誤の最中であり、全国募集を以前から実施している学校や寄宿舎が設立されている学校から情報や制度を取り入れながら、生徒たちにとってより良い寄宿舎運営を目指していきたいと意見が一致した。

オ 参加教職員所感

令和4年度から開始される新学習指導要領に伴い、非常に充実した視察となった。本校も

令和元年度から本格的に全国募集を開始し、「地域みらい留学」にも参画させていただき、県内外から多くの生徒が志願してくれるようになった。生徒募集は軌道に乗り始めたが、今後、本校がより魅力的な学校に成長していくために必要な内容が凝縮されていたように思う。観点別評価の在り方、ICT機器を積極的に活用した授業等、今回の視察を今後の学校運営に生かしていきたい。大空高校では、地域とのつながりの強さを感じた。町全体が育てたい子ども像を共有し、「学校と地域」という別個のものではなく、「地域の中の学校」であり、そこには、学校と地域の境界線がないように思えた。地域も積極的に教育活動に携わり、学校の運営をサポートしているため、教員がより教育活動に集中できる体制が整っている。大空高校は、これからの三崎高校を考えていく上でとても良いモデルとなった。

5 成果発表会（未咲輝 - SENTAN - 発表会）

(1) 期日

令和4年2月8日（火）・9日（水）

(2) 実施内容

DAY1 「SEN」

14：45～14：55 開会行事

15：05～16：10 各種発表

16：15～16：25 諸連絡

DAY2 「TAN」

13：45～13：55 諸連絡

14：05～15：25 「総合的な探究の時間」成果発表

15：35～15：45 閉会行事

(3) 概要

六つの研究班が、1年間取り組んできた探究活動について、研究内容及び得られた成果等について発表する。司会・進行は「せんたん部」の生徒が担当する。

(4) その他

新型コロナウイルス感染症の影響を受け、対面での発表会ではなく本校フェイスブックページでのオンライン配信を行った。また、ウェブ上での感想記入用フォームを作成した。

(5) 詳細

① 防災班

「防災班」は、主に「防災意識啓発ゲーム」の開発と「地域連携避難訓練」の実施目標として活動を行った。防災意識啓発ゲームは、昨年度より開発を進めているRPGに加え、新たにカードゲームの開発にも取り組んだ。また、2回目となる地域連携避難訓練では、初となる避難所設営訓練も行った。今後はゲームの完成とゲームを用いた防災意識啓発ワークショップの開催を目指して活動を行っていく。また、今年度初めて実施した地域連携避難訓練も引き続き実施していく予定である。

② アート班

「アート班」は、三崎地区の防潮堤へのアート作品の制作を主な活動として取り組んだ。本年度は3枚目となる防潮堤アートが完成し、町の新たな観光資源として注目を集めるよ

うになっている。また、本年度は地域の公園を再生する活動や地域のジオラマづくりなど、地域と密着した新たな活動にも取り組んだ。今後も、アートの力で地域を明るく元気にできるような活動を行っていききたい。

③ 商品開発班

「商品開発班」は、班の中でさらに六つのグループに分かれて各グループで積極的な活動を行った。その中で、しらすを練りこんだうどんの開発アイデアをビジネスコンテストに応募して入賞したり、裂織りのワークショップを県内外のイベントで開催したりするなど、積極的に郊外へと研究成果を発信してきた。今後は、これらの商品の完成度を高め、実際に販売することができるよう、研究を進めていく予定である。また、今後も継続して開発した商品を使って外部のイベントやコンテストなどにも積極的に参加していききたい。

④ ツアー班

「ツアー班」は、ガイドブックとサイクリング動画の制作を中心に活動に取り組んだ。本年度は、三崎地区の商店を紹介するガイドブックを作成した。完成したガイドブックは、本校の中学生一日体験入学に参加した中学生に配布するとともに、実際にガイドブックを活用したツアーを行った。また、観光拠点施設「はなはな」から伊方町の主な観光名所であり佐田岬灯台までのサイクリング動画の制作などを行い、地域の魅力を発信してきた。また、伊方町の名所を案内する音声ガイドの作成にも取り組んでいる。来年度はこれらの活動をひとまとめにした三崎高校オリジナルツアーを企画する予定である。

⑤ カフェ班

「カフェ班」は、地元レストランの「まりーな亭」と連携して、高校生カフェ「みさこう Café」をオープンした。新型コロナウイルス感染症の影響を受け、活動が制限される中、テイクアウト商品の開発や出張「みさこう Café」など、新たな取組を行った。また、海水から精製する塩の品質を高められるように研究を進めている。来年度は、新型コロナウイルス感染症の予防を徹底しながら、一人一人の技術を向上させ、よりよいカフェを目指したい。

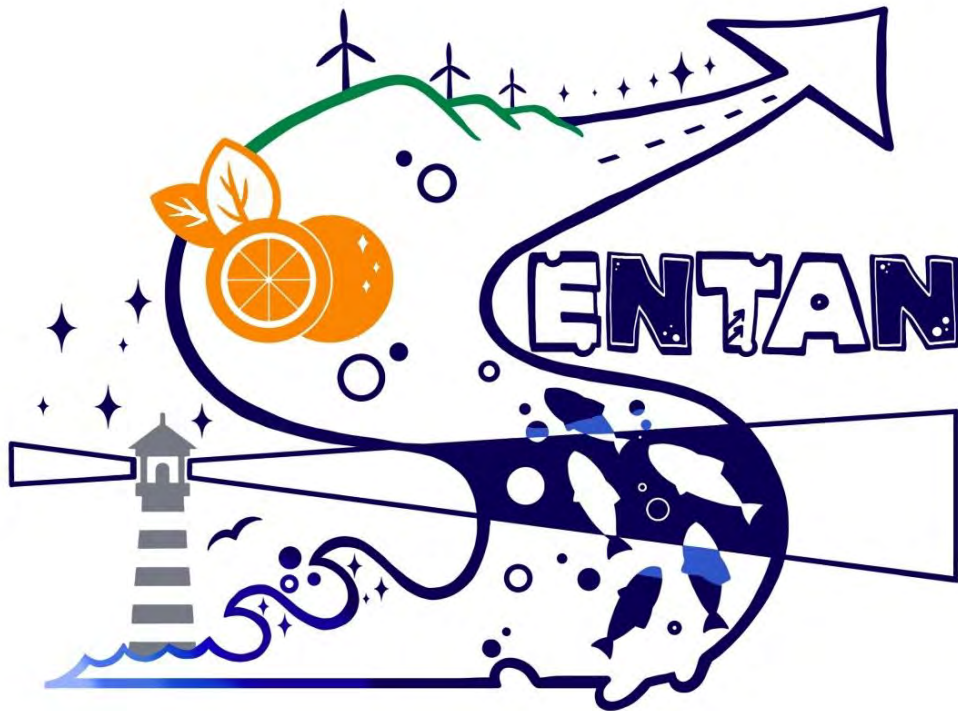
⑥ PR班

「PR班」は、新型コロナウイルスの感染拡大により、地域イベント等が相次いで中止となる状況が続いているため、新たに「PR班」として活動を行った。これまでに行ってきた「みさこうたいそう 115」の普及及び愛媛大学との合同ダンスプロジェクトに加え、学校紹介動画の制作及び発信を通して三崎高校のPR活動を行ってきた。来年度は多くのイベントで「みさこうたいそう 115」を普及活動や愛媛大学ダンス部とのコラボダンスの取組も継続して行っていききたい。また、効果的な動画制作や発信の方法を学び、高校生目線の情報の発信にも力を入れていききたい。

(参考資料「未咲輝-SENTAN=発表会配布資料」)

未咲輝-SENTAN-発表会

～online～



知らないことだらけ、知りたいことだらけ、の私たち。
「うみ」と「そら」と「かぜ」と。この場所でしか出会えない人に出会い、
この場所でしか見ることのできない景色を見てきた私たち。
時代の最先端で、環境に言い訳せず、私たちができることをやっていきます。

日 時： 令和 4 年 2 月 8 日(火)、 9 日(水)
会 場： 愛媛県立三崎高等学校
オンライン： 三崎高校 Facebook ページ (QR コード)
主 催： 愛媛県立三崎高等学校



三崎高校「せんたんプロジェクト」

ビジョン：

伊方町唯一の高校である三崎高校は、過疎化、少子高齢化が進む地域において、地域活力の一端を担う存在として、ますます地域的役割を求められるようになっていく。また、そうした状況を踏まえ、「総合的な探究の時間」等を通じて「地域」との連携を深めている。一方で、学校教育が目指す、学校と地域の連携・協働の在り方と、地域側の持つ「個別の課題解決に必要なマンパワーの間の擦り合わせ」には、より高度化された「地域協働の一体的仕組み」が不可欠だと考えられる。

そうした状況へのアプローチとして、高校生による「地域における新たな主体形成（地域活動のプロジェクト化）」が、課題改善の一つの方向性ではないかと考え、高校生自らが地域に入り、地域と協働して町づくりを行う「せんたんプロジェクト」を行ってきた。

今回は一年間の活動の成果をお互いに共有することで、今後、より良い活動を行っていくための、きっかけにすることをねらいとしている。



DAY1 【各種成果発表】



海と日本プロジェクト「海の応援隊」

佐田岬半島の海の美しさを全国に伝えるプロジェクト

11R 山田 光毅 12R 牧田 康太郎

CRI-HOUSE プロジェクト～高校生が創るワーキングスペース～

「空き家×イノベーション」で新しいワーキングスタイルの形成

11R 市川 桃佳 島本 彩音



ちりめん

しらすを練りこんだ自家製麺を全国展開させるプロジェクト

21R 友澤 奈々美 22R 宮地 風花



WWL (World Wide Learning)

将来、世界で活躍できるイノベティブなグローバル人材を育成するため、これまでのスーパーグローバルハイスクール事業の取組の実績等、グローバル人材育成に向けた教育資源を活用し、高等学校等の先進的なカリキュラムの研究開発・実践と持続可能な取組とするための体制整備をしながら、高等学校等と国内外の大学、企業、国際機関等が協働し、テーマを通じた高校生国際会議の開催等、高校生へ高度な学びを提供する仕組み（ALネットワーク）の形成を目指す取組である。

本校は、京都の立命館宇治高校の連携校として、2019年度より様々な活動を行っている。

<WWL事業>

2020年

第3回高校生SRサミット「FOCUS」
フィリピンオンラインスタディツアー

22R 平野 汐華 中村 理歩
22R 内山 桜 梶原 凜 中村 理歩

2021年

第4回高校生SRサミット「FOCUS」
Online Global Program「FLAG」一期生
2021 模擬国連「MUN」
Global Youth Fair～SURVIVE!～
フィリピンオンラインスタディツアー

11R 野本 華帆 22R 平野 汐華
22R 農守 未佳
22R 梶原 凜 農守 未佳 宮地 風花 中村 理歩
11R 竹本 市忠 山田 光毅
11R 市川 桃佳 パライソ・アユミ・ニコル
12R 崎野 穂花

DAY2【三崎高校「せんたんプロジェクト」】

部門	班	コンセプト	活動内容（例）
イベント	カフェ	みさこうカフェを運営する。	みさこうカフェのトータルプロデュース、サービスの提供及び運営
	防災	防災意識を高めるための啓発活動を行う。	防災訓練の実施、防災意識啓発ゲームの作成
商品	商品開発	地域の特産品を生かした新商品を開発し、販売する。	地域の柑橘類や海産物を利用した新商品の開発、看板等の制作
	ツアー	ツアープランの作成やガイドマップの製作を通して、伊方町の魅力を発信する。	伊方町・佐田岬半島の魅力を伝えるための学校オリジナル観光ガイドマップの製作、旅行プランの作成
情報発信	アート	地域資源を生かしたアート作品を作成する。	防潮堤の壁画作成、未咲輝ロードの修復及び美化活動、映像作品の制作
	PR	メディアを活用し、地域や高校のPR活動を行う。	三崎高校広報用フェイスブックの運用、地域PR動画の作成、みさこう体操115の普及
せんたん部	せんたん部	三崎おこし活動のトータルプロデュースを行い、各部門と連携して活動する。	せんたんミーティングの実施、みさこうマルシェの運営、各地域活性化フォーラムへの参加

令和3年度主な受賞歴

ダルメイン世界マーマレードアワード&フェスティバル日本大会
アマチュアの部 - 高校生のマーマレード -

金賞、ベストカテゴリー賞
銅賞

31R 古澤 美咲 増田 美咲
31R 近藤 亜紀 野島 雅
22R 内山 桜

愛媛高等学校家庭クラブ研究発表大会
優秀賞

三崎高校家庭クラブ

EGF キャンパスアワード 2021-2022

優秀賞（2位）
三浦工業賞（3位）

11R 市川 桃佳 島本 彩音
21R 友澤 奈々美
22R 宮地 風花

八幡浜ソーシャルビジネスチャレンジコンペ高校生部門
最優秀賞

11R 野本 華帆

第8回ディスカバー^{むら}農村漁村の宝

特別賞「先端発信賞」（全国 651 団体の中から 34 団体）

三崎高校せんたんプロジェクト



IV 評価・分析

1 ループリック

年度当初の5月と年度末の2月に、全校生徒を対象にループリックによる自己評価を行った。年度当初は、ほとんどの生徒がすべての項目において、C評価が30%程度、B評価が50～60%程度という評価であった。しかし、一年間の活動を通して大幅な成長が見られるようになった。各項目においてC評価が大幅に減少し、A評価以上の評価がおおむね40%を超えている。また、判断力・コミュニケーション力においては熟達レベルであるS評価をつけている生徒もおり、生徒の変容を感じることができた。5月の時点では、1年生はC評価を多くつける生徒が多く見られる一方、本年度までに探究活動を行っている2、3年生では、5月の時点でA評価を付ける生徒も見られるなど、積み重ねによる成長が見られた。外部人材との協働や探究活動を通して、生徒の力が伸長したことはもちろん、成功体験の積み重ねが、生徒の自己肯定感を高めたことも影響しているのではないかと考えられる。来年度も、生徒の力を育成することはもちろん、生徒一人一人が、やりがいや自己有用感を感じることでできる探究活動を行ってきたい。

令和3年度 みさこう・せんたんプロジェクト ループリック () 氏名 () 番 ()

学習成果	レベルC 初心者・初級者レベル <知識・理解>	レベルB 自立・学習者レベル <応用・分析>	レベルA 熟達・達人レベル <統合・普及>	評価理由	
				4月	2月
地域活性化プロジェクトプランの計画	計画力	サポートを受けながら、プロジェクト全体の概要を理解している。	自分のプロジェクトに必要な情報を収集し、自ら計画を立てることができる。	自らが、成功する計画を立てるために、他者のプロジェクトについても的確なアドバイスをすることができる。	2月 計画と活動の状況に応じて修正しながら、楽しく取り組みをつけた活動ができた。班の保管人のサポートがあまりできなかった。来年はそこも頑張っていきたい。(A)
	判断力	サポートを受けながら、自分の地域の特徴を理解している。	自分のプロジェクトについて、現状や実現性を客観的に分析し、修正することができる。	プロジェクト達成のために総合的な情報に基づき、全体的な立場で考察・判断することができる。	2月 リーダーとして地域連携課題訓練などの活動に取り組み中で、全体的な立場に立って考察、判断してプロジェクトを成功させることができたから。(S)
	4月	32%	52%	12%	
	2月	4%	60%	36%	
地域活性化プロジェクトプランの実践	実践力	サポートを受けながら、プロジェクトの目的と自分の役割を理解して、知識や経験を活用して自発的に行動している。	プロジェクトの目的と自分の役割を理解し、知識や経験を活用して自発的に行動している。	プロジェクト全体を総合的に把握して、これまでの経験を生かしながら、リーダーとして活動することができる。	2月 新しく取り組み始めた防災カードゲームのルールを考えたり、実際にカードを作ったりするのは大変だったけれど、その時々の時に必要なことをすることができた。(A)
	調整力	プロジェクトチームのメンバーには、様々な立場や意見があることを知っている。	多様な意見や立場の違いを理解し、周囲の人々や物事との関係を調整することができる。	幅広い年代の人や、自分とは異なる意見の人など、どの線なとでも協働して活動することができる。	2月 うどん作りの手順や工程についてグループのメンバーで何度も話し合いを行うことで、手際よく作業を進めることができるようになりました。(A)
	4月	32%	52%	16%	
	2月	12%	40%	48%	
プレゼンテーション	コミュニケーション力	自分が伝えたい内容を理解し、相手に伝えることができる。	自分が伝えたい内容を理解し、相手に伝えることができる。	単に情報を発信するだけでなく、他者を動かすことができるような情報発信をすることができる。	2月 様々な発信方法を模索し、効果的な発信方法を見つけて、班での活動や地域連携イベントでの説明などをうまく行うことができたから。(S)
	4月	32%	60%	8%	
	2月	12%	44%	36%	

2 未咲輝-SENTAN-発表会（オンライン）での感想

(1) 海の応援隊

- ・地域の人との関わりがとても深いプロジェクトだなと思いました。
- ・好きなことをプロジェクトにする案が良いと思った。
- ・二人の活動によって、三崎の海の魅力を再確認することができました。僕もプロジェクトに参加したいと思いました。
- ・好きなことをやらせてくれ、サポートしてくれる学校はなかなかない
- ・魚が綺麗にさばっていてすごかったです。また、地域の方との交流も広がっていて楽しそうだと感じました。
- ・学校では教わらない事を地域の方から自然に学ぶ、素晴らしい町ですね。
- ・地元民では当たり前だと思うこの伊方の海も、県外から見たらとても魅力ある豊かな海だということ二人は発見してくれています。大好きな釣りを通して発信しており、今後も楽しみにしています。ありがとう。
- ・こんな楽しい学生生活を送りたかったです。
- ・好きなことを突き詰めて人との出会い、釣果の拡大、料理の上達、地域の人との交流につながり、素晴らしいと思います。他の生徒も取り組みやすい好事例かと。
- ・地元生ですが知らない魚がいることに驚きました。素材を無駄にしないということを大切にすることはとても良い行いだと思います。二人の話し方が上手くて聞く方も楽しかったです。

(2) EGFキャンパスアワード (CRI-HOUSE)

- ・とても面白く、興味があります。利用者として使ってみたいし、卒業後OG・OBとしても関わりたいと思えるほど魅力的なプロジェクトだと思いました。
- ・高校生でここまで地域について考える事が出来るのはとてもすごいことだと思った。
- ・活動計画や収支内容、高校生が運営できない時のことも考えられていてすごいなと思いました。
- ・しっかりビジョン、計画が練られ秀逸でした。実現性の部分で実現したい想いの強さと誰に協力してもらうか、それだけだと思います。
- ・小さな町で自分たちができることを一生懸命探していて頼もしくなった。

(3) EGFキャンパスアワード (ちりめん)

- ・データを多く使っていて分かりやすかったです。
- ・人口減少に食料を絡めていて、とても工夫されていていいと思いました。
- ・企画の方向性が明確であり、課題解決に対しても期待ができる。食品という場での勝負は大変ではあるが、参入しやすい分ハードルは低く、実現性は高いのでは。
- ・しらす×うどんの組み合わせは想像出来なかったので面白いと思いました。減塩を作るという考えはすごい良いと思いました。
- ・ちりめん→うどんという発想が面白く、人の健康や地域の魅力化へのアイデアがよく考えられていて良いと思いました。ぜひ商品化して食べさせていただきたいです。

(4) WWL

- ・自分自身が今のままではダメだと思った。
- ・様々な活動を通してたくさんの経験や成長があったと思います。それを自分の活動や生活に生かす事が出来たのであれば、紛れもない努力の賜物だと思います。
- ・日本国内での交流だけにとどまらず、国際的な交流によって参加した学生が成長できる素晴らしい活動だなと感じました。
- ・国内のみならず国際的にも活動していることに驚いた。色々な意見交換で得た知識を得て三崎高校からの情報発信を続けてほしいと思った。とても良い発表だった。
- ・目的のために一生懸命活動する先輩の姿に憧れました。
- ・世界や全国に目を通すことで、今までなかった概念や考え方、理念などを知れるのでとて

も良い集まりだと思いました。三崎高校はそのような取組を活発的に行っているのだから、これからもどんどんそのようなアクティブな活動をしていくべきだと思います。とても良い発表だと思いました。どんなことでも前向きなのでよかったです。

- ・自分のやりたいことを地域や、世界に広げ、そのアイデアが大きく影響したり、関わるきっかけを作れたりすると教えてくれたように感じます。
- ・知らない人と意見を言い合い、自分を高めることができるWWLはいいなと思いました
- ・年々の活動内容を知れて、こういうことを三崎高校はやって来たのだと実感しました。国際的な活動にも力を入れていることに他の学校とは違う魅力を感じました。
- ・同じ高校生とは思えないくらいの活動内容で、自分がとても小さく見えます。そのくらい一人一人が素晴らしい活動とそれに見合った成果で、とてもよい活動報告でした。

(5) アート班

- ・防潮堤の絵を描いているのは知っていましたが、ジオラマや公園の改装をしているとは知りませんでした。今回知ることができて良かったです。
- ・公園を復活させるアイデアがとても素敵です。またジオラマのクオリティも高く反省点も含めて発表してくれるのは良いなと思いました。そしてゆるキャラの顔がとても可愛くて良いですね。防波堤のイラストが、迫力があって素晴らしいなと思いました。
- ・アートでも地域を活性化できることを知れました。
- ・防波堤アートのクオリティがすごくて、毎回ワクワクしています。
- ・アートの力は大きく、人々を元気付けることができ、もっと三崎を盛り上げられるように活動をしていって欲しいです。
- ・公園などの今伊方町であるものを有効活用しようとしているのが、とても感心させられました。その他にもジオラマ作成などをするなどして、復興だけではなく、ものを作成するなどをして立派な班だと思いました。一つ意見を加えたとしたらジオラマ作成も商品開発班と共同で作っていくのも面白みがあっていいかなと思います。
- ・アート班の作品は2回ぐらい見たことあるんですが、それを見た時ときはすごくて感動しました。
- ・アートで三崎の町を彩って殺風景を変えていて、地元住民の私から見ても、変わったなと思いました。
- ・防波堤のところに迫力あるスケッチをしており、見た人がすごい、写真撮ろうってなる作品ができているなと思いました。
- ・色々な大人に交渉したり、課題にもぶつかっていましたが、前向きに捉えて頑張っていたりしていたのが好印象でした。

(6) 情報・防災班

- ・防災班はRPGやカードゲームで誰でも楽しめながら災害について学べるものを作っていてとてもすごいと思いました。
- ・分かりやすい解説で危機感を持つことができた。色々な工夫がされていることが分かった。
- ・前年度の失敗を活かしていたのが良かった。
- ・今までにはないゲーム、カードゲームの企画は良いアイデアだと思いました。
- ・自然災害はいつ起きるのか分からないので学べるのが出来てよいと思いました。面白く楽しく学べるのでいいなと思いました。しっかり身に付けたいです。
- ・RPGゲームとかカードゲームが思ったより本格的ですごいと思いました。
- ・防災の意識付けのために、多くの手段を使って様々な世代にアプローチしているなと感じました。
- ・分かりやすいだけでなく、みんなが進んでやりたいと思える取組(ゲームなど)を思い付くのがすごい。
- ・地域の方の命を守ることに繋がるとも価値のある活動だと思った。
- ・高校だけじゃなくて、小、中学校も含めた合同避難訓練などを行っているのが、良いと思

いました。

(7) P R 班

- ・素敵な動画でした。
- ・YouTube などの SNS を使って学校、この地域をアピールするのはとても今の時代に効果的で良いと思った。
- ・もともと興味があったんですが、ますます興味がわきました。たくさんの人に知ってもらえるようにする、とても魅力的です。
- ・自分も学校紹介のプロジェクトをしているので、参考にしようと思いました。
- ・P R のために動画を撮ったり編集したりするなど、技術を必要とするものを扱うのは大変だと思うけれど、これからも頑張って活動してもらいたいです。
- ・コロナ禍の中、三崎の良さを P R で伝えようとしている姿勢に感動しました。
- ・P R 班に入りたくくなりました。動画もまた見返したくなる発表でした。
- ・歴史、地域文化、地学、植物など自然科学系の P R はどうか。
- ・魅力を発信するために動画を作っていることを知る事ができました。また愛大生とのコラボダンスもすごく良かったので、参加したいです。
- ・今後、各プロジェクトや各班と横のつながりをすることで、何倍もの成果が出ると期待しています、頑張ってください。

(8) カフェ班

- ・カフェのどら焼きはとても美味しそうで、またカフェを開催できて色々な人に三崎のカフェの良さをしってほしいと思いました。
- ・新しいみさこうカフェにまた足を運びたいと思いました。
- ・とてもおいしそうだった。食品を提供出来るのは他にない魅力があってとても良いと思った。
- ・コロナ禍でカフェを開くのが難しい中、テイクアウトなどでの工夫をして少しでも多くの人に食べてもらえるようにしているのがとてもすごいなと思いました。
- ・どら焼きがとても美味しそうだった。まだ、みさこうカフェに行ったことがないので行ってみたいです。
- ・学校とは全然違う環境で接客をしたり、経験出来ないようなことにチャレンジしたりしていてすごいと思いました。
- ・町内放送などをしていて、たくさんの人に分かりやすくカフェのオープンを知らせていてすごいと思いました。
- ・実際どら焼きを食べたことがあるのですが、おいしかったです。これからの活動も楽しみにしています。
- ・高校でカフェを開けるなんてすごいしとても楽しそうだなあと思った。地域の食材を使ってるのも素敵。
- ・カフェ班は先輩たちの努力の結晶なので絶対になくしたくありません。なので僕は僕のできることを絶対に使いたいと思います。今回の発表は他のみんなのおかげで成功しました！

(9) 商品開発班

- ・様々なものをたくさん作っていてその発想力がとてもすごいと思いました。
- ・地元にあるものを使って沢山の商品を開発しているのにびっくりしました。
- ・燻製に挑戦したり、アロマオイルを作ったり、ジャムを作ったり、だいたいゼリーを作ったり、しらすとうどんでちりめんを作ったり、ビジコンに参加したりしていて一人一人がしっかり働いていたのでとても良かったです。
- ・商品開発していく上で地域のために貢献しているのがすごいと思った。
- ・色々な発想があって、興味深い発表でした。
- ・それぞれの班での個性が光っていて素敵です。そして何より楽しそうなのが伝わりました。

- ・食品も織り物もアロマオイルもめっちゃオシャレ！難しい事ばかりやっててすごい。ちりめんさん楽しそう。
- ・食品だけでなく、アロマオイルなどの日常生活で使えるような実用的な物も開発しているのは大いに人の役に立つと思うので、引き続き様々な開発に期待したいと思った。
- ・ちりめんうどん、健康に良さそう。完成したら通販で買いたい。
- ・来年商品開発班に入ろうと思っていたのですがあまり活動内容を知らなかったので今回の発表で知れてよかったです。

(10) ツアー班

- ・三崎のガイドブックを作るために実際にお店などで取材をしていて、とてもすごいなと思いました。ほかにも海外の人にもわかるように英語での音声ガイドなどを行っているのもすごいなと思いました。
- ・サイクリングをしていた人もいて、景色の良さに触れ合えるツアー班は、とても楽しそうだなと思いました。
- ・なかなか調べることの無い歴史や、実際に三崎を体験できるサイクリングなどを通して伝えられるのは良いと思うし、海外の人たちのことも考えた音声ガイド班というものもあり、気遣いもある良い班だなと思いました。
- ・町の良さなどを知ってもらえていいと思いました。SNSも活用していていいなと思いました。
- ・サイクリングだったり三崎のことがすぐ分かるブックがあったりして、初めて来た人にとっても良いなと思いました。三崎の良い所も再確認出来ました。
- ・三崎についてもっと知りたくなりました。時間があればサイクリングしたいです。
- ・伽藍山の音声ガイドが素晴らしい。歴史のガイドブックが欲しいと思いました。
- ・三崎の良さを知れるいい機会でした。ツアー班に入ってみたくくなりました。
- ・サイクリングのイメージが強かったけど、音声ガイドや、歴史的な場所のマップを作るなど色々なことをしてるんだなと思いました。
- ・ツアー班の活動は、自分の中でとても興味のある活動で、伊方町の良い所を肌で感じられるツアープランがとても面白いと思いました。

3 目標と実施状況

本事業の研究開発開始時に八つの目標を設定した。

そのうち、「本構想において実現する成果目標」は三つある。

一つ目の「生徒による3年間の地域協働活動における成果報告書の提出率100%」という目標においては、3年生全員が成果報告書を提出しており、提出率は100%となっている。

二つ目の「高校卒業後地元※への就職率60%」という目標においては、今年度は、卒業生26名のうち就職希望者が6名、地元への就職者数2名で、地元への就職率は33%となり、目標を下回った(※地元…愛媛県南予地域)。就職希望者数が少なかったことや、遠方から入学した生徒や公務員希望の生徒がいたことなどが理由として挙げられる。しかし、愛媛県内への就職者数は6名、県内への就職率は100%で、事業を開始した令和元年度から3年連続で100%となっている。また、生徒の出身地への就職者数の割合は83%であり、遠方から入学してきた生徒たちの多くがその出身地で就職している。本校での地域協働活動を通じて伊方町だけではなく、愛媛県内や自らの出身地域への愛着を強める生徒が増加することは、本校の取組の成果の一つであると考えている。今後は、そのような生徒が自らの出身地に戻り活躍して本校及び伊方町の関係人口として関わりを持ち続けてくれることを期待している。そうすることで、三つ目の「高等学校卒業後10年以内の地元への就職率30%」という目標を達成できるよう、伊方町や地域団体等と協働して今後のシステム構築に力を入れていきたい。

「地域人材を育成する高校としての活動指標における目標」も三つある。

「地域と協働した取組を含む研究授業の年間実施回数5回」という目標においては、英語科における研究授業1回に留まった。新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受け、外部人材との交流活動が行いにくかったという社会的情勢の影響もあったが、各教科においてどの単元において

地域と協働した取組を行っていくのが、授業数等の関係から計画的に取り組むことが難しかったという課題も見られた。この課題を受け、来年度からは年度当初に作成する各教科の年間指導計画において、あらかじめ地域と協働した取組を行う単元を設定し明記することで計画的な実施を推進したいと考えている。また、単独の教科・科目での実施が難しい場合には、教科等横断的な取組を行うなど、学校の現状に合わせた柔軟な取組を行っていきたい。

「地域と協働した取組に関する年間研究発表回数5回」という目標においては、校内の研究発表会に加え、校外での発表会等にも積極的に参加し、10回の研究発表を行い、幅広い年代や立場の方に本校の取組を知ってもらうことができた。また、大分県で開催された楽しみながら環境について考えるイベント「おおいたうつくし感謝祭」等の地域連携活動も3回実施し、現在も活動の幅を広げている。特に、中学生一日体験入学や学校見学に来た中学生が本校の地域協働活動に強い関心を持つことが多く、本校の魅力の創出につながっていると感じている。

「学校フェイスブックの1か月当たりの平均更新回数15回」においては、4月から2月の間で111回、月平均9回更新した。新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、多くの学校行事が無観客での実施となってしまったが、ライブ配信など新たな取組を取り入れることで、これまで以上に多くの人に本校の情報を届けることができています。

「地域人材を育成する地域としての活動指標における目標」は二つある。

「外部人材として参画する民間等の団体数10団体」という目標においては、現在11の団体に参画してもらっている。本事業開始当初の参画団体は8団体であり、3年間の事業を通して多くの団体との連携を進めることができた。今後も多くの団体と協働しながら、生徒の実態に合わせた特色ある教育活動を推進していきたい。

「ブーメラン人材へのUターン支援プログラムの実施回数3回」という目標においては、4回の取組を行った。全校生徒を対象とした地域企業の合同説明会の実施や、2年生、3年生を対象とした株式会社伊予銀行と協働しての起業家育成金融セミナーの実施「EGFキャンパスアワード2021-2022」や「第2回八幡浜ソーシャルビジネスチャレンジコンペ」などへの応募を通して、地域理解を深め、郷土愛を高めることができた。

全校生徒125人に対して延べ180人以上の生徒が、地域と協働しながら発表会やコンテスト、研修会等に参加しており、自ら課題を発見し、その解決に向けて、探究することのできる生徒が増加した。このことから、本事業の継続的な取組が、将来ブーメラン人材となりうる生徒の育成につながっていることが分かる。

4 次年度以降の課題及び改善点

これまでの地域との連携による探究活動が活発化し深度が深まっていくにつれ、生徒・教員ともに負担が増加するということが課題となっている。また、今年度も昨年度に引き続き新型コロナウイルス感染症の影響により、これまで本校が主催してきた活動や地域でのイベント等が中止になり、探究活動の場が制限されるという課題が見られた。

負担が増加するという課題の改善策として、昨年度より全学年で共通して、木曜日の6時間目を「総合的な探究の時間」に、7時間目を「未咲輝学」の時間としてカリキュラムを編成した。こうすることで翌週以降の授業と入れ替え、「総合的な探究の時間」もしくは「未咲輝学」の時間を2時間連続で実施できるようにした。全ての研究班で連携をとる必要はあるが、探究活動が放課後等の時間にまで及ぶ回数を減少させることができた。さらに、今後は年間指導計画作成時に地域協働活動を行う単元を設定するなど、各教科の中で地域協働活動探究カリキュラムの作成を推進することで、生徒の探究活動の自走性を高めるとともに、進路指導とも連携させることで時間を有効に活用できるようになると考えている。

また、昨年度に引き続き本年度も地域行事やイベント等が中止になってしまったため、研究自体も進められなかったが、地域活動の増加単位制度について研究していきたい。地域行事等への参加に応じて、「総合的な探究の時間」もしくは「未咲輝学」において単位増を認めることで、生徒の、より主体的な行事参加を促すとともに、負担感の軽減につながるのではないかと考えている。これらの改善策を実行するためには、地域関係者との協議や校内の調整等が必要になるため、関係者で話し合いを進めて導入に向けて検討していきたい。来年度は、まず生徒が参加する可能性のある地域活動や地域行事をリストアップし、それぞれの活動について、その責任者や活動

時間等を明確にしていきたい。そうすることで、活動への計画的な参加や、増加単位制度のスムーズな導入を行いたい。

「未咲輝学」では、学年ごとにテーマを設定して探究活動に取り組んだ。1年生は「地域理解」をテーマに、ブイアートの作成や地域の名所・史跡見学などの活動を地域人材と連携して行った。2年生は、「地域課題の発見・解決」をテーマに、RESASを用いた研究を進め、その研究結果を「地方創生☆政策アイデアコンテスト」に応募し、1グループが地方一次審査を通過した。3年生は、「ブーメラン人材として」をテーマに、ビジネスプランの作成を行った。株式会社伊予銀行と連携し、講師を招いて金融セミナーを開催することで、起業家精神の醸成を図った。本年度で開設2年目ということもあり、生徒の実情を踏まえた上でどのように効果的な学習内容を設定、指導していくのかということが課題となった。来年度は今年度の実践を基に計画を立てるとともに、外部人材とのより積極的な連携や校内研修の機会を増やすことで、負担の軽減や効果的なシステムの構築を図りたい。

昨年度より始まった授業であることに加え、新型コロナウイルス感染症の感染拡大による影響で当初予定した授業内容の変更を余儀なくされた部分もあった。そのような状況の中で、生徒の実情を踏まえた上でどのように効果的な学習内容を設定、指導していくのかということが課題となった。しかし、本年度は昨年度の経験も踏まえてオンラインでの活動やICTを活用した学習活動を効果的に取り入れ、実践活動とバランスを取り入れた学習活動を行っていくことで、十分に探究的な活動を実践することができた。来年度は開設3年目になり、一つのサイクルを終えることができるため、これまでの実践を振り返り、より効果的な活動となるよう調整していきたい。そのためにも、外部人材とのより積極的な連携や校内研修の機会を増やしていきたい。

各種行事の中止による生徒の学びの場の減少については、昨年度より研究を進めてきたオンラインの積極的な活用により、さらなる改善を図りたい。オンラインは万能ではなく、実体験を通してしか学べないことも多い。しかし、オンラインの特徴である、即時性、広範性というものは、地域の学校にとっては大きな教育資源となる。オンラインでの活動をきっかけに、実体験につなげていくこともできる。実体験の活動とオンラインによる活動の長所と短所をよく理解し、それぞれを補完するような取組を行ったり、状況によって使い分けたりすることで、それぞれの活動から最大限の教育効果を生み出すことができる。ウィズコロナ時代、情報化社会といわれる現代において求められるのは、最大限の効果を生み出すことができるように取捨選択し、必要に応じて使いこなす能力であると考え。教職員、生徒共にオンラインの効果的な活用技術を身に付けることで、本校の探究活動をより効果的なものにできるようにしていきたい。

V 關係資料



地域再生大賞

候補に50団体

三崎高(伊方)も

地方新聞46紙と共同通信社が地域活性化の取り組みを表彰する本年度の地域再生大賞は、第1次選考を通過した全都道府県の50団体が15日までに出そろった。来年1月29日に大賞など各賞を発表し、2月に表彰する。目標年まで10年を切った国連の持続可能な開発目標(SDGs)に注目し、副題は「未来へつなぐ、みんなだ」。

50団体は各紙や共同通信が選んだ。持続可能なまちづくりや次世代の育成、困窮者支援など多彩な活動を展開する。若者やお年寄り、障害のある人など担い手も多様だ。環境問題などSDGsに関連する活動も目立つ。

愛媛からは、伊方町内で防波堤アートを描くなどまちおこしに取り組む三崎高校「せんたん部」が選ばれた。

今後、有識者の選考委員会が新規性や地域住民とのつながり、発展性といった

点から審査。今回は「地域からのSDGs」という視点から貧困の廃絶、ジェンダー平等、環境保全など国連が掲げる17目標との関連も考慮する。大賞(副賞100万円)、準大賞(30万円)、地方ブロック賞(各10万円)などを贈る。

新型コロナウイルスの感染状況を踏まえ、前回同様に東京での表彰式開催を見送り、各地で個別表彰する。大賞は2010年度から毎年度実施。昨年度の第11回までの表彰数は延べ550を数えた。

2021年10月16日付 愛媛新聞

特産品で活性化

三崎高が特別賞

政府「農山漁村の宝」

政府の有識者懇談会は19日、独自の特産品や文化を生かして地域活性化に取り組む優良事例「ディスプレイ農山漁村の宝」の最優秀賞に当たるグランプリに「一般社団法人三重県障がい者就農促進協議会」（三重県津市）を選んだ。同協議会

は就農を通じ障害者などの社会参加を後押しする「農福連携」を推進している。優秀賞や特別賞もあり、

県内からは三崎高校「せんたんプロジェクト」（伊方町）が特別賞に選ばれた。

政府は「農山漁村の宝」を「むらのたから」と呼び、選定した団体や個人の活動をホームページなどで紹介している。8回目の今年は全国から651の応募があった。

2021年11月20日付 愛媛新聞

門本さん(愛媛大)最優秀

地域課題の解決に向け、学生が考案したビジネスプランを競う「EGFキャンパスアワード2021-2

地域課題解決ビジネスプラン
捕獲イノシシの革製品化



学生が考案したビジネスプランの審査で最優秀賞に選ばれた門本さんとイノシシの革で作ったパソコンケース

11月18日午後、松山市大手町1丁目



EGF
 Ehime Global Frontier
 愛媛から、はじめる

022」(県、えひめ産業振興財団主催)の審査会が18日、松山市大手町1丁目の愛媛新聞社であり、鳥獣害対策で捕まえたイノシシの革製品を販売するプランを提案した愛媛大農学部3年で学生団体「Reanima」代表の門本さんが最優秀賞に輝いた。

県内の高校生や大学生の8組19人が地元の水産物や水、古民家などの地域資源を生かした活性化策をプレゼンテーション。4人の審査員が実行力、企画力、課題解決力、プレゼン力の4項目で審査した。

門本さんは県内の鳥獣被害状況を説明。箱わなによる狩猟を経験し「命を奪うのは並大抵のことではないと知った」と振り返った。「県内で捕れたイノシシは肉と異なり、革はほとんどが捨てられる。命の資源に

経済的価値を与えるという理念の実現に向け、一歩一歩進んでいく」と述べた。

優秀賞には空き家をコワーキングスペースとするプランを発表した「三崎高橋せんたんプロジェクトキッズ」が選ばれた。

門本さんはテクノプラザ愛媛(松山市久米窪田町)で来年2月2日に開催予定の「EGFアワード2021-2022」でプランを発表する。

(西尾寛昭)

大賞	河原部社	山梨県韮崎市	〈関東・甲信越〉 産科婦人科産出強任産科病院	群馬県高崎市
準大賞	三崎高「せんたん部」	伊方町	〈近畿〉 ヴィダ・リブレ	和歌山県美浜町
優秀賞	「石徹白洋品店」	岐阜県岐阜市	〈中国・四国〉 多岐の森のめぐみ	広島県三次市
中国・四国ブロック賞	「元気むらさき」	広島県三次市	〈九州・沖縄〉 でんでん安の会	熊本県
大賞	河原部社	山梨県韮崎市	九州教員グループ	長崎県長崎市
準大賞	三崎高「せんたん部」	伊方町	共創アート賞	盛岡市
優秀賞	「石徹白洋品店」	岐阜県岐阜市	ハラルポニー	盛岡市
中国・四国ブロック賞	「元気むらさき」	広島県三次市	森野委員長賞	岡山県岡崎市
大賞	河原部社	山梨県韮崎市	ハーモニーネット未来	岡山県岡崎市

世代超え誇り未来へ

地方新聞4紙と共同通信が運営する「第12回地域再生大賞—未来へつなぐ、みんなで」の各賞が決まった。長く新型コロナウイルス禍の中、地域を持続・発展させるべく、柔軟な取り組みがそろそろ。そして誰ひとり取り残さず人々を守り、未来へ育てる思いも、世代を超えて強い手がつながり、地域の誇りを引き継ぐ動きは、確実に全国に広がっている。(3面参照)

「第12回地域再生大賞」各賞決まる

第12回地域再生大賞の審査は50団体の書類審査と現地視察で進められた。審査員は、各賞の審査員として、地方新聞4紙と共同通信が運営する「第12回地域再生大賞—未来へつなぐ、みんなで」の各賞が決まった。長く新型コロナウイルス禍の中、地域を持続・発展させるべく、柔軟な取り組みがそろそろ。そして誰ひとり取り残さず人々を守り、未来へ育てる思いも、世代を超えて強い手がつながり、地域の誇りを引き継ぐ動きは、確実に全国に広がっている。(3面参照)

中高生の夢実現後押し



河原部社の活動拠点「ミアキス」で開催された中高生に古着を譲るイベント。2021年12月、山梨県韮崎市

「ミアキス」は、河原部社が運営する、山梨県韮崎市の活動拠点。ここでは、中高生に古着を譲るイベントを開催している。このイベントは、中高生が古着を譲ることで、環境保護の意識を高め、社会貢献の経験を得ることを目的としている。

大賞 河原部社

山梨県韮崎市

河原部社は、山梨県韮崎市の活動拠点「ミアキス」で開催された中高生に古着を譲るイベント。このイベントは、中高生が古着を譲ることで、環境保護の意識を高め、社会貢献の経験を得ることを目的としている。

受賞団体の顔ぶれ SDGs 加味して審査

SDGs 加味して審査

第12回地域再生大賞の審査は、SDGs（持続可能な開発目標）を加味して行われた。審査員は、各賞の審査員として、地方新聞4紙と共同通信が運営する「第12回地域再生大賞—未来へつなぐ、みんなで」の各賞が決まった。長く新型コロナウイルス禍の中、地域を持続・発展させるべく、柔軟な取り組みがそろそろ。そして誰ひとり取り残さず人々を守り、未来へ育てる思いも、世代を超えて強い手がつながり、地域の誇りを引き継ぐ動きは、確実に全国に広がっている。(3面参照)

まちおこし住民と共に



三崎高「せんたん部」(伊方)

三崎高等学校「せんたん部」は、伊方町で活動している学生団体。この団体は、地域の活性化と住民との連携を目的として活動している。また、社会貢献活動にも積極的に参加している。

準大賞

伝統作業着を全国発信

石徹白洋品店(岐阜県郡上市)

石徹白洋品店は、岐阜県郡上市にある洋品店。この店は、伝統的な作業着を全国に発信することを目的として活動している。また、地域の活性化にも積極的に参加している。

優秀賞



多彩な業務一手に担う

元気むらさき(広島県三次市)

元気むらさきは、広島県三次市にある企業。この企業は、多彩な業務を一手に担うことで、地域の活性化と住民との連携を目的として活動している。

優秀賞

三崎高「せんたん部」(伊方)

三崎高等学校「せんたん部」は、伊方町で活動している学生団体。この団体は、地域の活性化と住民との連携を目的として活動している。また、社会貢献活動にも積極的に参加している。

準大賞

伝統作業着を全国発信

石徹白洋品店(岐阜県郡上市)

石徹白洋品店は、岐阜県郡上市にある洋品店。この店は、伝統的な作業着を全国に発信することを目的として活動している。また、地域の活性化にも積極的に参加している。

優秀賞

多彩な業務一手に担う

元気むらさき(広島県三次市)

元気むらさきは、広島県三次市にある企業。この企業は、多彩な業務を一手に担うことで、地域の活性化と住民との連携を目的として活動している。

2022年1月30日付 愛媛新聞

三崎高「せんたん部」

地域再生大賞 優秀賞を受賞

三崎高等学校「せんたん部」は、伊方町で活動している学生団体。この団体は、地域の活性化と住民との連携を目的として活動している。また、社会貢献活動にも積極的に参加している。

準大賞

伝統作業着を全国発信

石徹白洋品店(岐阜県郡上市)

石徹白洋品店は、岐阜県郡上市にある洋品店。この店は、伝統的な作業着を全国に発信することを目的として活動している。また、地域の活性化にも積極的に参加している。

優秀賞

多彩な業務一手に担う

元気むらさき(広島県三次市)

元気むらさきは、広島県三次市にある企業。この企業は、多彩な業務を一手に担うことで、地域の活性化と住民との連携を目的として活動している。

「石徹白洋品店」

伝統作業着を全国発信

石徹白洋品店は、岐阜県郡上市にある洋品店。この店は、伝統的な作業着を全国に発信することを目的として活動している。また、地域の活性化にも積極的に参加している。

準大賞

伝統作業着を全国発信

石徹白洋品店(岐阜県郡上市)

石徹白洋品店は、岐阜県郡上市にある洋品店。この店は、伝統的な作業着を全国に発信することを目的として活動している。また、地域の活性化にも積極的に参加している。

優秀賞

多彩な業務一手に担う

元気むらさき(広島県三次市)

元気むらさきは、広島県三次市にある企業。この企業は、多彩な業務を一手に担うことで、地域の活性化と住民との連携を目的として活動している。

2022年1月30日付 愛媛新聞

本館全焼の伊方・亀ヶ池温泉

再建へ若者アイデア続々

三崎高生と大学生 理想像探る



亀ヶ池温泉の再建についてオンラインで大学生らと意見交換する三崎高校生

昨年8月に本館が全焼した伊方町健康交流施設「亀ヶ池温泉」(同町一見)の再建について、三崎高校の生徒と地元出身の大学生がこ

のほど、オンラインでグループディスカッションした。「写真映えるスポットが必要」「地元ならではの体験スペースがほしい」など若者らしい自由な意見を交換。今後、町

の再建検討委員会に提案する。住民に愛された温泉の再建を応援しようと町と連携協定を結ぶ愛媛大が企画。三崎高1〜3年生9人と愛媛大、松山大などの学生8人が5日、3班に分

かれて議論した。町職員や設計業者も視聴した。

三崎高3年谷本賢信さん(18)、1年の成本奏さん(16)と島本彩音さん(16)のグループは大学生に導かれながら火災前の施設の課題を出し合い、再建後の理想像を探った。

3人はアクセス道路が分かりにくく、温泉以外の体験型の楽しみが少なかったと指摘。「道をライトアップしてほしい」「三崎高校生が漂着アイに色を塗って作っているアートを来客に体験してもらい、作品を道に並べてはどうか」などアイデアを示した。

町は再建について昨年9月から住民代表らによる検討委で議論している。温泉は4月1日の仮営業再開を予定している。

(今西晋)

2022年2月11日付 愛媛新聞

地域再生大賞優秀賞を受賞した三崎高校「せんたん部」の部員。18日午後、松山市大手町1丁目。



地域再生大賞 三崎高に優秀賞贈る 松山で「町への誇り受賞に」 伝達式

地域に活気を与える団体「生大賞」の表彰状伝達式が、松山で「町への誇り受賞に」を支援する「第12回地域再生大賞」の愛媛新聞社であり、優秀賞に選ばれた三崎高校「せんたん部」(伊方町三崎)に表彰状などが贈られた。

地域再生大賞は愛媛新聞など地方新聞46紙と共同通信でつくる実行委員会が主催。都道府県ごとに地域貢献に取り組みNPO法人や企業など1、2団体を推薦し、計50団体が各賞を受賞した。

三崎高校「せんたん部」は2017年度に発足。3年生5人を中心に過疎化が進む地域と連携して、イベントや商品開発といったまちおこしに取り組んだ。活動は、分校化の危機にあった同校の魅力を創出し、入学者数の増加にもつながっている。

伝達式では、愛媛新聞社の土居英雄社長が表彰状と

盾を手渡した。盾を受け取った大西友海さん(18)は3年。「伊方町全体が三崎高校を応援してくれた。活動を通じて地域の人と関わることができ、生徒が伊方町を誇りに思う気持ちを持てたことが受賞につながったと喜んだ。」
3年生部員は卒業を控えている。その一人、島田晃佑さん(17)は「後輩には、感謝を忘れず、常に地域の課題に目を向け、できることをひとつずつ続けていくことを伝えたい」と力を込めた。
(尾上芽吹)

活動成果見て触れて

地域団体 八幡浜で交流発表会

南予の地域活動団体の交流発表会が13日、八幡浜市沖新田のみなと交流館であり、町おこしに取り組む学校や音楽に親しむ住民グループなどが活動報告の発表や体験会を催して市民と交流した。

新型コロナウイルスの影響で制限される市民活動の

2020年夏に発足した

歌三味線グループ「八幡浜むりかぶし」は、沖縄民謡の弾き歌いで軽やかな音色を披露。三崎高校(伊方町)



地域活動団体との交流で沖縄三線を体験する親子連れ

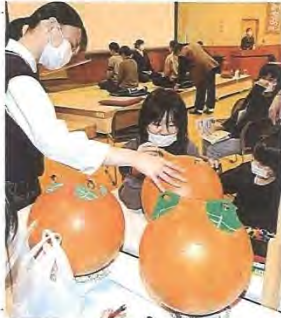
三味線やブイアート披露

せんたん部は海岸漂流物に絵を描く「ブイアート」や地元伝統の織物「裂織り」を使ったバッグやシュシュなどの商品開発の取り組みを紹介した。

体験会では来場者が各団体から手ほどきを受け、活動の一端に触れた。三崎高生による裂織り体験が楽しかったという八幡浜市八代中1年大森裕季さん(13)は「想像より簡単にできたし、隣の伊方町の伝統だと初めて知り勉強にもなった」と振り返った。

「八幡浜むりかぶし」の会員の上杉友子さん(50)は「直接楽器に触れてもらい、興味を持ってもらえよかったです」と話していた。

(門屋駿介)



三崎高校の生徒(左と二)と一緒に海岸漂着しみに絵を描く「ブイアート」を楽しむ参加者

2022年3月15日付 愛媛新聞

